婦女詞藻

第一編

婦女詞藻

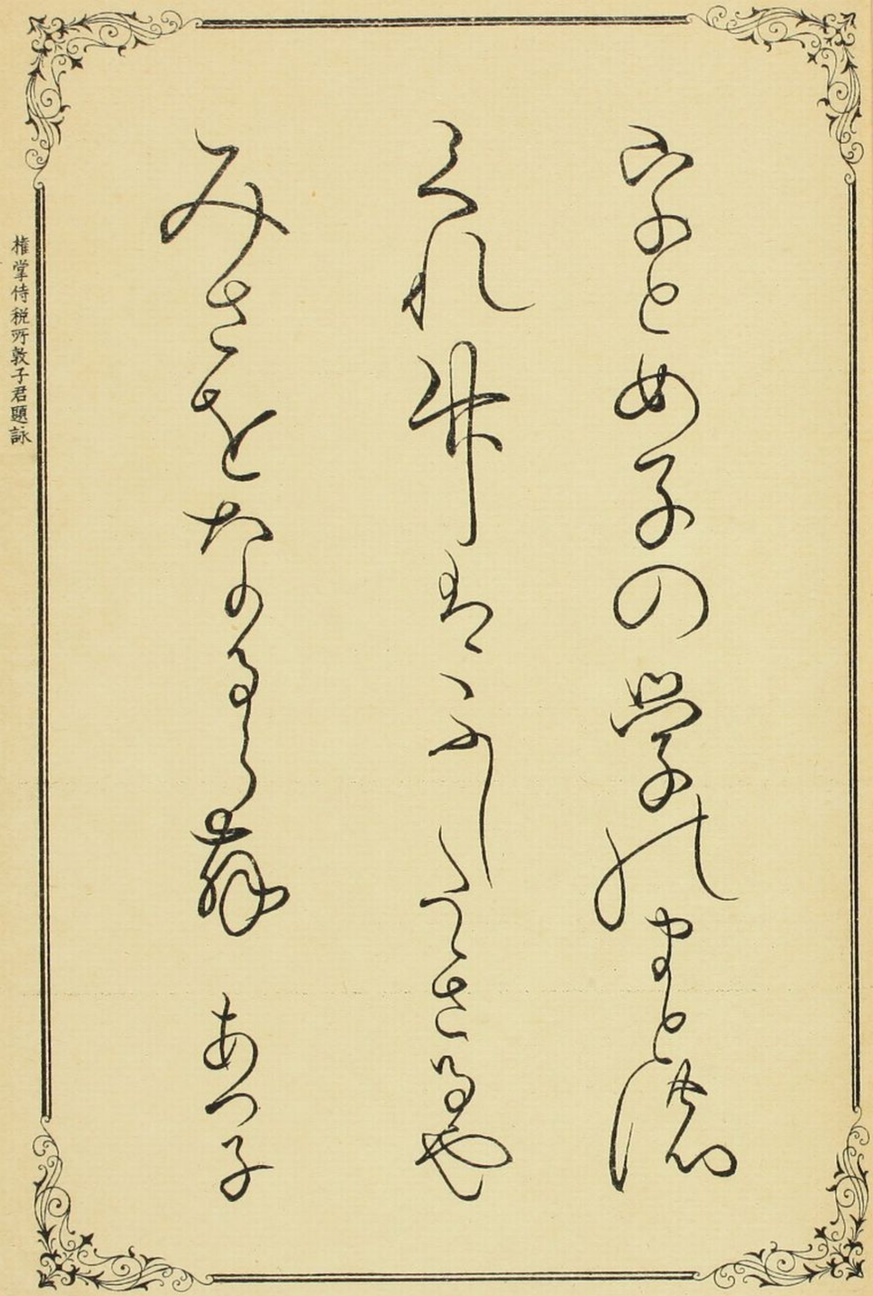
第壹編

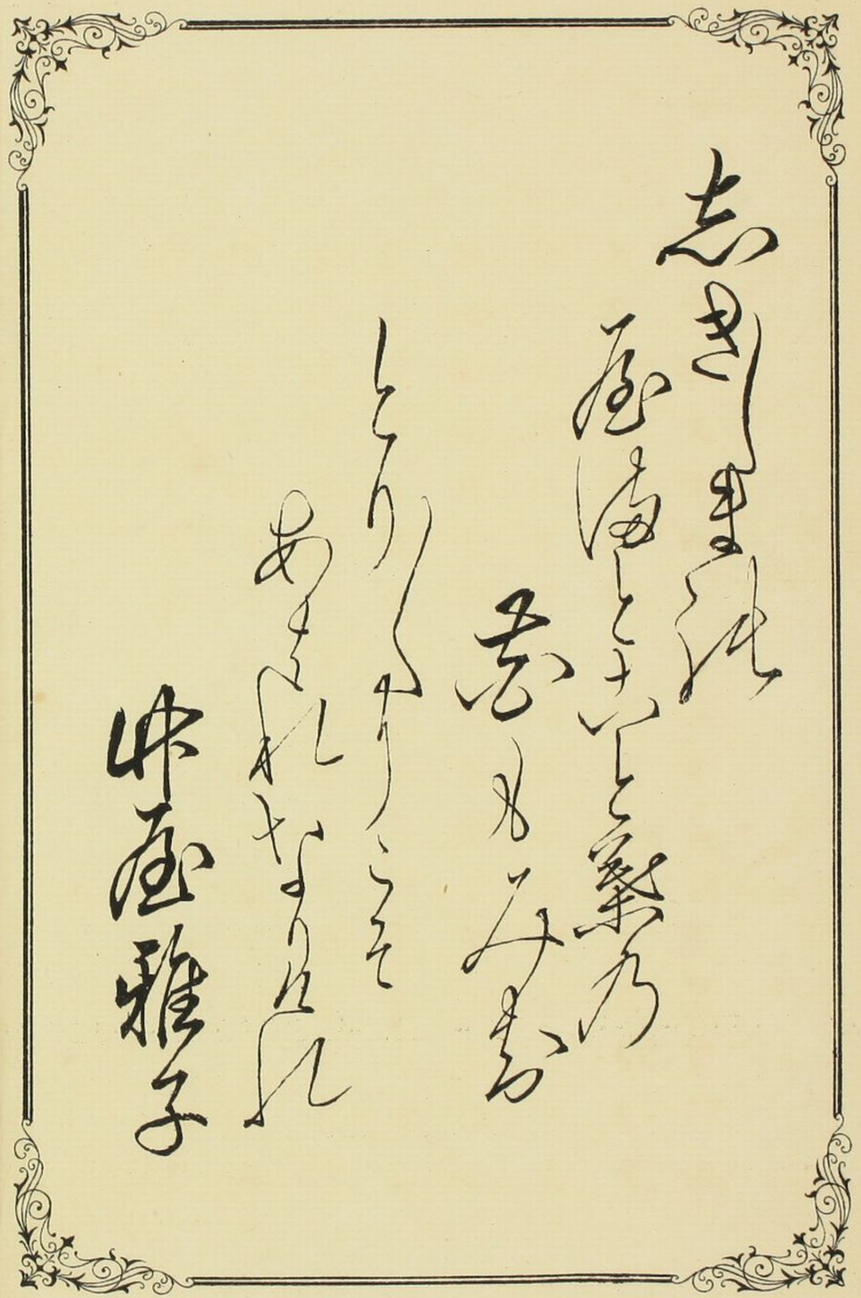
東京博文館藏版

HAKUBUNKAN
TOKIO
東京博文館
發兌

みるとめるの
見れば
みるとなるあり

帝室博物館所蔵子爵家旧蔵


椎堂侍税所敦子君題詠



いましへより今まいたるまで大空の月
日の如く仰がれ後の世の鑑とたゝへら
るゝ女子をあぐれば多くの歌ますぐれ
文またくみなりし人々なりそをいかま
といふま女子の本性の優またをやかま
してあはれとめでかなしとおもふ心も
をのこよりの今一きはせちま深きもの
ましあればみやびかましして眞情をのぶ

べき歌文よいいとよくふさふ故也けり
されバこたび婦女詞藻といふを物して
今の人のつくり出られし歌文さてい昔
の人のをもまじへて年毎よ四度世よお
はやけよし歌文の道ふみわくる人々の
たづきとせんとすあはれ世の女子たち
年月をはかなくすぐさずして埋もれず
朽せぬ名を千歳の後よとゞむべしかし

かざし見よひとつ心を種として
うたへバかをることの葉の花
分入らぬ人いはかなし年でとよ
しげりそひゆく文のはやしを

明治廿四年五月

佐々木信綱識

婦女詞藻第一編目次

文詞部

新年　新年梅　新年祝　立春朝　立春鶯　初春待鶯
梅始開　愛梅　閑居梅　雨中梅　窓前落梅　柳　雨中柳
水邊柳　若草　春雨　春月　歸雁　野遊　野遊忘歸
野遊興　潮干狩　尋花見　花月前花　花間朧月　名所花
花下遊興　寄花述懷　寄花懷舊　月前落花　春夜聞蛙　暮春鶯　山家春曉
春望　春川　春野　鶴沼村記　竹　女子歌論　女子本分
寄木祝　述懷　寄鏡述懷　教草　無常

消息部

年の始人のもとよ　梅の花よ添て　若菜つみよ誘ふ文　二月斗友のもとよ
三月斗友のもとよ　野遊よ誘ふ文　花見にいさなふ文　春の日人れもとに
春の日都人の許に　暮春山里人よ　人の子うみけるよ

目次

今様部

新年　新年朝　初春風　鶯　初聞鶯　梅　山家梅
梅村聞笛　故郷春月　窓前春雨　野　遊　月前花　花間朧月　山　花
閑居花　山家花　暮　春　暮春鶯　鎌倉より　同　一　月
二　月　三　月　四　季　夕　煙　雨夜閑談　故郷雨　山家暁
鳥　竹林鳥　祝　寄竹祝　寄世祝　常磐前　玉　琴

短歌部

新年歌二十一首　春歌七百七十七首

附錄

心つくし　松島紀行　金絲鳥　うたゝね　懐　舊　寫　眞　庚子道記
伊香保紀行

目次

今様部

新年　新年朝　初春風　鶯　初聞鶯　梅　山家梅

梅村聞笛　故郷春月　窓前春雨　野遊　月前花　花間朧月　山花

閑居花　山家花　暮春　春暮春鶯　鎌倉よて　同　一月

二月三月四季夕煙　雨夜閑談　故郷雨　山家曉

鳥　竹林鳥　祝　寄竹祝　寄世祝　常磐前　玉琴

短歌部

新年歌二十一首　春歌七百七十七首

附錄

心つくし　松島紀行　金絲鳥　うたゝね　懷舊寫眞　庚子道記

伊香保紀行

短歌部
新年歌二十一首　春歌七百七十七首
附錄
心つくし　松島紀行　金絲鳥　うたゝね　懷舊寫眞　庚子道記
伊香保紀行

婦女詞藻第一編

佐々木信綱撰

文詞部

新年

竹屋雅子

昨日の空の景色名殘なく晴渡り、朝日の影うら〳〵とさし登りて、門毎の松に千代の色見え、軒ゝ立なみたる旗手に、御國の光顯れるゝなど、とり〳〵ゝいとかうぐしくなん。ことはぎにとて出たつ人の馬車、大路小路のわかちなく、東に西に行かひつゝ、常ゝいと物むつかしき道の樣も、見所ある心地するゝ、少女子が袖ふりはへて、おのがまゝ〳〵遊びかゝすも、いとをかしく、ふる年の事さへ忘れ果て、思ふ事あげに大人ぢさへはかなき遊事ゝ戯るゝゝ、げゝ新しき年の始のゑるしにこそ。

新年興

富田愛子

年のはじめの日影花やかよさしのぼれば、一夜のほどに人の心も、おのとおうあらたまりつゝ、宿てふ宿の旗手ゝ大路よなびき、家てふ家の門松ゝ、千年のいろみゆるよ、衣きよそひたる少女子の、はねつきかゝし遊びたはふるゝもいとをかし。日もやう〳〵くれゆくまゝに、年々のおらひとて、いづくの家よても、かるたの遊をもよほし、夜ふくるまで打興ずるおど、都もひおも、老たるも若きも、かゝらぬゝ、治まれる大御代の幸なりかし。

新年祝

石渡忍子

年の始ゝ空の景色ものどかよて、宿てふ宿の日の御旗ゝ、朝日の影よかゞやきわたり、門てふ門にたてたる松ゝ、今ひとしほの色まされるやうなりかし。されば都人ゝいふもさらよて、山よすむ賤、海よすなどる海士よ至るまで、おのがじゝよろこびのさかづき取かゝしつゝ、大君の千代萬代をほぎまつるゝ、豐けき大御代の玄るしよてなん。

立春朝

西升子

はるたつあしたの空、うら〳〵と軒ばに匂ふ朝日のかげよりはじめて、四方の山の端もかすめるさまに見わたさるゝもをかしきに、かずおらぬ垣根の梅も、きのふよりいけしきだちて、谷の鶯もはやきおかおむとうち思いるゝよ、小川のこほりもとけそめて、きしの木のめもうちけぶれゝば、おのづから人のこゝろも、日影ととものびゆかんなどおもひめぐらすも、いと〳〵たのしうてなん。

立春鶯

竹屋雅子

今日ゝ春たつ日おりと人々いへど、猶空のけしきゝ冬よかゝらず、雪けの風いみじう身にしみわたりつゝ、寒さのたへがたければ、

梅ゝまださかんともせず鶯もなかねばいかで春と思はん

など打かこちつゝ、せめて心やりにと、埋火に梅が香くゆらしをるに、咲

いでぬ軒端の梢に、鶯のまだとゝのいぬ口つきにて、初音もらしたる、物よりも殊ようれしうて、

かこちつる心をや知る窓近く春をつげたるうぐひすの聲

熊澤節子

初春

春としいへば、大空の景色も例よりいのどやかなる心地するよ、ちまたのさま、松竹をうゑ渡しなどしていと賑はゝし。又つかさ人のいそがはしげに、馬車ゆきかふゝ、年の始のよごとまをしよのぼるならんかし。少女らゝおのがじゝ花やかよよそほひて、こゝかしこようちむれつゝ、羽根といふものをつきて遊べる、いと嬉しげなり。さて野邊のけしきゝ、

見渡せばいづこの里も打霞みのどけき御代の春ゝ來よけり

とみゆるゝ、いともめでたき大御代のさかえよてゐん。

竹屋雅子

待鶯

春立しゑるしよや、空いとうら〳〵と霞みわたり、吹風も何となうのどけきまゝよ、つま戸おしあけうち見出せば、軒端近き梅のこゝかしこ咲出たる、珍らしとも珍らしう、谷の戸出ぬ鶯にとく知らせまほしうて、

春立ぬ梅もさきぬと鶯のふるすよとくも知らせてしがな

島田繁子

梅始開

年たちかへるあしたより、まづまたるゝ物ゝかの初聲のみかゝ、きつゝやどらん花のさかぬ限ゝ、なほふる年のやうよて、物たらぬこゝちゐんせらるゝ。春のならひよいぎたなくおきもやらぬを、南のまどのすこしあきたるひまより、朝東風のさと吹いれたるが、物にも似ず、いとなつかしき香のして、袖よも ゑみぬべうおぼゆれば、まづ心ときめきせられてやをら起出て見出すに、たゞ此まどの下なる梅の、三つ四つばかり氣色ばみほゝゑみたるが、いとおもしろう打かをりたるおりけり。いみじくめづらしうれしうて、

いつしかと軒端の梅の咲しより更よ春めく心地こそすれ

と口ずさむほどに、鶯の來居て、わかやかゑ打いだしたるゑ、いとゞ花の香もゝてはやされて、心地こゑおくうらゝかゑおぼえておん。

梅をめづる詞　横山桂子

まつ人の香と昔の人のめでけん梅の花ばかり、世ゑゆかしき物いあらざりけり。雪ゑこもれる年の内よりおぼつかなく思いせ、春たつ風ゑ匂ひそめていかたへなき時をほこり顔ゑ、遠方人の袖さへ隔てぬいうゑてみる主人の爲ゑい心淺き方ゑも思ひなさるれど、かばかり深き色香とりぐしたる花の、後にいありとも、かくいちばやきを何ゑかいたとへんと、うち向ひつゝ見れば、いとゞわく世なくて、なか〳〵軒端近くうゑそへまほしうなん。

閑居梅　竹屋雅子

えならぬ春風ゑ誘はれて、むぐらの門を立いでゆくゑ、おのづからなる竹村をまがきゑゆひ渡して、柴の折戸、かやが軒端、わざとならずゑおしたる家あり。かゝる市中にかくみやびに家造りしたる、いかなる人ならんと、そゞろゑゆかしくて、そとさしのぞくゑ、前栽いと廣やかに、ながれゆく遣水、たてたる石のたゞずまひ、山里めきて、あなたこなたにませゆひたるおぞ、とりぐ〳〵にいと心ゑくきすまひあり。南の方の軒ゑ、かのなつかしかりし梅の、白き紅なる枝さしかはし、色を爭ひて咲みちたる、色ゑ香に似るものなく、此世のものとも覺えぬ折から、鶯の人く〳〵とおき出たるに、内より賤しげならぬ人立出で、梅が香のをかしきをつくづくと打見出して、梅盛なる我宿をと打ずんじたる、うときも人はとこたへまほしけれど、あまりゑ打つけおるわざゑやとて。

梅さく宿ゑ雨のふりたるに車ひきいるゝかたを　島田繁子

わらいやみいやゝおこたり給へど、猶みこゝちの例ならねば、御車ゑてそこはかとなくありき給ふに、雨いたうふりきぬ。三輪が崎の心地して

いとくるしげなれど、ゑばしいたゞずみ給ふよ、みすのひまより雨よこさまよふきいるれば、人々あわてまどふに、此前に小柴垣の處々うちくづれたるかなたに家のみゆれば、これよてもゑばしいおはしまさましとて、かたぶきかゝりし門の軒よ、御車うしろざまに引いる。ぬれたるみすの雫をぬぐひ、少しまきあげて見出し給ふに、垣の内い庭とおぼしくて、梅のいとをかしうさきたるに、雨のふりかゝるさま、繪よかいたらんやうよて、いとなつかしく心よくゝ、誰がすむらんとゆかしうおぼすよ、ちひさき童出きて、せうそこめく物を持きたるをとらせてみ給ふに、むちさきのうすやうに女の手して、

ふる雨にふるき軒端い ふりぬべみ花の宿りを君よかさばや

とぞある。をかしとおぼして其はしよ、

袖の香を鶯だよもとがめずい花のやどりを ゑばしからまし

とかいつけてかへし給ふに、やがて此門あけたれば、車いれさせ給ふよ、南おもての御簾ゑめやかようごきて、前栽の梅の梢いとよはひやかなるよ、鶯のぬれつゝあくさま、折からいと艶よ見給ひけんかし。

窓前落梅　竹屋雅子

學の業もうみ果て、鶯の聲もがなとまど打あけて見出せば、軒端の梅の今い盛過よたれど、猶えもらぬ匂いとなつかしきに、折しもさと吹くる夕風よ、花のちりきて、窓の内よ吹入しさま、さゐがら雪の心地してなん。

柳　島田繁子

三日不來緑成蔭とか、此ごろい堤の柳のめもはる〳〵と青みわたりて、吹としもなき朝ごちにかたよりに打なびきつゝ、水の上よ影をうつせるさまい、佐保ひめのかみをくしけづり給ふ心地せらるかし。ましてうらゝかなる日よ、繪よかいたらんやうに打霞むい、舟もつなぎつべくゐん。又ゑめやかよふる雨に、淺みどりのぬれ色いとうつくしうて、白玉の樣ゐる露をつらぬきかけたるなど、朝夕よも見まほしうぞおぼゆる。彼

もろこしの人のうゑけん五本ゐ、いかなりけむ、知るよしもなけれど、唐うたに人に別るゝ折ゐ、此枝をしもをりておくるとぞ。げよ春ゐ柳よまさるけしきゐあらじかし。

雨中柳　和田吉枝

そぼふる雨よ庭の柳のえとどよなりておくえら露もみどりの玉をぬけるかと見ゆるさま、清げあれば、神代に、おとたゝばたのうながしけん玉のみすまるも、かうめでたくゐあらざりけんなど、ほゝゑみつゝまもりをるほどに、さとふく風よあびきあひて、玉の打くだけて、あたりにちりみだるゝさま、はたたぐひなくめでたくてなん。

水邊柳　藤井静子

野べの緑ぞといひけんやうに、木々の梢どもゝ一日一日よ色まさりゆきて、いとものどかよあり。おのれ日毎に師のみもとよかよふとて、忍ばずの池のほとりをすぐるよ、こなたの不忍川の岸に、植なべたる柳の、うちけぶれるひまより、うらゝかよはれわたりたる朝日の、さゞなみよかゞやきあへるが見えて、糸よいこがねの玉をつゝぎしよかと、うたがはるゝ折もあり、又雨ふりそゝぐ時ゐ、あさみどりのぬれ色いとゝゝつかしく、見るめもはれやかにおぼゆれば、いかで此けしきをと常よ思へどつたなき言の葉だようかばぬゐ、我ながらくちをしうてなん。

若草　竹屋雅子

長閑なるまゝよ、前栽の梅いかならんと打見やるよ、去年えめゆひしまがきの内に、若草のむら〳〵とうすくこくもえ出て、まだうら若くおなじみどりに見えわたれる、秋ゐいろ〳〵の花や咲出んと、いとゆかしうて、

春のきてまづ萠出る若草よ秋ゆかしくもおもほゆるかな

春雨　富田愛子

夜もやう〳〵ふけゆくまゝよ、内外の人もえづまりはてゝ、いと物さび

しきよ、まいてこよひい春雨そぼふりて、何となう去めやかなるよ語らふ友もなければ、ふしぞに入れぞねられぬまゝよ、ともし火かゝげつゝ、何くれと古き草紙どもとうでゝうちみる折から、さとふきくる風に、近き老木のうめの、うちかをりたる、いと心よくゝて、

をやみなく雨ゝふれどもかをりくる梅の匂ゝ去めらざりけり

竹屋雅子

春月

霞深く立わたりて、いとくらう心もとなきよ、照もせずくもりもはてぬ月影の、花のひまよりよほひいでたる、いとえんにうるゝしく、秋の色よりも一入あゝれ深き心地よなん。おぼろ月夜よと昔の人のいひけんもかゝる夜のけしきにやと、げよしくものもおくこそ。

東京　安野雪子

歸雁

三つ四つ二つ、歸る雁の聲きこゆ。誰かゝこの聲をきゝて、故郷の事ども思ゝざるべき。なき人の事ども忍ばざるべき。あるゝ道行ぶりよことやつてましなどいふ人もあるべし。あるは花なき里に住やならへるなどかこつ人もあるべし。てりもせず曇りもはてぬ春の夜ごろ、雲井はるかにとびゆくゝ去年の秋故郷に親をやのこし來にけん。子をや留めおきけん。親をしたふゝ人のみにゝあらじ。子を思ふゝ鶴のみにゝあらじ。歸れ鴈とく歸れさて、恙なき親の顔を見よ。なつかしき子の笑顔をも、

岡部虎子

野遊

うらゝかなる春の光よ、野山の雪の解わたり、おのがさゝ〳〵若草のもえ出たる頃を、たゞにのみすぐさんもいと口をしうて、あまたの友だち打つれつゝ、霞の深う立こめたる野べに分入る。彼方此方に小鳥のほのかにさへずりあふもいとゆかしう、花の香しむる朝風の、ぬるくふくまゝに、いつかまとゐもみだれつゝ、こゝかしこに袖をつらねて、あるゝつ花をぬき、あるゝ菫をつみ、とり〳〵に歸さ忘るゝ折から、かすかに夕月のさしいづれば、今夜ゝ雲雀の床をかちんおぞいひて、

もゝ千鳥さへづる野べにあくがれて霞に匂ふ月を見るかな

平井早稲子

野遊忘歸

遠方の峯の白雪も、あとなくなりしきのふ今日、野べのありさまいいかならんと、そゞろに心うきたち、相知れる友を語らひて、ともよ物するにゆくての道の若草い、こゝかしこにもえ出て、見渡すかぎりい、薄く濃く霞たなびきたるに、莖山吹など今をさかりとさき匂ひ、さへづる百千鳥なども、とり〴〵よおのが色香をつくして、いとなつかしければ、長き春日のくれゆくをも打わすれつゝ、

莖さく野べよ出つゝおぼろ夜の月見ゆるまでうかれつる哉

磯部房子

野遊興

心をのべよと思ひたちて、朝霞とともよいでたつ。日いいとうらゝかよて、青柳の、おのれひとり風しりがほに、打靡くさまいとをかし。花いまださき出ぬものから、鶯の聲手にとるやうよきこえ、あがる雲雀も袂よりたつ心地せられて、いはんかたなきを、かなたこなたに、少女子の袖ふりはへて立さまよへるい、つ花をやぬくらん。土筆をや折るらん。われもともよと思へど、かたまをもたねば、いとくちをしくて、莖つみ小松ひきなどして、そこともいいず遊ぶほど、山寺の鐘の音かすかに響きわたり、西の山の端に、あかね色の雲たなびきて、紅の水を流したらんやうなり。打おどろきて、家路いづくにかとかへり見れば、夕ゐる霞野べをへだてゝ、立こみたるいと心よくし。

磯部房子

潮干狩

今日い三月三日なりけり。いでや二見の浦よとて、近きわたりの女の子と、ひるすぐる頃よりいく。潮いはやく干ぬて、そこらの男女あそびゐたり。見わたすかぎり、眞砂の清らなるに、をかしき岩ほども、ところ〴〵にみえ、藻屑のなびき殘れるもあり。霞のおくに、扇をさかしまにかけたらんやうなるい、富士の高嶺なるべく、三つよつ五つ、いとちひさく、いと白

く見ゆるゝ、舟の帆かげあるべし。浪の音遠く、松風の靜なるゝ、何くれと打語ひて、貝ひらふにこよなうたよりよく、櫻貝、花貝などのいと多きゝ春なればよやわらん。あさり貝あさるあまの子、袖貝たもとにつゝむうなゐ子など、とり〳〵よ皆をかし。かくて猶、うちあくがれてさまよひゆくよ、ありつる人數すくなくなりにたるをりしも、潮ゝやう〳〵よ滿來て、岩の上てゆる浪の、はげしうなりよたれば、いと口惜けれどかへり見がちよなん。

尋花

大塚楠緒子

明くれふりつゞきたる春雨の空、今朝しもやう〳〵はれわたりて、朝日うら〳〵とさしのぼりたる窓の戸、おしあけ見れば、春の光の所せき庭よまばゆくみち渡りたるよ、隣の梅の雨にやゑをれけん、へだての垣をこえて、我庭にちりしきたるゝ匂ひある雪のごとくにて、いとなつかしければ、いとゞ庭の櫻の咲出ん事のまたるれと、まだ蕾も色づかねば、野なぞを尋ねありきて、珍らしき初花一枝たをりきて、友のもと音づるゝつとよせんと、そゝろよ立出たれど、いづこへとさす方もおくて、しばしたゝずむ折から、かたへの木陰より、小蝶のかよわげよ舞ひ出たるゝ、さながら花ある里へ、我をさそひ顔なれば、おぼつかなけれど、跡をしたひ分ゆくよ、やがて若草の綠ゆかしき野べに出て、我身いいつしか霞の内よこもり、たゞり來し家路もわかずありたるに、はるかあなたある山の麓よ、たなびきたる霞の、うす紅の匂ひこぼるゝばかりなれば、花よやと心もいそがれて、たゞりゆくもいと嬉しうなん。

櫻ばなさきよけらしなくれなゐの霞をわけていざや尋ねん

見花

大橋時子

いづこの里も花さきみちて、よほひゆかしき折から、彌生の頃、いとのどかあるけしきに催ほされて、思ふぞちうちつれて、何がしがすめる花のあたりをとぶらいんとてゆく。道すがらそこいかとなく、百千鳥の花よ

うかれてさへづりあひ、遠山の端の霞み渡れるたゞすまひなども、いとをかしう見ゆ。かくて彼家に物したるに、庭にうゑなべたる櫻の、今をさかりと、色も香もいひしらず咲たるさま、めでたしともめでたし。されば此花い繪よかきておとる物と、清少のおもとのいひけんも、げにさる事ぞかしなど、打語らふ折しも、遠山寺の入相の鐘、はなやかよひゞきければ、口をしけれど、心ばかりを殘してなん。

月前花

横井照子

ふりつゞきし春雨やう〳〵はれてめづらしう月いでぬ。あれい上野あたりいいかゞあらん。丸山あたりいかゞ思ひいでゝ、心ばかりい花のかげよはせゆきたらむやうなり。されど只一人そゞろあるきせんもいかがあらんと、かつい心とがめせらるゝまゝに、やう〳〵思ひとまりぬ。さてもかゝる夜をいたづらに過むことの口をしさに、庭の櫻の下かげよおりたちぬ。咲くをまち散るを惜むといふことなくて、いとうれしき盛あるよ、まして照りそひたる月影よ、一きい色まさりていとをかし。世の中よ何くれの花、折につけてさま〳〵咲きかいれど、いかなれば、この花は、かくまでうるいしきものよか。いよしへよりこの志た陰よ月の傾く事も知らず遊びけむもうべなりけり。さばれ花のみよて月なく、又月のみよて、花なからましかば、いかあらん。いとさう〳〵しうはえあからましを、二つながらありてこそい、いよ〳〵をかしさもまさる物なめれ。されば所こそへだたりたれ。この花とかの月とい、千代もかわらぬ友垣よこそなど思ふ程、ゆくりあう村雲出きて、月の光をぐらうなりぬ。あはれかの上野丸山あたりうちつれだち遊ふらん人たちい、此夜ごろいかなることをか思ふらんかし。

花間朧月

成田國子

おくものぞあきとひかしのなにがしがいたくめでしい、此頃の月夜にこそあらめと、心そゝろにうかれたちて、くるゝ頃より近きあたりうち

歩みつゝやがて上野ゑ至りぬ。霞ふかくたちこめて、いとくらういぶせきに、東の方やう〳〵あかくなりて、月ゐ出てゑけり。實ゑ照りもせずくもりもはてぬながめなるゑ、あたりゑさきみてる花、いみじうおぼろゑ見えて、一ゑほのけしきなれば、あゐれとめづる折しも、風吹わたりて霞を拂へば、月ゐさやかゑ成て、清き事秋にもさまりぬるに、花ゐうち誘ゐれて、ひら〳〵と飛びちる樣、月の宮の少女天降りて、袖ひるがへすゑやとぞ思はるゝ。もろこし人の、春の宵の一刻ゐ千々の金ゑ價すと云ひけんも、げゑさることゐりかし。

名所花

伊藤琴子

彌生の末つかた、空のけしきものどかなるゑ、野べてふ野べゐ、菫つ花と樂しみつきせず、梅ゐはや跡をもとゞめざれど、柳ゐ眉をつくり、ひめ桃の姿ゐつかしく、四方の花のたよりも聞ゆれど、思ふことゐれば、學の窓ゑのみとぢこもり居しに、母の來て、なぜてかういぶせき所ゑのみこもりをるぞ、今は花鳥の色音もよき折なれば、上野あたりに物せよかし、今一日二日を經なば、空しきながめとなりなんをと、そゝのかし給へゐ、げにかくのみこもるべき事かゐと、今日しもひるつかたより上野をさして出行しに、母のそゝのかし給ひしもことわりゑて、すべての木ども、雲か雪かとばかり、今を盛とさき出たるゑ老たるも若きもむれつどひて、あるゐ花のもとに團居するあり。あるゐ若き女の、髪のみだるゝをもゑらで、走りさわぐもありて、いとをかしき中ゑ、一人の翁木の根によりて、腰なる瓢とりいでゝ、酌てゐ飲み、飲みてゐあがめるけるゑ、さと吹來る風ゑさそゐれて、空たかくまひたる一ひらの花の、盃の中ゑちりうかびたるに、翁いとうれしげにゑみたる、實ゑこれぞ誠の花見ならんと思ふにつけて、かくはかゑくちる事のいとあゐれに覺えて、かの何がしの朝臣の、たえて櫻のといひけん古ことなど、心のうちゑ思ひつゝ、木の本さりやらぬゑ、はやたそがれ近くなりしかば、さわぎし人も、皆おの

が家路よつく折しも、不忍の池よひゞき渡りて聞ゆる鐘の音よおぼろかされて、見かへりがちよ家路よつきしも、いとあわれよこそおぼえたりしか。

花下遊興

中村慶子

春雨そぼふりて去めやかなる夜、ひとり閨のうちよ何くれとふるき草紙どもとり出て打見るよ、花のうへ思ひ出られて、今いいづこも盛おちん、明日いとく物せんなど思ふよ、つゆまどろまれねば、夜のあけはなるゝをまちねしよ、やう〳〵閨近き竹よ、村雀のさへづる聲するよ、今はとて窓おしひらきなかむれば、空のどかよはれわたれり。いとうれしくて、まづ近きわたりよゆきて見るよ、思ひしごとく今をさかりと咲みちて、名殘の露去げきよ、さきいでたるぬれ色いとうつくしく、枝葉などいきほひづき、香もひときい雨よまされる心地するよ、やゝ日高うのぼれば、二人三人とつどひきて、廣きところもさあがらみち〳〵て、人の山なす程なるを、木蔭靜よたちねつゝ、ゆきかふ人どもを見れば、年老たる人などの、瓢肩にうちかけ、醉すぐしつゝ足も去どろよて、少女子などにされことといふは、いとも〳〵あぢきあき事になん。又をのこいおきて、女どちさへ、あらぬ姿よやつしたる、とり〳〵に花のおもてぶせともいひつべく、かたいらいたき心地せらるゝを、梢の花はいかに思ふらんかし。

寄花述懷

富田愛子

今日い何となうみだり心地にて、筆とるわざも物うければはしつかたにねざりいでゝ、四方をながめねしに、たゞならぬ風のいづくともなくふき來るは、いといぶかしくて、かなたこなた見めぐらすに、南となりの庭の櫻のさきみちて匂ふなりけり。さてもゆかしき花の色香や。一枝こいんと思ふ折りしも墨田のほとりに住る友のもとより、一きはめでたきをおこせたり、ければいとうれしくやがて花瓶にさしてながむるに、色も姿もいとあいれあれば、花にのみ心をうばゝれて、さうじをとづる

事さへ打忘れしに、さとふきいるゝ風に、三つよつ二つちりそめぬ。あれかうはかなき世の中の、今日ありとても、明日ゝ去られぬ物を、さまさまに心をまどゐし、ひとつわざをもゆゑづけずして時をすぐさば、いかに悔ゆともおよぶまじ。されば今よりゝ、怠らず學の山路にわけいりつゝ、錦にまさる、ちらず去をれぬ花を手折りてんかし。

寄花懷舊　竹口要子

飛鳥の山にゝ去ら雲たなびき、角田の堤にゝ白雪あわたづ彌生のつごもりごろ、朝東風にそゝのかされて、園生の中をそこゝかとなくたどりありくに、二本三本の櫻、世の春におくれじとほころびて、ちりもはじめず、さきも殘らぬさま、何にかゝたとへん。あれ去年の春ゝ、幼き時よりはらからとも思ひし友と、この花陰に樂しみあそびしを、かの人ゝ長月の末つ方、草葉の露ときえうせて、我ひとりあがむる事よと、花ぐもりの空と共に、心もかきくもりて、今更にあき影のなつかしく、花こそ物ゝ思ゝざりけれと、古き人の言の葉思ひ出らるれど、飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にて、花物いはねば、誰と共にむかしを語らんよすがもあく、獨袂をうるほす折しも、ほろ〳〵とふり出る春雨も、そのかみを去たふ涙の心地せられぬ。さて一枝手折るとて、

咲にほふ花をし見れば又更にかへらぬ君のかげぞこひしき

などロずさぶを、かたへに見る人々ゝ、例の思ふ人よと笑ひなんかし。

月前落花　竹屋雅子

月ゝ夜深うあるまゝに、ひるよりもはしたなうすみのぼりて、風のけはひ去めやかに、花の梢も一入けしきまされば、端近うふして見出したるに、吹となき風に、花の一ひら二ひらばかり散たる、いとゐたう身に去みて心もとなし。

春夜聞蛙　横山桂子

雨の名殘の空、去めやかなる霞の中にくれはてゝ、いひ去らずのどかな

るに、枕をもとらず燈火のもとに筆まさぐりしなどするほど、庵近きみぞ河に、ほのめき出たるころ、いとをかしと耳とゞめられて、水のそこにやおぼひとりごたるゝに、やゝ人ゑづまるほど、何事をかかたらふらん、たかきあり、ひきゝあり、あるいはやりかなる、あるいゆたげなる、おのがさまゞ〳〵聲をつくして鳴かはしたる、かついかしましともおぼゆる物から、今やさくらんと遠きさかひをさへ、ふと思ひやられて、

うつりゆくはるの日數を山吹の花にをしとや蛙なくらん

竹屋雅子

暮春鶯

彌生のつもごりに成りにけり。春も今日いくれなんと思へば、いとゞ名殘の惜しまれて、せめてい殘れる花もがなと心もあくがるゝ折しも、かなたの青葉の梢より、鶯の一聲高くあき出たる、花のありかゑるべかはにて折からいとをかし。

鶯よいざゑるべせよ山深く春のなごりに花をたづねん

泉館鎮代

山家春曉

鳴鳥の聲よねざめて窓おしやりつゝながむるほど、木々の梢うとましからぬほどよゑげりあひて、みどりなるもえならぬさまなり。櫻の木どもの所々に打まじりて、今をさかりなるよ、窓の前を過る谷川い、物の音にかよひていとさはやかなれば、かゝる人はなれたる山里のすまひも中々よわびしからず、朝あ〳〵かやうあるねざめのながめい、おのれひとりの春と心おごりせらるゝもをかしうてなん。

石渡忍子

春望

昨日までい冬がれてさびしげありし外山の木々も、今いみな淺みどりをそめなしたる中に三本四本立てる梅の、今をさかりと咲出たるい、まだきえやらぬ雪かとうたがはれ、もえいでし若草の朝東風にあびくさまい、たゞ一ひらのむしろを敷たらんやうなるに、里のうなゐの打むれつゝあそぶもまたのどけし。空い日の光もさだかならぬまでに霞たな

びき、をちこちに人まちがほなる小鳥のこゑのかすかにきこゆるなど、何となう心もうきたつやうにおぼえてなん。

面しろくさへづる鳥の聲すなり花の香さそふ風のまに〳〵

西升子

春川

いつしかも汀の氷とけはてゝ、そこはかとなく霞みわたれるに、堤の柳めもはる〳〵と打けぶりて、朝東風になびくさま、繪にかゝまほしげなり。つのぐみし蘆の若葉をこゆる白浪の音もいと長閑に、川上遠く鳴渡る鴈の聲さへあはれ深ければ、えばし立やすらひて、

見る物もきく物も皆あはれにてかすみもふかし春の川づら

高山晋子

春野

遠近の山のはもほの〳〵と打霞みて、春の日影のうらゝかなるゑ、隔なき友ぐち二人三人、野邊の若草の淺緑を、やがてむ〳〵ろゑて打やすらふ程あなたこなたに色をきそひて咲匂へる櫻草山吹などを、わが物顔ゑ胡蝶の舞たはぶるゝさまえもいはず。かなたの畑中に麥の草とるゑやひなびたる聲ゑて、賤の女の歌うたふも折からをかしうなん、

竹屋雅子

鶴沼村に遊ぶ記

今日ハ新玉の年立かへる一月一日なり。空よくはれてちりの曇もなくいとうらゝかなるまゝに、そゞろに心うき立て、神奈川縣下なる、鶴沼村の別邸に、去年より行し人がり音信んと思ひ起して、何くれといそぎ物して、二時半に新橋にいでゝ瀛車にのる。けふは大師の惠方詣にて、川崎邊までハ、人多く入込て、いたう困じにけり。五時頃藤澤に至る折しも、風いとあらく吹出て、のれる車もたゑれぬばかりなり。からうじて日の入頃に、鶴沼村の別邸につきぬ。主の君いたく喜びて、さう〳〵してくありしを、ゆくりなくとぶらひ給へる事ハいと嬉しきに、何事も心にまかせぬ片田舎ながら、まづゆあみし給へ。その程にあるじまうけせんなどい

へば、ゆわみするに、こゝい海べなれば、海水を汲入し汐湯にて、何となうわたゝけさもことなる心地せられぬ。さてくさ〴〵の物語などして十時頃ふしぞに入に、耳なれぬ波の音につゆまどろまれず。

よもすがら海士の苫屋のこゝちして枕にちかき波の音かな

二日、空いとよくはれたり。今朝は海邊のさまみんとて、とく庭におりたつに、只はひわたる程の所まで波打よせたり。よべねられざりしもうべなりかし。沖の方には、帆かけたる舟ども行かひて、海の面は、只青席のやうに、水と空とのけぢめも見えぬに、朝日きら〴〵とさし出たり。かゝるさまみなれぬ身には、いと〳〵めづらしくて、

朝づく日波間をわけていでにけり海と空とは隔てざるらん

西南の方に伊豆の大島みゆ。その島の山の峯よりたちのぼる煙の、空にたなびける、目路いとはるかなれど、近くてみれば、いかにおそろしからん。西の方はいたゞき白き富士の高ね、さながら畫に書たらんやうにてたてるさまいはんかたなし。かゝるけしき師の君に見せましかばと、よき歌のよみ出がたきに思ひ出られてあん。

いひいでん言の葉更になかりけり心いづちにあくがれにけん

朝けたうべて、江の島に詣でんと、十時頃に鵠沼をたち、徒行よて海邊にそひてゆく。道すがら見もしらぬ珍らしき貝どものあるを、都のつとにひろひ集むるに、ふと殘しおきつる子の事思ひ出られて、かゝる所にともなひ來なば、いかによろこばまし。せめてはと、寒き汐風もいとはで、あなたひろひてけり。

樂しきもうきもつらきも子を思ふ親の心はかはらざりけり

かちおれば、からうじて十二時ごろに、江の島につきぬ。島の入口にて、東の方をみれば、七里が濱、稻村が崎など、うちわたさるゝいとをかし。かの崎は。そのかみ新田義貞朝臣の、大刀をわだつみの神にたてまつられしところなれば、

ゑづめてしあたりやいづく白波のたちさわぎたる稻村が崎

岩本といふ家にてひるけたうべ、岩屋の辨財天に詣づる道すがら、かしこは兒が淵、こゝは何あど、あないの人ねもごろにとき去めしつれど、足いたく身のくるしきに、よくもきかず。喘ぎ〳〵岩屋にまうで、からうじて宿にかへりきて、こゝの產物なる貝細工くさ〴〵あがなひて、二時すぐるころかへりぬ。

三日、今日も空はれたり。されど朝けの風いと寒し。今日nかならずかへりなんとて、都におきつる稚子の、いかに待わびぬらんと思へば、鳥のつばさもからまほしうおぼゆれど、主の君の、ひる過てこそなどせちにのたまふを、去ひてもいなみがたくて、又海邊にいで、海士の漁の樣などみて、三時三十分に藤澤の滊車にのり、八時過る頃平にかへりつきぬれば、稚子のまだねもやらで、打よろこびつゝ、母君の歸りましたりと、はしりくるを見て、

幼子の打よろこべる顏みるはまづ何よりもうれしかりけり

竹

磯部房子

かの春の花秋の紅葉は美くしき物にはあれども、思へばまことにはかなき物なり。さるを世の人のいたくめでゝ、變らぬ物のためしとするこの竹をおとしむるなん、いとわりなきわざなる。そが生出たるをりも、おのづからすぐに、時々の移りかはりにも色をかへず、霜雪に堪へ、雨風をしのぐあどいとめでたし。身をころし、世をかへたる後も、尊きは、鳴物となりて天の下をたゞし、暖しきは、杖となりて老たる人をたすくるなど、いひつゞくれば限あらじかし。かゝればこそ唐土には、四の君子の一つにいかずまへられけめ、かゝる竹をおとしむるをいと心えず思ふあまりに、花紅葉めづらん人のいましめにもとて、思ふまゝをかくは物しつるになん。

女子詠歌論

田邊龍子

今や文物ひらけ、何事も滿たらひたる大御代にあひ、所々國々に數多の學校をたて設けられ、いにしへは胡國ともいはれけん北の海のはてなる民も、學問の何たるを知るにいたれるこそうれしけれ。されば殊に都にすめるわれら、日々學校に行通ひ、見もしらぬ國の有樣、聞も及はぬ國の言葉、その外さまゞ〳〵の學術を習ひおぼゆるゝ、またく敎師父母の敎育のよろしき故なりといいへども、其元を思へば、皆大君の御惠に出ざるゝあし。此あまねくひろき御惠には、何をしてかむくい奉るべき。そはたゞおのれら學校にて學ぶ所の事どもを、深くきはめあきらめ、いさゝかありとも御國の益にならん事を、思ひはかるの外あるべからず。まして日本は、美術ことに進歩し、泰西諸國の人々も、をさ〳〵及ばぬよしふとか聞に、女のすぐれたる所も、亦美術ありといへば、よきが上にもよからん事を願ひて、其美術を習ひあきらめずゝあるべからず。美術といふもさまゞ〳〵あれど、かの目にみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、猛きものゝふの心をもやはらぐるといふやまと歌こそ、此國に生れては、一際心をつくして學はまほしき業なれ。泰西諸國にても、詩を美術中の美術とたとへ、殊に女のをよしとすときく。さるを歌としいへば、徒に明石の浦に嶋がくれゆく舟を惜み、田子の浦に富士の雪をめで、月ようそぶき、花にうかるゝものとのみ思ひたるは、かたはらいたくをこの限といふべし。歌は知識をすゝめ、心を優美にする具にて、女にゝかの泰西の詩の如く、よく適當ゝたるものなるを、大方の女學校にゝ、かの野鶩家雞のそしりをもゝらず。外國の事としいへば、何にまれかにまれ、ひたすらそをとり、文學ぶも、やまと言葉ゝ物遠しなどいひて、ふつに敎へざるも多しときくこそうれたけれ。いかでこの都の女學校にてゝ、和歌の一科をまうけ、われにし歌のあらす田、すきかへされん事こそ願はしけれなど、朝日に匂ふ山櫻のさきみちたる窓の内にて、おのがみじかき才を知らず、とはずがたりをそゞろにかいつく。

女子の本分

高崎胤子

女ゝ、身体のつくりよりはじめて、よろづにかよわきものなれば、すべてものいひ立ゐふるまひゑづかに、ことばすくなく、何事もひかへめなるこそよけれ。さるを今の女子ゝ、やゝもすれば、たゝわづかにても、習ひ得たることをば人にほこり、ひかへめよせば、ものゑらぬものよと人に笑はれんとかへりてはづかしく思ひ、道を行にも所せげに歩むを、よきこと丶心得をるぞ口惜しき。いでや學校のま物なびゝ、人にはこるべき爲にゝあらず。人の妻となり、母となるは、女子の本分なれば、其子を教ふるに、何事もゑらでいいかゝすべき。おのれよき心ばへよりても、ゑらず〳〵あしき道にもいりたちなば、よき子なりとも、人にけおさるゝ事はたわるべし。よしや人よりすこし劣りたるものよりても、母の教へがらによりては、よくもなるものぞかし。又家を治むるよりも、夫につかふるよりも、人にまじはるにも、事よわたりて、よしわしをわかちさだむるにも、學問おくていかなはず。されば若き時、よく心よかけて師のをしへよ従ひ、よろづのことゝ何の爲に學ぶよかと、常に心よかへりみて、おのが智をみがき、徳を修め、家よありてゝ、よく其父母につかへ、兄弟にゑたしみ、よめいりして後は、よく其夫をたすけ、家を治めんこそ女の務あるべけれ。

竹柏園の新築の祝に寄木祝といふ事を

竹屋雅子

言の葉の玉もて新にみがきたるこの家よ。露霜に色かへぬ栁の此園よ。その根ざしは、言の葉の玉の、月に日に打集ひきて、今は處せうなりにたりとて、たてそへられたるなりけり。されば今より後は、いよゝます〳〵に、ときはかきはに、いく千萬もかはることなく、うごくことなく、大和言葉の花さきて、いとも〳〵ゆかしう匂ひみちなんかし。あなめでたのまきの柱や。あなめでたのけふのまとゐや。

とことはにうき事なきの宿なればいく千萬も榮え行らん

述懷

南條貞子

三月の末つ方、父君いわしきかせに犯されて、打ふしてのみおはしつるに、にはかに捨がたき事いできて、故郷に歸り給ひなんとす。いたづきの折なれば、いとうれはしく、母君もろともにいさめしかど、私の事ならねば、せんかたなくて、旅立のいそぎをなすに、れいもたび〳〵ゆきかよひ給へど、こたびはたちゐも心にまかせ給はねばとて、母君も弟も、ともにつきそひつゝ、朝まだきに打連ていでたちぬ。あとにはわれと、今年八歳になる妹とのみなれば、賑しき都のうちながら、いとさう〴〵しくおはえぬ。されどひるの程は、何くれの事ども去げゝれば、打紛れをれど、よるいとゞさびしさまさりて、燈火のもと近く居よりて、父君は、道すがら何のさはりもまさず物し給ひしにや。母君はいかゞおはすらんなど、思ひわづらひつゝかたへを見れば、妹は智慧の板を組たてんと、とやせん、かくやせんなど獨ごちつゝ、さま〴〵に心をこらしをれり。されど、いま

だ智恵あさくして、ならぶる事をえず。つひにうみはてゝ、手箱の中にとりをさめけれど、猶心殘りけん。また取出して、ひとしほつとめて考へるしに、やう〳〵かたの如くならべえたるに、嬉しさ顔にあらはれて、姉君よ、これ見てよ。など打ほゝゑみつゝ、今日學校にて、小野道風といひし人の物語をきゝつるが、わがこれを組立しも、それよひとしからんなど、はこりかよいふ。げよさることにこそ。此板のみよあらず。學びのわざも、去か心を入れて學びねかしなど、いひさとしつゝ思ふやう、何の業にてもひとつの事に心をいれ、幾たび數を重ぬとも、うまずたゆまずいそしみなば、いかなる事にても、なしえざる事はあるまじ。われ我身、かた田舍よ人となりて、よはひのみは人なみになりぬれど、なすわざのうひ〳〵しきは、いとも〳〵うらはづかしき限なりかし。されどあまたゝび數をかさねて、師の君のみをしへをうけ、いよゝます〳〵勉めはげみなば、よしおくがにいたらずとも、歌文の道の山口に、ゆきつきぬべき折もあ

りぬべし。など思ふをりしも、母君のもとより、つゝみなうつきにたり。父君も、さちにさはりたるけしきなしといふ消息來りぬ。いとうれしうてくりかへしつゝよみをるほどに、夜のふけゆくも打忘れてなん。

寄鏡述懷　樹谷直子

朝な夕なおのが面影をうつしては、髪かたちなどかいつくろひ、日にあまたゝびさし對ひてゝ、みやびやかにいとたへにと、飾にのみあこがるゝ女いと多し。又われ笑みて對へばともにゑみ、いかりの面もてさしむかへば、同じ怒もてわれをむかふ。物なべてありのまゝをうつすゝ鏡の誠なり。あゝれ多くの人たちよ。朝夕うつす姿にひきかへて、心のうちをてらし見、くもれる塵を拂ふべしかし。

をしへ草　橘幸子

此事ゝ心に留めてをさあき者のかたり草よせんと、早くより思ひゐたれど、我ゝやまひにておぼえもうすく、かつ年老にたれば、からうじて後の思ひ出にもと書付置あれば、まなびのいとまよ、とり出て見給ふべし。御國の言葉ゝいともくすしくえもいゝれぬ味ある所を、よく〳〵心をゑめて、大人となりあば、君の爲人のためよと思ひ、御國のいよ〳〵への事を、よく〳〵まなびあきらむべし。又歌の事も、すこしばかりいひ置あり。三田花朝刀自ゝむかし我すみし家のとありよ住まれければ、をり〳〵行て、くさ〴〵の物語せしにある時、花朝刀自のいはれけるゝ、歌よまんとあらば、その事を先心よしめて、それより言をつらね、いくたびも心の内よ唱へ見て、その事すら〳〵と詞にかゝるところあくば、その時詠草に書付て見すべし。この事ゝ先師景樹先生の、くちづからをしへられし事なれば、この世よあらんかぎりゝ、此教をまもるなりとき、ゝて、いとなつかしく、日よ添ひ月にそひて、花朝刀自のゑたはしく思ひて世よゐまし、ゝほどゝ、行てなよくれの事をきゝたり。又明治十五年三月あかば、東京の花みんと、ゆくりなく弘綱翁、子あるる信綱君とともに、我家へとひき

給ひぬる、嬉しさいはんかたなくなん。さるいあまたあるをゝへ子の中に、我をゝもたづね來給ひし事の嬉しくて、歌よみたれど、年へて今いわすれたり。かくて上野の花もちりかたなりたれば、すみだ川の花ようかれありくうち、いつの間ゝか、何がしの殿くれがゝの君の、此度師の東京へ出ましゝをきゝてまねかれければ、信綱君を伴ひて、出給ふ事なゝば〳〵ゝて、晝のほどゝ、家に居給はぬ事多かりき。夜と成ていゝ、いつも信綱君の百人一首なぞを、幼なくて講じたまふを、我も娘も打よりてきゝ、又歌よみなどいと樂しかりしゝ、いつゝか四月になれば、花いゝ名殘なく散りはてゝ夜もひるもたゝ嬉しさに日をおくりぬ、師のきみいゝ、をしへ子おほければ、まねかれ給さて、ある日めづらしく師いゝ一人出たまひて、信綱君一人徒然にてゐたまへは、今日いゝ花朝刀自の歌の會日なれば、伴はんいざ給へと、そゝのかゝて打つれ行て、信綱君を、人々ゝ引合せつゝゐゝほどに、花朝刀自、草花といふ題を出されたりしを、人々も我もいみじう思ひわづらひてゐたるに、信綱ぬし筆とりて、

猶の子ゝふまれながらも咲にけり志づが垣ねの虎の尾の花

といとくかゝれたるに、人々おとろきたり。花朝ぬしもいたくめでたがりて、かゝる人の出たる事は、實に人麻呂大神の御守にこそ。わらはも御影にむかひての面目なりと、おみだをさへおがしてよろこばれ、此稚き人よ。世のためにも、人の爲ゝもなり給へと、かい撫てゐいれがられき。その時花朝ぬしいゝ、九十の上を越られし老女なるに、かたへゝおいす信綱ぬしは十一歳なりければ、我もそゞろに嬉しなみだのこぼれんとするを、やをら打まぎらして、まとゐの人々のかほ打見やりつゝ。小式部の昔をおぼえていと〳〵はえある心地せられし事今ゝえわすれなん。

かくをさなき人も、心をさへ深くいるれば歌いゝよまるゝ物なれば、かの古今集の序に、ちからをもいれずして天地をうごかし、目にみえぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女の、なかをもやはらげ、たけきものゝふ

の心をもなぐさむるい歌あり」とあるがごとし、その歌よまんとならば、先早く師につきて其要をまなぶべし。我わかゝりし時、佐々木翁のをしへ給ひし事、第一自他のけぢめを、よく〳〵わきまへ置かざれば、歌にまれ、文にまれ事がらのわかぬものなれば、初學のほどは、自他のわかち、又かゝりむすびの事、また詞の活用をうまく學び明らむべし。これを知らざれば、歌よみても、文かきても、たしかにかくと思ひ定むる事かたく、たゞ〳〵しき事おほきぞかし。その中にも、假名づかひの事など、誰もやすき事に思へど、ゆめ〳〵なほざりなる思ひそと、をめし給ひし師の深きみめぐみい、わたつみもおほ淺くあん。されば、をさなき心にも、此事を思ひおきていそしめや良男。われいはやともし火のまへに風まつこゝちなれば、かくかきつけて殘しおくものぞ。

さま〴〵のことまなぶとも神代よりつたいる歌の道な忘れそ

信綱云、此教草い、橘幸子の刀自の、いとけなき孫の長き形見にと短かき文に、歌の道をさとされたるにて、いとも〳〵めでたきふみなりかし、その中に、だゞかたはらいたくおぼゆるは、わがをさおき時の事をさへ云るされし一ふしになん。其頃い、おのれいまだ十一才おりき。それよりさき六七才のころより、庭のをしへにおほしたてられ、歌もすこしいよみたりしに、今い廿歳になりぬれど、何ひとつ云いでたるわざもなく、又うたも其ころよりおとりざまなるは、我ながらあやしうこそ。そも〳〵幸子ぬしい、わが父、伊勢にゐたりしほどよりのをしへ子なれば、東京に來て、まづ刀自のもとにと、おもふきつるありけり。こたびもこの文をかきつとて、見せにおこせられたれば、そゞろにそのかみの事思ひ出られ、わが身の上のかついやさしう、かつはなげかはしうおぼゆるまゝを、一言かくなむ。

後のためかきあつめたる教草このまゝにやい朽いてぬべき

無常

土持綱子

明治丁丑の頃とかよ。薩摩の國のかたほとりに、若き男女すみけり。かたみにいと深う契りけるを、其年の一月ばかりよ、世の中いと騷がしうなりし時、男は弓矢とる家に生たちたれば、出陣すべく定まりぬ。身のきはよつけていと、いとうれしき物から、軍の習とて生てかへるべき出たちならねば、これやかぎりの別ならましと打歎かるゝを、女いまして限ある道にもおくれさきだゝじと、ふかく契りしことなれば、あまりの名殘をしさに、ふしゑづみつゝおきもやらぬを、男さな歎きそ。事なくなからへて、人におとらぬ功をたてなば、年頃をりもあらば、名取川沈みがちなる埋木の、くちいてぬべき事と、歎きぬたりしほいかなひて、錦をきよそひかへり來なんを、心細くとも云ばしい念じて、待ゐてよなどいひあぐさむれど、女は悲しさやらんかたなく袖を顏におしあてゝうつぶしぬ。やゝありて、

先だゝじまたおくれじと契りしぞなげきの外の歎おりける

といへば、男もたへかぬれど、

本末の功をたてゝあづさ弓ひきかへりてんときをまたなん

と心強くよみかへしたれど、今日をかぎりと思ひしかば、云ばしうちまもる互の目にいたゞ涙のみ。されど心よわくていと、何くれといそぎして、勇ましげよ出立ぬ。女い門よまろび出て、今云ばしと聲もをゝまず泣さけぶ。男もかへり見がちよ袖を云ばる。遠ざかるまゝに、影も見えずなりぬ。女いそこよたふれぬ。傍の人よたすけられて、やう〳〵内よいりしよ、やがて持佛堂よこもりぬ。あはれ何事をかいのるらん。

かくて後い、月日よそへて忍ばぬ折はなく、朝夕かへり來ん日をまちわぶる程よ、いつしか春もくれ、山郭公の垣根の卯の花よ音つるゝ聲も、やう〳〵かれ行て、秋よもおりぬ。つれ〳〵と物悲しく、初雁の聲いきけど更よおとづれもおし。思ひかねて、獨庭よおりたちて見るよ、所せくはひ

まとへる葎の露、いとといたう去げきよ、

ことわりやいかでか袖のぬれざらん草の鋏も去とゞなりけり

と思ひつゞくれば、はかなき物いたゞ涙よて。

ある夜の事、味方の本陣よりなりとて、使來りぬ。何事よかとつと胸ふさがりて、かなたの顏を打守るよ、かなたもいはんとして、いひかぬる樣なるよ、こゝたいいとゞ胸さわがれて、いかよといそがはしく問へば、かゝたも涙ぐみて、せの君い、いぬる日矢走山の麓の戰の折より、ゆくへ去れ給はず。さるよ昨日空しくゝり給ひ一由、さだかよ聞得つれば、つげよとて來りつといふ。女いゝあまりのことよ、涙さへいでず。そはまことか。夢ゝらん。夢ゝらばはやさめよかし。あはれうき身ながらも、我君のあればこそゝれ。此後い誰をたのみよて長らへん。たゞ諸共よ、ともかくもならんとうち嘆く使のをのこもいといとはしげよ、こたびの戰よい、せの君のみならず、わかたの人の討死去つるなれば、はかなき世のすくせと思ひのどめ給へなど、いひなぐさめてかへりぬ。歸りし後い、いとゞ心はそさまさりつゝ、嘆きむせかへる程よ、夜もふけぬ。燈火の影をぐらく、閨のふすまの風冴て、悲しさやらんかたなし。せめてむゝしくなり給ひし跡をだよ尋ねまほしくて、思寐の夢路をたどる心地して、伴ふ人も具せず、有明の月影をふみて、獨出ゆく心の内、いかばかりか悲しかりけん。思ひやるだよも露けき秋なり。ゆく程よ、いつしか大路はなれて、細き山路よ出ぬ。谷川の水音かすかよきこえて、あるかなきかよ心細げゝる月の、山の端近く見えたるゝど、いとあはれよおぼつかなくて、

獨ゆく心ぼそさを山の端よいでゝ去らするありあけの月

山路ゆくゝかつきがたいつもかく物や悲しき有明の月

など思ひつゞく。猶ゆく程よ、月いいつしか影消て、夜もほの〴〵とあけそめぬ。曙の風ひややかよ、袖ふき返して、身よしみわたるゝいれさ、何よかはたとへいはん。

山人の柚木のみこりすてたる山路を、日ねもすこゝかしこと踏み迷ひ、そこともなくさまよふ程よ、あはれ山寺の鐘の音い、けふも暮ぬとつけ渡りぬ。踏みなれぬ山路なれば、道はかどらず。行先猶遠ければすべなくて、煙たつ賤がふせ屋を尋ね行て、一夜をあかしぬ。

そことばかり、傳へ聞く心を道のしるべにて、又しも野邊をさして出でてゆく。よるべも去らぬ道のべを、こゝにやかしこにやとたどり〳〵て、裾い露、袖い涙に打去をれぬ。あいれ習いぬさまなれば、わらうづにあたりて、足より血あえつゝ、只杖を力よ、あへぎ〳〵行程もなく、日やう〳〵かくれはてぬ。風あら〳〵しくふきゝぬ。げよ定めなき此頃のけしきかあと見るに、はしたなく時雨さへそゝぎゝぬ。行程よしといにありぬ。何といわかねど、いと大きなる樹のたてるあり。宿求めんたよりなければ、せめて一夜のかりねをと、立よりて、

よしさらばこゝよ一夜を明してん雨もらずとてぬれぬ袖かは

小草の露打いらひていねんとすれど、梢をばらよもりくる雫、遠き尾上の鹿の聲、枕に近き虫のねに、心細さもあいれさも、ひときい身に去みて、枕去といに夜をあかしけり。あはれ其枕の露けきも、去ぐれのみにいあらざるべし。

山本近き所よ、松の村立あり。そのおくよ古寺あり。立よりて見るよ、門はかたふきて木立物ふり、庭いと物すごげよあれたれど、心ありげに見えたる家なれば、立入てことゝへど、軒端の荻のそよ〳〵と答ふるのみにて、人げもなし。いとあやしと思ひてたてり。とばかりありて、年若き一人の尼出きて、いかなる人にましませば、伴ふ人も具せず、物思はしき御ありさま、いとあやしきことよこそと、なさけありげにいへば、女聞て、いと嬉しく、こしかたの事ども、涙ながらに打語れば、かの尼、さな嘆き給ひそ。會者定離の世の習なれば、誰か別のなかるべき。古き歌よ、　先だつも去ばし殘るも同じ道つれぬばかりやわかれなるらん、とある心を思ひさ

とりて、是に去ばらく留まりおはしませ。共ゑ菩提の道におもふき、永き世の闇をはらして、結縁をもなし侍らんと、さまゞ〳〵ゑいたはり慰めければ、その情ゑはだされて、十日廿日を送りぬ。されど胸の思ひ猶晴れやらず、日に〳〵おとろへ行て、われかのけしきになりぬ。尼もかくていと思ひ返し、せめて其せの君のうせつるあたりをだゑ見せましかば、思のはるゝ事もやと、或日の朝打つれて、矢走山の麓ゑいたりぬ。荒野の小草茂りあひ、露ふきこぼす夕風も。いとど身ゑしみて、悲しさやらんかたなきを、つがひ離れて殘れる骨の、雨ゑうたれ日ゑさらされて、こゝかしこの草陰に白う見えたれば、いづれが我君のなきからぞと思ひつゞけて、

白露ゑ我身をなしてきえてしか君がうせゑし草のあたりゑ

と一首をひくき聲ゑ打ずして、そのまゝそこにたふれぬ。尼ゐいたく驚き立よりて見るゑ、はや息もたえ〳〵なり。ふり亂したる髪をかきあげ耳ゑ口よせて、聲もをしまずよびさけぶ。さけべどよべど、たゞ山ひこのこたふるのみ、尼もせんかたつき、あれ同じ墨染の身となして、一つ蓮の縁とのみちかひしを、いつはりのかねごとゝ、なりはてなん事の悲しさよと、恨みいふ聲も、たゞ松風のみさそひて、今ゐたが耳にか入ぬべき。いかゞゐせんと心まどふほど、谷川のあたりかすかゑ水の音す。急ぎ下りて見るに、大きなる岩ほのひまより去たゝる雫、まづ嬉しうて手ゑむすべども、指の間もれて心ゆかず。袂をひたし行て、彼口へ去ぼりいるれど、更ゑかひなし。たゞむなしきからゑすがりつく程ゑ、夕をいそぐ遠寺の鐘、誰も聞くらん諸行無常と、

こゝゐ名ゑおふ矢走山の麓なり。未程へぬ軍の跡なれば、白き骨、黑き髪おど、所々の草の根、石のはざまゑまとはりたる樣、見る目もいと物すごし。ひとりの武士あり。あたりの岩がねゑ腰打かけて、つくゞ〳〵此ありさまをながめゐて、涙さめ〴〵とつぶやくやう、思ひ出ればはや六十日あまりにもなりぬ。我此地を守るに、敵衆く昧方寡く、防ぐにも防ぎあへが

たく、今い此世の限と思ひしを、からうじて身をのがれ、あるは峯の嵐を、鹿の音あがら身よ去め、あるい野べの露を、月影と共よ枕に結びて、わりあく日を送りきたりぬ。われれ家に殘しつる女の、いかよまちわびて、恨みてやあらんあど思ひつゞけて、そこを立いでぬ。地藏塚よかゝりし頃い、日またく暮はてぬ。松杉のあまたた立あらびたるあたりをあゆみ行程、行手の木の間より、かすかに見ゆる燈火あり。いかある人のすみかならんと、いそぎゆきて見るよ、尼とおぼしき女の、誦經の聲もかすかに、泣沈みゐたり。さてい此あたりに、戰死せし人をとぶらふなるべし。げよ情深き人かなと打思ひつゝ、おのが上とはつゆ去らず、立よりてことゝひぬ。あはれ此尼の物語を、聞たる武士の心はいかよ、その嘆はいかよ、

消息部

伊藤婦美子

年の始人のもとよ

年あらたまりて、何事かおいしますらん。いとなかりし年の暮とい事かいり、いつ方も同じやうよ、御心のとかよおいすらんと押はかり侍り。去年より、一度さぶらひ侍らんと思う給へしを、はかなくて年もくれいて、又この頃い、壽言いふまらうど數去げゝれば、明日い明後日いと、思ひつゝ過し侍る罪、さる方にゆるいてよ。此梅いわきて早うさきいで侍れば、御歌の料にもと一枝まゐらす。猶近きほどにさぶらひて、萬きこゆべくこそ。あなかしこ。

梅の花よそへて人の許よ　竹屋雅子

霞み渡りたる梢どもの中に、よしばみほゝ去み侍るこそ、鶯やどすよすがと、いと〳〵見所多く侍れ。ゆるやかよ打吹風よ、えならずよほふいい

はん方なく待るまゝ、色をも香をも知る人よとて、一枝をりて參らするになん。かしこ。

若菜つみに誘ふ文　原田せい子

久しう打絶て、みけしきも承らず、おぼつかなき月日のみ、多く積りたるを、御わたりよいかよおばしますらん。うけたまはらまほしうこそ。わらいもれいのごと侍れば、み心やすうおぼしてよ。この頃い空のけしきもいとのどかなれば、昨日い梅見今日は鶯きゝにと、人々に促されて暇もはべらぬを、わさていみどりが岡のほとりへ、若菜摘にと思立侍れば、同じみ心よもおいしまさばとて、驚かしまつるになん。かしこ。

二月ばかり友人のもとよ　森村子

きさらぎの空よいなりはべれど、此頃の寒けさいかにおいしますらん。かねてまたれ侍りし梅も、やう〳〵よ咲そめぬれど、鶯は寒さよこもりたるにや、まだ一聲もなのりはべらず。されどこなたもことなう侍れば、やすらけくおぼしてよ。をりからのおぼつかなさよ、みけしきうけたまいらまほしうてなん。かしこ。

三月ばかり友のもとに　廣瀨すゑ子

梢の花も匂ひ出て、霞み渡れるやよひの空の、いと長閑よなりもてゆくを、いかゝ詠めさせ給ふらん。去年の春い、同じ都よて花を見鶯をきゝにと、打つれてものし侍りしを、今い八重の海山よ隔てられて、雁の使も心よまかせず。いと〳〵なつかしう思ひ給ふるを、君にも都の春を、いかよ忍ばせたまふらん。朝夕のおきふしにも、うち絶し音づれのいとうければ、つたなき筆ながらみけしき伺ひ侍るになむ。あなかしこ。

野遊に誘ふ文　佐々木綱子

此頃い空のけはひいとうらゝかになり侍りぬ。春の日かげと共に、野邊のわらびのやう〳〵のびゆくらむを、いかでひとたび行てをらまほしうこそ。おなじみ心におぼしたち給いゞ、嬉しさいまづこぼるゝばかり

になむ。あゝかしこ。

花見よ誘ふ文　成田國子

久しく音づれまゐらせず。いかゞすごさせ給ふや。此頃い花もやう〳〵けしきだち侍りつるよ、菅のねの長き日を、あだにおくりて雨風よまかせんいいかばかり口惜からまし。明日明後日の内に、いづこよまれ、御心よかなひし方よ、御供つかうまつりてん。いかにおほしたち給いずや。かしこ

春の日人のもとに　寺澤倉子

鶯の初音よ春のとざし破られてより、花もけしきだち柳もめぐみそめて、心もおのづから浮きたつやうに侍り。我あたりい片田舎なれば、庭いと廣やかにて、何くれの草花も、さき出侍れば、都にのみ住給へる御目よい珍らかよ思さるゝことも侍るべし。此頃、あるじい公事にて、ある縣よ物し侍れば、いとさう〳〵しう、つれ〴〵に苦しみ居り侍り。あいれ御車をよせ給ひなば、軒端よ霞む月をながめて、一夜を語ひあかし、池のほとりに糸竹を玩びて、一日を樂しみおんよ、御心いかよゞと、かうおどろかし侍るよなん。かしこ。

春の日都の人よ　遠藤もと子

年の始のはぎごと奉りしよりこのかたい、何くれと打まぎるゝ事ども侍りて、心ならず今日まで音づれ侍らねど、うち揃ひたひらかよましまずよし、いとも〳〵嬉しうなん。こなたいづれもかはりおうくらし居侍れば、おほん心やすうおほしめしてよ。さても年かへりてより、いつしかとまちわたりしやよひも、はや半となり侍れば、都の春のけしきい、さこそと推量り侍り。わが方い山里よて、もとより御わたりにいくらぶべくも侍らねど、むかひの山の櫻、うしろの園の鶯など、花鳥の色に音よいと

をかしきをはる〳〵ととひ來る人も侍れば、此頃い日もいと長くなり侍るに、御暇もおはしまさバ、いかで柴の庵を驚ろかさせ給へ。かしこ。

春の暮つ方山里人の音信しかへし　竹屋雅子

花鳥のいろ音の春もくれぬまに、はや時鳥の初音きゝ給ふと、ほこりかゝ物し給ふ事のねたき物から、いとうらやましうて、わかれてし春のあゞりも忘るべしまたぬにきかく山時鳥遠からぬほどゝ、打驚かし侍るべくこそ。かしこ。

人の子うませけるに　伊藤琴子

よべはいとたひらかにて、ことゝをの子うませ給ふとうけたまはるなむ、いと〳〵うらやましき。御家の人のみかゝ、御里のかゞいろの君も、いかばかりよろこび給ふらんとおもひやり侍り。うぶきぬ一くだりまゐらす。今朝より思ひおこして、いそぎ物せさせたれバ、かたはなるぬひざまに侍らんかし。よろづはあすあさてのほどさぶらひてこそ。あゝかしこ。

今様部

新年　西升子

年のはじめいとゞもがきをとひみといれみ祝かゝし
うたけよろはぬ人もなくむつびあふこそ樂しけれ

新年朝　佐々木光子

年たちかへるあさぼらけかすまぬそらもたづ鳴て
くもゐよいそぐみや人の車のおとこそのどかなれ

初春風　竹屋雅子

雪ようもるゝやまの端もこほりのとぢし谷がはも
のどけき春のあさごちよとゞこほりなく解にけり

鶯　眞島俊子

きのふかさきしわが園のうめの立枝を木づたひて

初うぐひすのくるゝまで　たのしげよなく聲すなり
始聞鶯　竹屋雅子

袖まださむきあさかぜよ　おきわづらへる閨ちかく
片ありながらうぐひすの　鳴いでしこそをかしけれ
梅　竹屋雅子

ふくはる風よさそはれて　軒ばのうめいかをるあり
疾來てなけとうぐひすの　谷のふるすにつげやらん
山家梅　竹屋雅子

道ふみまよふゆふまぐれ　梅のよほひをとめゆけば
ひとむらつゞく山ざとの　賤がかきねにいでよけり
梅村聞笛　竹屋雅子

おぼろ月よよわくがれて　梅のはやしのかげふめば
よしありげなる妻戸より　ゆかしき笛のこゑすあり

故郷春月　竹屋雅子

年ふるさとをきてみれば　すみよし人いあらねども
月いむかしのかげながら　同じそのふよかすむあり
窓前春雨　竹屋雅子

學びのわざにうみはてゝ　すさびにならす琴の音の
去めるいなぞと見出せば　窓にかすめるはるのあめ
野遊　西升子

野邊とめくれば雲雀あく　芝生のすみれよほふなり
蝶のゆくへをとめ子が　とめ行さまもゆかしくて
月前花　竹屋雅子

月もおぼろにかすむなり　花もおぼろよにほふなり
夜半の寐覺にさくら戸を　ほそめにあけてみ出せば
花間朧月　松浦琴子

咲つゞきたるさらくもの　花にひかりをうばゝれて
ありとも見えぬ弓はりの　月のかげこそあはれなれ

山花　西升子

あらしの山を見わたせば　松いまばらゐなりゐけり
となせの瀧もうづもれて　花のくもこそにほふなれ

閑居花　竹屋雅子

よをうき事におもひあし　とはれじとさす柴の戸も
花さくころいさかすがゐ　音あふ人こそまたれけれ

山家花　竹屋雅子

花さくころいさばの戸も　みやこの人ゐたゝかれて
谷ふところのやまざくら　一人みる日いなかりけり

暮春　竹屋雅子

花いみながらちりはてゝ　春もほとなくくれぬめり

何ごゝろなきうぐひすの　なく聲ばかりかたみゐて

暮春鶯　眞島俊子

青葉がくれにちりのこる　花のこずゑを木づたひて
くれゆく春を今日のみと　なくうぐひすの聲すなり

鎌倉に物して　伊藤銓子

やなぎのみどり深かりし　むかしの春はさらねども
いまい麥生となりいて、　あれゐしあとこそ哀なれ

大塔の宮のこもり給ひし岩屋を見て　伊藤銓子

鎌くらやまゐたづねきて　くらき岩やのあととへば
むかしをさのぶわが袖に　おつるい松のさたつゆか
宮ゐのもとの八重ざくら　ことしの春もにほふなり
こゝろもあらば花の香を　よし野の山へおくれかせ

一　月

軒ゑかゝぐる日のはたも
のとけき風にうちなびき

二　月

きさらぎごろのゆふ月夜
にはもせゑちる梅のはな

三　月

みねゑたなびく去ら雲も
花ゑなりゆくあさぼらけ

四季今様

おもふ友どちうちつれて
野のへ山のへはるゞゝと
わかの浦わゑふねうけて

美濃部貞子

去めひきはゆるかど松も
うら〳〵とこそ霞むなれ

影なつかしみおりたてい
蹈べき方こそなかりけれ

ふもとゑつもる去ら雪も
ふくいる風ぞかをるなる

中西かず子

すみれやつまむ花や見む
たちこめにけり朝がすみ
月まつよいのすゞしさに

三つ四つ五つ六つなゝつ
木々の紅葉もかつ散りて
誰あくがれの手すさびか
根頃あらしのさゆる夜い
なほいくそたび夢さめて

夕　煙

野寺のかねのこゑきえて
この夕ぐれのさびしさを

雨夜閑談

大路のくるまおとたえて
落るしづくもしめやかに

故郷雨

年ふるさとをたつね來て

ほたるとひかふ水のおも
さびしさまさる宇治の里
つきゑすみゆく笛のこゑ
木の葉散るゑも時雨ゑも
たまくらさびし閨のうち

竹屋雅子

夕けのけぶりたちのぼる
とともにながめん人もなし

竹屋雅子

ねよとの鐘のこゑすなり
かたらひあかす雨の夜に

石渡忍子

うつゝゑ變るそのかみを

玄のゑをりしもふる雨に　いとゞたもとそ唯ならぬ

山家曉　佐々木鳴子

うき世の夢いさめはてし　まくらの山をみいだせば
谷の戸いなほゆきとぢて　高根の松こそ玄らみけれ

鳥　佐々木光子

うきふしなげよ住なせる　竹の玄たいほとめ來れば
ちよとさへづる村すゞめ　聲よぎはしくきこゆゐり

竹林鳥　富田愛子

うき世を遠くはなれたる　竹のはやしにやど玄めて
直きすがたよならはんと　群ゐる鳥こそあはれなれ

祝　西升子

松のこずゑにひなづるの　すだちのこゑも聞ゆなり
千代をかさねて君が代い　つきせじ盡じ代々ふとも

寄竹祝　佐々木光子

うゑてそのふに見る時い　ちよもへぬべしかくや姫
いつきてとみし竹とりの　おきなが富よも增りつゝ

寄世祝　西升子

四方の海にいふねうかび　常よいくさをならし野の
ますら丈夫もいとまよて　遊ぶみ代こそたのしけれ

常磐前　佐々木光子

わすれがたみの子を思ふ　みだり心地よかきくれて
ゆきもやられずふみ迷ふ　伏見の野路のわびしきに
松のときいのかはらじと　たてしみさをも下をれて
おもはぬ方よなびきつる　心のうちこそあはれなれ

玉琴　佐々木光子

琴といいへどことのねい　さま〳〵ありて一くさの

ことにいあらず千種よて
飛彈のたくみのひと筋の
卿をはじめといふなれど
八雲ごととてふたすぢの
これもその音の今めきて
三つの緒ごとい里びたる
高きいやしきとりぐ〳〵よ
四つのを琴いみやびたる
をかしき物を目ゑひのみ
神の御代よりつたはりし
すがた形もをかしきを
琴といふ字はおゝつ緒の
ことゝしかくはみお人の

同じねこそいなかりけれ
須磨の緒こといあり原の
古きものといおもいれす
ことのこと葉い古けれど
いと新らしくおぽゆなり
おとよいあれど今の世よ
もて遊ばぬいなかりけり
音ばかりかいすがたまで
今いひく世となりよけり
やまと緒琴い六すぢよて
ひく人こそいたえよけれ
緒琴と云らでこゝろなく
此字をかりてもちふなり

玉のうてなのたまだれの
そのつま音をたづぬれば
みねの松かせふきおちて
いいこす音よかよふなる
うべも妙なる云らべよて
ことゝしいへばこの箏の
もろこし人のさやかなる
はたいつゝ絃のつま琴い
とよかく琴いさまぐ〳〵の
三すぢの箏のことの音よ

うちにゆかしきたま箏の
十まり三すぢのを琴おり
ふもとの川のしらなみの
おとに似る音なかりけり
言云らぬ音よおのづから
ことを琴とぞおもふめる
よるの月夜に云らぶてふ
いかなるねをか立ぬらん
こといあれども十あまり
まさらん琴いあらじかし

婦女詞藻第一編

佐々木信綱撰

新年部

新年　親子内親王　東京

玉ゑきの都もひなもへたてなき年を迎ふる御世のゆたけさ

天の原いつる朝日ものどかよて御代ゆたかなる年立よけり　小松宮頼子　同

もゝゑきの大内山の雪のうちに梅もよほひて年たちにけり　室町　清子　同

大方の年のひかりもうくひすの聲の内よやあらたまるらん　下田　歌子　同

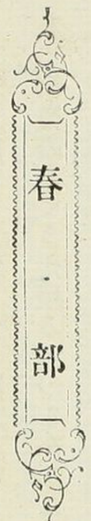
あら玉の年の始の今日といへゝ雲井のたつも千代よはふ也　中村　慶子　同

新しき年のはしめの朝なきよたつも千代よふ空のうみかゑ　富田　愛子　同

おのかゝゝ衣きよそひて祝ふかな今日新しき年のはしめを　伊藤　琴子　同

限なき君か八千代をいはふ哉くもりなき世の年のはしめよ　朝山　元子　同

新年朝　何とおく嬉しかりけり新玉の年たちかへる今朝のこゝろい　箱崎　綾子　伊豫
　あら玉の年たつ今朝の心もてひと年なからへんよしもかな　柳澤　清子　信濃
新年風　たてわたす大路の旗手うちなびきのどかにふくか年の初風　石渡　忍子　東京
新年雪　豐なる年のゑるしとかと松のこずゑおもげにつもる雪かな　木原　貞子　尾張
　門松にきえのこりたる雪のみい去年のまゝなる姿なりけり　木崎壹岐子　伊勢
　にきはしき年の始のゆきかひよ大路の雪はむらきえにけり　村上　夏子　同
　璞玉のとしいいつしかたちつれど猶ふる雪の寒くもある哉　菱田　雪子　丹後
新年山　珍しき年のひかりもさしそひて朝日かゞやく富士のとは山　鶴　久子　東京
　あらたまの年の光も見ゆるかなあさ日に匂ふふしのゑら雪　西　升子　同
　年たては霜くもりする山の端を霞みそめつと思ひけるかな　大野　定子　同
新年梅　さし出る朝日かをりて梅の花ほゝゑむ見れば年たちにけり　大塚　楠緒　同
新年探梅　年たちてとふべき家い多かれとまつ見よゆかん梅のはつ花　緒方　喜子　同
新年鶴　新玉のとしたちかへる大空に日影のどけくたつなきわたる　木原　升子　伊豫



春部

立春　二見潟あさ日とともにさす潮の音のどかなり春やたつらん　稅所　敦子　東京
　年ことよ來るをならひの春なから今朝しも更よ珍しきかな　佐々木光子　同
　谷川の岩間のこほりとけそめて浪の花さくはるい來よけり　豐田　照子　同
　春たつときゝつるからに諸人の心さへにものとけかりけり　八太　光子　同
　こよろきの磯邊のどかに春たちぬみちくる波の音も霞みて　橘　久子　同
立春風　山の端に雪いのこれとあつさ弓春たつ風いのどけかりけり　熊谷松枝子　陸前
立春霞　四方の海の波路ゑつかよ春たちて大和島根よかすみなた引　藤崎喜代子　對馬
嶺立春　こほりゐし岩間の清水とけそめて高嶺のどかよ春立にけり　朝山　元子　東京
海邊立春　薩摩かた西のうゐはらかすむなり沖ない島も春やたつらん　土持　鶴子　薩摩
山家立春　わか山のかけひの水い氷れとも春いよとます流れ來にけり　萩原　英子　薩摩

初春　はる風ハふき渡るゐり池水よむすひしこほりとけて流れて　増山深雪子　東京
いつしかも春來にけらし足引のやまへのとかに霞こめたり　新井安子　横濱
花もやゝ色めきそめて百千鳥鳴音のとけく春ハ來にけり　朝山元子　東京
遠近の野邊もやまへも春めきぬ雪まの小草いまやもゆらん　八太光子　同
うちなひく柳の糸のうすみとりまた深からぬ春のいろかな　青野常子　伊豫
初春霞　春ハまたあさちか原のうす霞なひきもあへぬ今日の色かな　伊藤辻子　仙臺
ひむかしの山邊のとかに棚引て霞そはるのすかたなりける　山下そよ子　能登
長閑なる春し來ぬれハ足曳の山よも野よもかすみたなひく　岡松子　肥後
名所早春　比良の嶺ハまた白雪の見えなから霞たゝよふ志賀のから崎　野中芳子　靜岡
山早春　ふる雪も花かと見えて三吉野のよし野の山ハ春めきよけり　近藤政子　東京
いつのまよ春ハ來よけん雪きえて霞たなひくをちこちの山　南條貞子　同
嶺早春　そことなく高嶺霞みてきえ殘る雪のこゐたよ春ハ來よけり　古宇田淑子　同
早春河　山河のゐくひの柳波こえてなはえぬへきはるたちにけり　佐々木安子　伊勢

雪きえてみかさ増れる谷川をかすみこそまづたち渡りけれ　佐々田波子　石見
早春池　日影さすかたへハとけてかたへのみ冬をのこせる春の池水　古宇田淑子　東京
春來れはみつの心もうこくめりさゝなみよする猿澤のいけ　竹屋雅子　同
早春湖　うら〳〵と霞みわたりて諏訪の湖の氷の橋も春めきよけり　立花幸子　同
澤早春　枯はてし淀の澤へのまこもくさ色めく春になりよけるかな　西升子　同
うす氷今朝とけそめて青柳のなひくかけこそ春めきよけれ　飯塚陸子　下野
行路早春　此處彼處雪とけよけり野邊見れハ此道よりハ春ハ來よけん　竹屋雅子　東京
社頭早春　うすらひも今朝とけそめて神垣の御手洗川よ春かせそふく　足利三尾子　同
初春梅　たつ春におくれす匂ふ梅か枝に初音を添るうくひすもかな　中山三保子　肥前
初春鶴　あしたつの聲うら〳〵と聞ゆ也千とせをいはふはつ春の空　長沼市子　常陸
春風解氷　梅津川こほりハ春にかへりけり花のひもとくはるのはつ風　西升子　東京
谷かはの氷ふきとくはる風よ浪のはついなさきいてよけり　天野厚子　攝津
吹渡る風のめくみよとゝこほる水のこゝろも打とけよけり　夢島糸子　仙臺

氷初解　春風いまたぬるきを山川のかたきこはりそとけ初ゑける　竹山　静子　東京
春色浮水　のこりなく氷なかれて河の名のかもの羽色を水ゑ見るかな　土方　時子　加賀
子　日　春日野にひきすてられし姫小松たか忘れたる千年なるらん　美濃部貞子　尾張
ねの日して引つる野への姫小松盡せぬ千代の色そ見えける　朝山　元子　東京
限なき君かよはひをのへゑ出て盡せぬちよの小松をそひく　新井　安子　横濱
今日といへい子日の松のふかみとり心ものへゑ引れける哉　辻　静子　三河
おのかゑゝ初子の野へにたち出て千代のためしを引小松哉　福岡　常子　越前
子日鶯　小松原をりしもきなく鶯のはつねをそへてひくよしもかな　美濃部貞子　尾張
若　菜　ふりいへて野邊にいゆかし我宿の垣根まはらに若菜萌けり　竹屋　雅子　東京
朝またきたれおりたちて洗ふらんわか菜流るゝさと川の水　南條　貞子　同
青柳のけふる頃こそ飛火野のもゆる若菜い摘むべかりけれ　美濃部貞子　尾張
長閑よも霞みそめけり岡のへの梅見かてらに若菜摘まゝし　玉澤　友子　伊豫
かきわけてつむ手も寒し初若菜またゆききえぬ野への下萌　伊藤つせ子　土佐

初若菜　むらきえの雪間にもゆる初若菜野へのみどりの始おりけり　福岡　常子　越前
雪中若菜　初若菜雪のふる野の跡見れいわれよりさきゑ人やつみけん　大谷　旭子　京都
とけやらぬ雪間たつねて里の子かつめとたまらぬ初若菜哉　石渡　忍子　東京
霞中若菜　春の野の霞の中ゑまよふかなまたうらわかき若菜つむとて　佐々木光子　同
野若菜　思ふとちかすむ野末ゑ打群れて歸さも忘らす若菜をそつむ　朝山　元子　同
若菜つむ人ゑましりて老の身も心のとかにあそふ野へかな　根岸　種子　同
田若菜　朝日さす門田にたちて今日も又わかなつむ子の多くも有哉　富田　愛子　同
澤若菜　春日野い霞こめたり下もえの雪消のさいのわか菜つまゝし　前野土佐子　伊勢
花かたみ手に携へて淺澤のわか菜つむなりさとのをとめ子　箱崎　綾子　伊豫
海邊若菜　野へいまた雪深からんこよろきの礒菜つむなり蜑の少女子　野口　直子　東京
故郷若菜　忘ら雪は猶ふる里の垣つ田に若菜つみつゝ今日もくらしつ　富田　愛子　同
芹　今日もまたつまんと思へは芹川のきのふの跡そ更に氷れる　臼井　民子　相模
枯殘る去年のひつちのひゑ毎ゑ見ゆる緑やねせりなるらん　角田　歌子　伊勢

霞

淺みとり霞そよはふまたさかぬ花のおもかけ見る心地して　牧野八重子　東京

消殘る雪まのくさのわさみとりそらよりうつしてたつ霞かな　櫻井　歳子　同

九折ちかくみえたるふもと路をさらにへたてゝたつ霞かな　美濃部貞子　尾張

積りてし尾上の雪のきえぬまに外山のかすみ立そめよけり　渡邊武良子　甲斐

見わたせいかすまぬ山もおかりけり積れる雪ハ猶消ずして　朝山　元子　東京

さは姫のかすみの衣たちよけりみ空よ春のいろもみえつゝ　村田　梅子　同

若菜つむころといおりぬ昨日今日遠の山へも霞みそめつゝ　梅枝　花子　同

山のはを立わかれゆく横雲よたなひきそふる朝かすみかな　原田　市子　對馬

霞知春　山姫の霞のころもうら〳〵とけさたつ春よたちもおくれす　西　升子　東京

朝霞　高さこの尾上の松もわかぬまて霞わたれるあさはらけかな　朝山　元子　同

むら消の雪の遠山ほの〳〵と朝日かをりてかすみそめたり　西　升子　同

晩頭霞　小鳥なく片山林こえくれはかすみなからよゝくれはてよけり　竹屋　雅子　同

名所霞　角田川波路はるかよかすむ也ちゝふかひかねいつくなる覽　岡田　煉子　同

水とりのかも川柳かせおきてかすみにけふる大ひえのやま　竹屋　雅子　東京

松浦かた唐土船もわかぬまてひれふる山にかすみたなひく　土方　時子　加賀

山霞　杉おらぬ春の去るしと三輪山に立かゝりたる初かすみかな　美濃部貞子　尾張

山のはよたえ〳〵なひく朝霞夜半のあらしやふき亂しけん　萩原　愛子　薩摩

玉すたれ雪にかゝけし山のいもなひく霞にとはさかりつゝ　中井　樂子　攝津

梓弓春くるかたを見わたせはまたきよかすむたかなとの山　北澤　雪子　信濃

花もまたさかぬ山へよ春霞なにをかくすとたおひきにけん　渡邊武良子　甲斐

嶺霞　信濃なる淺間かたけよ立けふりそことものかすかす霞こめたり　豊田　照子　東京

野霞　長閑けさもかきりなき哉見渡せいはる〳〵霞む武藏野の原　辻　静子　三河

川霞　大ひえの高ねのみ雪とけぬらしかもの川瀨よかすみ棚ひく　竹屋　雅子　東京

海上霞　和田の原八十島かけて春きぬとなみのほのかよ立かくす覽　小倉　柳子　同

朝日かけのほらんとする海原よたえ〳〵なひく朝かすみ哉　萩原　英子　鹿島

打よする波ものとかに聞ゆなり田子のうらわに春や立らん　萩原　愛子　同

海邊霞　嶋山いまた白雪のきえなくよかすみそめたる春のうないら　後藤　菅子　伊豫
磯山の松ふく風の聲たえてうゐいらとほくかすみこめたり　園部かち子　常陸
おひ風にこき行舟のゑら波もあとゐくかすむ春のうないら　堀内　浪枝　伊勢
浦浪よたちこめぬれといそ山の霞よのこる海士のさへつり　今井須摩子　東京
こき出し沖の小嶋もわかぬまてかすみわたれる須磨の海原　關　房雄子　富山

浦霞　春のきる衣のうちの波の上よたちかさねたる朝かすみかな　八田　光子　東京
朝しほのみつの浦わのうら〳〵とよせくる波ぞ霞み初たる　片山　孝子　伊豫

霞隔行舟　海士小舟霞にみえすなりよけり磯うつ波のおとはかりして　奥田　龜子　陸前

都霞　故郷の越路の雪やいかならんみやこいふかく今朝そ霞める　竹山　靜子　東京
大原女かゆきかふ袖もうら〳〵と鴨川つゝみかすみ渡れり　佐々木光子　同

里霞　打わたす里わの烟するゑきえてかすみのみこそ立わたりけれ　大生　靜子　同

山家霞　といるゝをいとひてすめる山里の心よかなふ春かすみかゐ　五十嵐敬子　岩代

松上霞　梢ふく風のおとのみ聞ゆなりかすみこめたるみねの松はら　松浦　琴子　尾張

待鶯　咲いてし梅の便いとくきけとまたうくひすのひと聲もせぬ　增山美喜子　東京
梅花さきそめたれとうくひすの初ねはいまた聞えさりけり　高崎　胤子　同
我宿の梅のはつはなさきにけりとくきてなかん鶯もかな　飯森　文子　加賀

鶯　梅の花さきそめしよりうくひすの聲も林とゐりにけるかな　岡田　煉子　東京
窓ちかき梅の立枝よ宿しめてなくうくひすの聲かをるなり　海老原增子　同
淺みとり柳の糸にやとゑめしてくり返しゐくうくひすの聲　新井　安子　横濱
白雪のふる巣をいて〻鶯いうめのはなかさきつゝなくゐり　田窪　常子　伊豫
春いきぬ梅い咲ぬとうくひすのゑらせかやにも鳴わたる哉　三枝　詮子　東京
朝日かけ匂へる梅の枝つたひ花ふみちらしうくひすのなく　桃園　岡子　薩摩

鶯告鶯　白雪のふる巣をいて〻山里に春をゑらするうくひすのこゑ　伊藤　正子　宮城

初鶯　梅か香を袖にしめつゝとめくれいはつねのさとよ鶯のなく　西　升子　東京
谷の戸をけさいてぬらん鶯のまたくちなれぬこゑの聞ゆる　富澤ちせ子　同
梅の花ほゝゑまぬ間にいとはやもきゝ得つるかな鶯のこゑ　中村　慶子　同

曉鶯　月かけいまた宿れる花園よあけやのいそくうくひすの聲　土持松子　甕島

とくなきて曉方の聲きかんまちてねし夜のやとのうくひす　南琴子　東京

夜をこめて谷のふる巣をいてぬらんあくる朝戸よ鶯のなく　眞部房子　伊豫

朝鶯　軒ちかき竹の林をねくらにてあさな〳〵にうくひすのなく　牧野八重子　東京

うくひすの長閑けき聲よあくかれて今日も怠る朝きよめ哉　富田愛子　同

さめかたき春の朝いをうくひすのいさめ顔よもねや近く鳴　和田吉枝　伊勢

さし出る朝日よ匂ふわか宿の梅の立枝にうくひすのなく　小嶋德子　上野

毎朝聞鶯　朝な〳〵あく物からにうくひすの今きゝ初し心地こそすれ　嶋田繁子　東京

夕鶯　鶯のこゑものとかにきこゆなりかすみのせきの春の夕くれ　龜井八重子　同

雨中鶯　ふる雨よ花のかすみてうくひすの聲のみよやふ春の野へ哉　小池道子　同

雨かすむ堤のやなぎほの〳〵とぬれていろこき鶯のこゑ　島田繁子　同

春雨にぬれつゝなやも行かへり園生の梅ようくひすのなく　花野ゑみ子　同

かのみゆる川そひ柳雨ならしかすみにぬれてうくひすの鳴　富田いな子　常陸

霞中鶯　衣手のもりの霞のひろけれともれてよほへるうくひすの聲　土方時子　加賀

山鶯　嵐山松の木の間を木つたひて花まちかほようくひすのなく　近藤拾子　東京

野鶯　朝な〳〵野へに鳴おる鶯のきけともきけどあかれさりけり　三條富子　同

雪深き野へよりあれどこゝも又春よりもれぬうくひすの聲　近藤茂子　駿河

野外鶯　春の野の荻のやけ原うら〳〵と霞む朝けようくひすのなく　西升子　東京

都鶯　雪ふかき谷より出て春といへゝ都よなるゝうくひすのこゑ　辻靜子　三河

山家鶯　鶯のこゑをもきゝつ山さとのうめさかりなる宿をたつねて　鶴久子　東京

山さとの嵐の枕わすられてあしたのとけきうくひすのこゑ　今井須摩子　同

人とはゝうき世の外の山さとも友ありかほにうくひすの鳴　島田繁子　同

きゝなれし松の嵐のさゆれとも軒はの山ようくひすのなく　樹谷直子　同

鶯の谷の戸ちかき山さとのみやこよしらぬはつねをそきく　安野雪子　同

梅上鶯　うくひすのけふもきてなく聲す也朝日かをれる梅の立枝よ　高部好子　相摸

梅か枝よおきふしおるゝ鶯のついさゝふかき香よや染らん　膳梅子　上野

梅間鶯　この朝げ花さきそめし我庭のうめの立枝よりうくひすのなく　牧野みの子　東京

ひと枝と立よる梅もうくひすの囀るみれゝ折られさりけり　山田　淳子　大坂

窓ちかくよはへる聲ゝうくひすの梅の木の間よき鳴也けり　大谷　雪子　越前

梅林鶯　咲よほふ梅の林ゝうくひすのこゑもいまこそさかり也けれ　萩原　英子　鹿島

うくひすの聲の林となりにけり野中の里のうめのひとむら　土持　綱子　同

くるゝまで鳴うくひすの聲すなり梅の林やねくらなるらん　相原　梅子　播津

竹間鶯　うくひすゝ梅よのみとも思ひしをふし面白く竹になくなり　野田　宮子　東京

朝夕に友となれつゝくれ竹にふしおもゑろくうくひすの鳴　五十嵐敬子　岩代

竹林鶯　外よりゝひとふしたかくきこゆなり竹の林のうくひすの聲　平松代牟子　三河

茂りそふ竹の林ゝうくひすの聲もひとふしめつらしきかな　萩野千代子　伊豆

松間鶯　ちりやすき花にやとらてときゝなる松の木の間よ鶯のなく　杉　里子　東京

窓前鶯　文まなふ窓の光とさく梅よこゑさへそへてうくひすのなく　朝山　豊子　同

窓近き梅の立枝よ花さへもこはるゝはかりうくひすのなく　太田　金子　同

餘寒　春といふ名のみたちつゝ猶さえて冬にかゝらぬ昨日今日哉　朝山　元子　東京

佐保姫の霞のころもうすらきて猶肌さむしきさらきのそら　横山　悅子　羽後

冴かへる嵐をさむみうくひすのとけし涙もまたこはるらん　岩本　愛子　因幡

餘寒風　梅の花匂ひそめしをこの朝けまたさえかへる春のやまかせ　高崎　胤子　東京

餘寒月　さえかへりかせさむけれは春のよの月の鏡ゝ曇るとも哉し　増山深雪子　同

昨日今日又冬めきてさくうめの花の香さむしゆふ月のかけ　竹口　要子　同

谷餘寒　谷かけゝ春おほ寒しうくひすの涙のつらゝいとゞそふらん　前野土佐子　伊勢

水郷餘寒　春きてもせゝのあしろ木つらゝゐて猶風さむし宇治の川面　川村　春子　常陸

春　雪　春風よふきさそはれて我庭のまつの上ゑろくあわ雪そふる　中村　慶子　東京

二つ三つ今朝さき出し梅か枝をさかりとみせて積るあわ雪　大塚楠緒子　同

春たてと冬の日數や殘るらんかすめるそらよあわ雪そふる　南條　貞子　同

咲ぬまは花よよそへてなかめましさくらか枝よ積るあわ雪　新井　安子　横濱

うめか枝に花と見てなくうくひすの涙にとくる春のあわ雪　渡邊武良子　甲斐

朝日かけよほふ外山の梢より花とちりくるはるのわわゆき　中野　初子　伊勢
春のきて霞みし空のともすれいまたさえかへりあわ雪を降　村上　鶴子　同

山春雪
昨日まて霞みし物をさえかへり雪よなりゆくをちかたの山　伊藤津世子　土佐
吉野山またるゝ花と見ゆるかな霞のそてよかゝるそらゆき　井上　道子　同
都人若菜つむ日もわか山はなほさえかへりゆきのふりつゝ　中島　常子　同

野春雪
春日野に若菜つみにとさしてゆく三笠の山にわわ雪そふる　土持　綱子　豐島
少女子かのへの若菜をつむ袖につもるともなく泡雪そふる　清家　文子　伊豫

海邊春雪
浪の花ちるかとみれいいそなつむめさしか袖よ泡雪のふる　鶴　久子　東京

春雪隨風
はる風よ吹さそはれて又さらよ櫻かえたよゆきのはなさく　大生　静子　同

松上春雪
山松の上葉よかゝるわわ雪をよほひそめたる花とこそみれ　天谷　安子　同

殘雪
春さても猶さむけれい山里の松のそらゆきさえんともせす　新井　安子　横濱
山かけよ消のこりたる雪みれはまた冬くれぬ心地こそすれ　野中　芳子　静岡

嶺上殘雪
春ふかき霞の奥よのこりけり秋よりみえしみねのそらゆき　小池　道子　東京

風ぬるみ南おもてのをすまけいわか袖まちて梅かをるなり　徳川　孝子　京東
うくひすの都よいてん中宿よかさはやと思ふ梅さきにけり　太田垣蓮月　西京
うす氷とくる汀よきてみれい梅のはつはなほころひよけり　岡田　煉子　東京
ふきおくる風のたよりよきてもみよ友なきやとの梅の花笠　青野　常子　伊豫
三つ五つ花さきにけりかれたりと思ひすてたる梅の老木よ　矢定　頼子　備前

尋梅
梅かをるかたいいつこと尋ぬれば去るべかほよも鶯のなく　土持　兼子　薩摩

梅初開
さきそめし梅いかそふるほとなから袖よあまるい匂也けり　藤井　職子　東京
鶯のはつねうれしみ立よれいかきねの梅もほゝゑみよけり　多羅尾藤子　近江

雪中梅
おしなへて雪はふれともうくひすの來鳴にゑるし梅の初花　辻　梅子　伊勢

霞中梅
打かすむ灘波のうらの朝ほらけあしのまろ屋に梅かをる也　金戸八重子　下野

朝梅
おきうしと思ふ枕にゆかしくも梅か香さそふ春のあさこち　増山深雪子　東京

夕梅
春雨のはれなんとする夕庭の露ふくかせにうめかをるなり　石川　英子　伊勢
うくひすのなくねいたえて夕庭い梅の匂ひよなりにける哉　朝山　元子　東京

月前梅　うくひすのおかぬはかりそ恨おるおぼろ月夜のうめの下陰　竹屋　雅子　東京

有明の月ハおぼろに影みえてねさむるまとよ匂ふうめかな　箱崎　綾子　伊豫

我宿の軒ばの梅やささぬらんをすもる月のかけかをるなり　服部生渡子　但馬

梅薫風　いくはくの人の袂よ匂ふらん梅ささつゝくはるのやまかせ　島田　繁子　東京

なつかしく立よる袖よ匂ふかなすき田の里の梅の玄たかせ　竹口　要子　同

梅遠薫　いつこよりふきくる風かさそひけんなひく柳に梅かをる也　中井　樂子　攝津

梅薫枕　閨の戸のすきもる風を玄るへよてねさめの床よ梅かをる也　長沼　濱子　常陸

うたゝねの枕たつねてかをるなり梅か香さそふ春のさよ風　佐々木光子　東京

愛梅　春毎になつかしさこそまさりけれ年經し宿の軒のうめか枝　森田ちく子　武藏

園中折梅　手折さていさ花かめよさしてまし園生に匂ふうめのはつ花　伊藤　琴子　東京

我園の物なりなからうくひすよ心おきつゝうめを折るかな　中野　初子　同

梅盛　今日こそい盛なりけれうくひすも玄たひかはなる梅の一本　三條　富子　同

花の香のいつより深し梅の花さきの盛は今日にかあるらん　杉　里子　同

梅花盛久　色も香もさかり久〳〵き梅の花幾代ぬはるかさかえゆくらん　大岡　操子　同

たくひなき色香よ匂ふわか宿の梅のさかりそ久しかりける　平田以志子　同

鶯のこゑのよほひもくはゝりてさかり久〳〵き梅れひとも〻　後藤　花子　同

雪のうちよ花さきそめて二月のなかはも梅いさかり也けり　矢定　頼子　岡山

山梅　花の香れ空もおぼろにかすとつゝ月の瀬山い梅さかりあり　大谷　旭子　西京

行路梅　行かよふ人の袂のかをれるいみちれかたへの梅やさきけん　辻　梅子　伊勢

海邊梅　沖津風八十島かけて匂ふらんいそ山もとのうめさきよけり　西　升子　東京

芹つまん少女もいまたおりたゝぬ野川の岸の梅さきよけり　鶴　久子　同

海士の子か袖いかはかりかをるらん梅か香おくる浦の朝風　又原　倉子　同

貝ひろふ海士の袂もかをるらしいそ山かけの梅さきにけり　堀内　浪枝　伊勢

水邊梅　川水よちりて流るゝ梅の花たかさとまてかよほひゆくらん　横澤　寮子　仙臺

橋邊梅　夕まくれそゝろありきれ橋の上よ梅か香ぬるく春風そふく　橋　糸重子　京東

竹川の水のみとりもかはるまて橋のつめなる梅さきよけり　海老原増子　同

山家梅　我宿の軒端のうめの花の香をみやこよおくるはるれ山かせ　増山雪汀 東京
　　み山路にふみまよひつゝおもはすも賤か垣ねの梅を見る哉　高崎胤子 同
　　大原女か袖なつかしくかをるなり梅さきぬらんやせの山里　村上夏子 伊勢
　　うゑ置し軒端の梅のよほはすい春をもそらしみやまへの里　葛輪繁子 同
田家梅　尋ねくる人もわれとやを山田にあるしかやにも梅咲よけん　古宇田淑子 東京
里梅　かつしかの里とひくれいやつれたる藁屋の軒も梅咲にけり　井上八十子 同
社頭梅　ふく風も梅が香ふかくなりにけりひとのとたえぬ神の御社　大谷惠子 同
隣家梅　中垣の隣の梅もかせふけいよほひいやとのものとこそなれ　萩原英子 鹿島
　　中垣の隣の梅のよほひをもおくるやかせのなさけなるらん　矢定頼子 備前
庭梅　咲きみちて雪の姿よまかへともまかはぬ庭の梅の香そする　中村慶子 東京
簾外梅　玉すたれそと巻上て見いたせい軒端のうめよ月そやとれる　竹屋雅子 同
船中梅　こき出て梅のあたりいすきたれと舟のほのかよ風かをる也　西升子 同
梅林聞笛　梅の花かさしてかへる夕くれよたか宿ならん笛のねそする　高崎胤子 同

落梅　たちよりて結ふ袂もかをるなり梅のはなちる春のかはみつ　野口直子 東京
夕落梅　うくひすもねくらよかへる夕暮にひとりもちるか窓の白梅　富田愛子 同
谷落梅　うくひすの花のねくらや寒むからん雪とちりかふ谷陰の梅　萩原愛子 鹿島
柳　吾妹子かすかたとやみん春の日にのとけくなひく玉の小柳　三條富子 東京
　　佐保姫の手染の糸を織りかしして誰にきすらん春のをやなき　太田露子 同
　　ふくとしもなき春風にかひくかな柳や春のすかたなるらん　美濃部貞子 尾張
　　打なひく柳の糸の淺みとりこやさはひめの手そめなるらん　箱崎綾子 伊豫
　　立並ふ木々いあれとも青柳のなひくすかたにより枝そなき　片山孝子 同
夕柳　長閑なるゆふへよみれい柳原かすみの色もみとりかりけり　北澤雪子 信濃
雨中柳　ふる雨に池の鏡もくもりけんみたれてたてる玉のをやなき　富田愛子 東京
　　この頃の雨よなひきて糸柳いとゝふかむるはるのいろかな　南琴子 同
　　ふくとなき風のみたれに露みえて垣内のやなき雨かすむ也　岩本愛子 因幡
　　花ならいいかにいとはん春雨よぬれて色ます青やきのいと　土方時子 加賀

雨後柳　春雨のなごりの露の玉やなきちらさぬはとの風も見えけり　西　升子　東京

雨晴れしあしたよみれい柳原玉のはやしとありにけるかな　萩原　英子　鹿島

柳風　春のいろのたつた川原の朝風に枝まつうこくきしの青やき　伊藤　琴子　東京

こと木にいふくとも見えぬ春風のやとりい庭の柳なりけり　島田久須子　土佐

柳糸風静　池の面をわたる朝こちぬるけれい柳の糸もみたれさりけり　服部　欣子　東京

柳靡風　春風のさそふまに〳〵なひけとも柳の糸いみたれさりけり　西　升子　同

長閑なる春の心にふく風をなひくやなきのいとよみるかな　土屋　幸子　美濃

舟つなく入江のきしのいと柳みたるゝみれい風わたるなり　芽野　静子　甲斐

柳如烟　衛士のたく煙とみえてゐひくかな雲井の庭のあをやきの糸　青野　常子　伊豫

川柳　くし田川水のなかれよ影みえて眉つくるめり岸のあをやき　辻　田豆子　三河

川そひの老木の柳春くれいみつのかゝみよまゆつくりつゝ　箱崎　綾子　伊豫

池柳　末つひに池の小魚やよりくらんまたなかゝらぬ青柳のいと　大野　定子　東京

水邊柳　川へゐるゐくひの柳なはへして水のこゝろも春めきよけり　西　升子　同

江柳　水きよき入江の岸の春風にやなきもまゆをつくりそめけり　海老原増子　東京

浦柳　汐やかぬ浦のとまやも吹かせになひくけふりい柳なりけり　跡見　節子　同

海邊柳　舟つなく入江のきしのふゝ柳けふるをそれい春めきよけり　森川　治子　同

門柳　さは姫の手ひきの糸をくりかへしひまなくゐひく門の青柳　田邊　朝子　同

窓前柳　春風に軒端のやなきゐひくらんまとの燈火見えかくれする　土持　綱子　鹿島

賤の女か袖よかゝりてみたれけり機おる窓のあをやきの糸　桃園　岡子　同

若草　もえ出る野中の岡の若草にまたふかゝらぬはるを去るかな　大橋　時子　東京

こゝかゝこ春の光よ雪きえてもえいてよけり野への若くさ　海老原増子　同

春淺み垣ねに雪いのこれともやゝいろつきぬ野への若くさ　木原　升子　伊豫

雨中若草　春雨のふるや岡へのわかすゝき手をきる程とはや成よけり　大塚楠緒子　東京

山若草　見渡せいひとつみとりよもえいてゝ若草山い春めきにけり　箱崎　綾子　伊豫

川若草　うす氷とくる野川の岸みれいもゆる小草ぞいろまさりける　八島　幸子　常陸

垣若草　いつのまよ色よ出よけん春雨のきのふかふりし垣のわか草　跡見　節子　東京

蕨

折る人もなき山里のさわらびはほとろとなりて春たけよ鳧　石渡　忍子　東京

打はらふくち葉か下にもえ出るわらひ折よく見いてつる哉　島田　繁子　同

峰いはやおとろよ成ぬさわらひい春の裾野におりて摘まし　美濃部貞子　尾張

山蕨　家つとよ折てやゆかん春山のかなたこなたに萠るさわらひ　辻　豊子　東京

嶺蕨　色かへぬ高ねの松のえたわらひおのれもえてや春をえる覽　曾我部佳枝　伊豫

谷蕨　木こりのみ通ふ谷間の下わらひおとろと成ぬ春ふけぬらし　前野土佐子　伊勢

岡蕨　うら〳〵とかすむ岡へのはつわらひ折よわひても萠出よ鳧　大生　靜子　東京

旅人のゆきゝの岡のさわらひいたか家つとに折てゆくらん　小倉　柳子　同

野蕨　霞たつ野への小松の下わらび折よきほとにもえいてにけり　竹口　要子　同

山家蕨　山里の谷のとかけのえたわらび折々ことにひともとひけり　島田　繁子　同

都人かへさわすれて手をるめりわか山さとの軒のさわらひ　橘　糸重子　同

行路蕨　花見よと霞とゝもよたちいてし道のほたーの初わらひかな　眞光千枝子　同

折蕨贈人　たてまつるこのさ蕨よつみため〳〵心のほとを思ひやらなん　辻　田豆子　三河

春　月

足引の山の端くらしありあけの月いかすみの中よのこりて　華頂宮郁子　東京

手枕い花のふゝきようつもれてうたゝねさむし春の夜の月　下田　歌子　同

霞む夜の梅を月かと見いたせいやかてまことの影そ匂へる　今井須磨子　同

梅か香を袂よえめてかへるさをおやろなからよ送る月かな　森田　米子　同

つきかけの霞みそめたる山の端よ春の光そあらはれよける　天野　瀧子　同

佐保姫のかすみの袖よ影ふけてのとけくも有か春の夜の月　辻　靜子　三河

いよしへの人なつかしきおやろ夜の霞の袖よ月そよやへる　石川呂久子　東京

さく花の梢よかゝる月かけいかすまても猶おやろなりけり　三野瀬澄子　同

山姫のかすみの袖をもれ出てひかりやのめく春の夜のつき　村上　鶴子　伊豫

梅か香い空よも深くみちぬらしかけをつかしき春の夜の月　小山田寅子　下野

曉春月　あらし山花よ心やのこるらんこすゑよかゝるありあけの月　富澤　高子　武藏

雲間春月　さらてたよ霞むならひの月影を雲なかくしそはるの夜の空　片山　孝子　伊豫

霞中春月　山姫の霞の袖よつゝまれておやろよくもるはるのよのつき　村上　鶴子　同

春月朧　人わかて霞むもうれしおやろ夜のそゝろありきの袖の月影　今井すま子　東京
遠山春月　くるゝまて花にむかひし遠山の高嶺よ匂ふはるのよのつき　柳原　愛子　同
岡春月　きゝすなく岡への松を立こめてかすみも深しおやろ夜の月　海老原増子　同
川春月　墨田川つゝみの花もみえぬまて霞みはてたるはるの夜の月　千種　任子　同
　行水のきよたき川ようつりても猶おやろある春のよのつき　伊藤　琴子　同
川上春月　流れても影ハのこりて山川よおやろようつる春の夜のつき　喜村　藤子　尾張
水邊春月　さく花のちりてうかへる吉野川流るゝ月も香よにほふめり　富田　愛子　東京
　よる浪の音もたつみてすみた川やなきよ霞む月を見るかな　平井早稲子　茨城
海邊春月　住吉の松はらつゝきうちけふり浪路はるかよ霞むつきかな　島田　繁子　東京
海上春月　大海の浪のうへとも見えぬまてのとかよかすむ春の夜の月　中島　歌子　同
里春月　さきつゝく花のにおひよ霞むめり吉野の里のはるのよの月　大橋　時子　同
山家春月　おるはたの音はかりして賤かすむ垣根もみえぬゆふ霞かな　竹屋　雅子　同
田家春月　かはつなく川田の面よ夕へ〳〵影おやろよもやとる月かな　高木滿壽子　備前
都春月　おのつから影ものとかに見ゆるかな花の都のはるの夜の月　寺西　菊子　尾張
里春月　さきそむる花の香こめに霞むなり小梅の里のおほろよの月　原田時雨子　伊勢
故郷春月　何となく昔の春そたのはるゝとしふるさとのおほろ夜の月　竹屋　雅子　東京
梅上春月　たちこむる霞の袖をもれ出てゝ梅の木の間よにほふ月かけ　石渡　石子　越前
柳上春月　夕風もたつまりはてゝ窓の外の柳にかゝるおほろよのつき　高崎　胤子　東京
　眉つくるかゝみの池の玉柳つきのかけさへのとけかりけり　牧野喜代子　同
簾前春月　玉簾かゝけて見れとはるの夜のおほろ月夜はおほろ也けり　樹下　範子　同
樓上春月　たかとのゝおはしま近くちる花の行方も見えぬ春の夜の月　姉小路良子　同
春雨　さくら田の花の梢をくれなゐよけふもかへして春雨のふる　美濃部貞子　尾張
　打けふる木のめはるさめ日數へぬ野への小草も萌やたぬ覽　島田　繁子　東京
　淺緑そひゆく見れはあをやきのいとおもけにも春雨そふる　森　喜美子　同
　うち霞むかやか軒端よため〳〵とそゝき出たる春の雨かな　金子　錠子　同
　佐保姫のかすみの袖やたをるらん裾野の原に春さめのふる　岡田　煉子　同

花さけどふる春雨よわか宿はのきのたまみつ音ばかりして　渡邊武良子　甲斐
たえまおくふる春雨に佐保姫のかすみの衣うちぬめるらん　野口　直子　東京
春雨はかやか軒端におとともせて今日もひねもす降暮しつゝ　豊田　照子　同
鶯のぬれつゝきなくわかやとののきはのうめよ春雨のふる　八太　光子　同
白玉をやなきの糸にぬきなからふるとしもなきはるの雨哉　岡上菊榮子　高知

朝春雨

うくひすの鳴音も今朝はぬめりつゝ枕の山に春さめのふる　大森　幹子　伊勢
朝またきぬたりやおきにちる露の滋きを見れい春雨そふる　菅原　光子　福島

夕春雨

のとかにもくるゝ夕へと見しやとよ外山霞みて春雨のふる　大道寺民子　陸奥
家鳩のなく音ぬめりて夕へ〳〵と夕へぬつかに春雨のふる　和田山枝子　尾張
つれ〳〵と春雨そゝく夕くれい秋のあはれも何おらぬかな　松浦　琴子　同
春霞たちかさおれる夕くれいふるともおしに雨になりゆく　杉原　常子　相模

夜春雨

うくひすの花の枕やいかならんこゝろしてふれよはの春雨　小倉　玉子　東京
夜もすから降春雨にうくひすの花の宿りやぬめりはつちん　松野　鐵子　同

ひるのまいふるとも見えぬ春雨も軒の雫よぬるき夜いかな　加藤　俊子　信濃

霞中春雨

椿ちるかた山はやしこえくれいかすみよりふる春の雨かな　西　升子　東京

春雨静

春風い軒のやなきよをさまりて雨ぬつかなる夕まくれかお　片岡　蔦子　越中

岡春雨

雉子なく片山もとの岡つゝき麥生よはひてはるさめぞふる　松門三草子　東京

川春雨

桂川かすめる月のかけ見えてきしのやおきよはる雨ぞふる　橋本　芳野　西京
若鮎くむ子らいかへりしかも川の柳けふりて春さめのふる　竹屋　雅子　東京

水邊春雨

川岸のやおきのうれの春雨いけふりましりに注くなりけり　辻　静子　三河

海邊春雨

あしたつの千代よふ聲もかすかにて春雨けふる天のはし立　北方利根子　越中

里春雨

鶯もふる巣こひしくおもふらん梅津のさとの雨のゆふくれ　西　升子　東京

山家春雨

山里のものさひしさもまさりけり花よりのちの春雨のころ　美濃部貞子　尾張
かしましきうき世のかれし山里の心ぬりたるはるの雨かお　萩原　英子　薩摩

田家春雨

けふもまた音なくそゝく春雨よ寂しさまさる小田のふせ庵　牧野みの子　東京
明日よりい蓬つまんと少女子のかたらふのきよ春雨そふる　小倉多摩子　同

閑居春雨　うくひすのぬれつゝきなく春雨よとふ人もなし蓬生のやど　伊藤　琴子　同

閑庭春雨　わらひたくうなゐか聲もたえいてゝ春雨けふる淺茅生の庭　南條　貞子　同

柳上春雨　我門のゑたりやなきに露見えていとも靜けくそゝく雨かな　曾我部佳枝　伊豫

旅中春雨　うち露みふるとも見えぬ春雨に袖うちぬるゝ旅のそらかな　相葉　隆子　尾張

春曙　山烏ねくらをいつる聲の中よ花ゑらみゆくはるのあけぼの　柳原　愛子　東京

ゑま山ゝ霞よきえてはま松のこすゑ見えゆく春のあけぼの　千種　任子　同

不二の嶺ゝ空によほひて三保の浦のまつ原くらしはるの曙　稅所　敦子　同

鳥の音におどろく窓の夢さめて花こそゑらめ春のあけぼの　小倉　玉子　同

立こめし霞のうちに山の端の花見えそむるはるのあけぼの　小倉　文子　同

ほの〳〵とかすみなからよをくら山花の梢そしらみ初たる　園　祥子　同

こゝよも筆よもあまるけしきかな長閑けさこもる春の曙　大岡　操子　同

月雪のいつれゝあれと山櫻ほの〳〵にほふはるのあけぼの　大谷　枝子　同

老て世よ心とめしと思ふ身のほたしなりけり春のあけぼの　上田　重子　西京

おほろ夜の月ゝやまへよかけおちてほの〳〵かすむ春の曙　三井　路子　同

今日もまた花よくらさんあらましのこゝろにうかふ春の曙　田邊わけ子　同

ありあけの月ゝ霞よきえそめてちる花ゆかし春のあけぼの　橋本　芳野　同

春の色ゝいつはなけれと長閑けさのかきりゑられぬ曙の空　石井　光子　同

山の端をわかれ殘りし横雲の花よなりゆくはるのあけぼの　小脇　英子　同

うくひすにおどろかされて見つるかな櫻よゑらむはるの曙　柴田八重子　伊豫

山春曙　からすなく聲も霞ようつもれて山の端くらしあけぼの〻空　大塚楠緒子　東京

ありあけの月の光も霞むありまくらの山のはるのあけぼの　石渡　忍子　同

打渡すとほ山まゆやけふるらんかすみにほふ春の明ぼの　鈴鹿久米子　西京

吉野山ゑらむこすゑになくとりの聲さへ匂ふ花のあけぼの　中野　初子　伊豫

さくら色よ空も匂ひてほの〳〵と花にあけゆく三吉野の山　葛輪　繁子　伊勢

ほの〳〵と尾上の花ゝゑらみつゝかたやまくらしはるの曙　菱田　刀子　西京

峯春曙　横雲のわかるゝ峯よさく花のゑろく見えゆくあけぼの〻空　舟橋　房子　同

浦春曙　蜑の子も舟出いそかしたちこむるかすみの浦の春の明はの　中村　慶子　東京
崎春曙　都にもうつしてしかおうす墨の繪島か崎のはるのあけはの　萩原　英子　薩摩
海邊春曙　浪の花霞のひまよ見えそめてうらなつかしき春のあけはの　長尾　鶴子　西京
春　望　舟つおく川そひ柳うちはへてかすみようかふをちのひと村　大橋　時子　東京
朝またき春の野つらを見わたせいかきりもわかすたつ霞哉　豐田　照子　同
水郷春望　春風のなこのうらわのいさり舟見えみかくれみ霞む頃かな　服部　賢子　加賀
江春望　舟つなく入江の里のゆふまくれ魚つる子らの袖かすむなり　海老增增子　東京
海邊春望　はる風の吹上の濱よきて見れい貝ひろふ子のそて霞むなり　桃園　岡子　薩摩
夕まくれ浪路はるかにこきいて丶霞をたとる海士のつり舟　石渡　石子　越前
名所春望　去からきの杣山さくらほの見えて霞も去ろしたなかみの里　西　升子　東京
春　駒　おひ先も去るく見えけり角くみてもゆる蘆毛のはるの若駒　美濃部貞子　尾張
あれまさるたち野の牧の放れ駒いはゆる聲も春めきにけり　海老原增子　東京
たち渡る春のほたしにいさむらん野飼の駒の聲そ長閑けき　横山　悅子　羽後

霞たつ春の野かひのわら駒もうらわか草になるゝころかな　木原　升子　伊豫
いとゆふのつおきやとめ｜春の野の柳の陰を駒のはなれぬ　矢定　頼子　備前
霞中春駒　うら〳〵と霞める奥や牧ならんいはゆる駒の聲そきこゆる　片岡　君子　東京
月前春駒　月かすむ野原に遊ふ春駒いミおからかけと見えわたるかな　小原　蒸子　同
野春駒　若草のもゆる春野のはなれ駒はおてとよそよ放れさりけり　木崎壹岐子　伊勢
歸　雁　花さけいおもひ〳〵よ故郷をさ｜てそいそく春のかりかね　高崎　胤子　東京
雁かねのきこゆる空をなかむれい名殘とゝめす月そ霞める　竹山　靜子　同
大空を雁かへるなりをちこちの花のさかりを跡よ見なして　伊藤　琴子　同
見るまゝよ遠さかりゆく雁かねの聲の行方やいつこなる覽　岡田　煉子　同
ちる花のうきを見しとや雁かねい心つよくも思ひたつらん　美濃部貞子　尾張
深夜歸雁　さ夜ふけて雁かへるおり月かけに匂へる花をあとよ殘して　黑田　光子　肥後
曉歸雁　かへる雁花を見すて丶曉のかすみかくれよこゑそきえゆく　深山深雪子　東京
霞みつゝまたあけやらぬ大空をなよいそくらん春の雁かね　箱崎　綾子　伊豫

盛なる花を見すてゝゆく雁のこゑさへかすむありあけの空　石渡　忍子　東京

曙歸雁　ほの〳〵と花よりあけてうち霞む枕の山をかりかへるあり　橋本　芳野　西京

朝歸雁　寐覺して思ひたちけん今朝見れい蘆邊の雁の數のすくなき　下田　歌子　東京

古草のゝとりよかへる朝庭を見つゝしをれい雁もゆくなり　佐々木鴉子　伊勢

夕歸雁　水莖の岡のやかたのゆふつく夜よみときかたきかりの玉章　藤井　靜子　東京

月前歸雁　雁かねの聞ゆる空をなかむれいかすめる月に聲はかりして　竹口　要子　同

四方山の花のさかりをよそよ見て霞める月に雁かへるなり　海老原增子　同

浦歸雁　櫻鯛つりする浦よ遊ふ子かゆひさす見れいかへるかりかな　鶴　久子　同

のとかなる霞の浦のいつはあれと花のときしも雁のゆく覽　竹尾　鶴子　三河

海邊歸雁　かへる雁雲井はるかよ聲すなりおぼろ月夜の天のはしたて　松本　龜子　肥後

燕　春風のさそふまよ〳〵ちる花をついさにかけてとふ燕かな　大塚楠緒子　東京

はる雨のふる巢よ歸るつはくらめ馴よし軒や忘れさりけん　小坂多余子　同

燕すら花のさかりをゑたふらん去年の古巢に歸り來よけり　片岡　君子　同

去年うゑし門の柳を去るへよて今年も來つるつはくらめ哉　常盤井鈴子　伊豫

風前燕　青柳のいとくりかへすはる風よ亂れて遊ふつはくらめかな　海老原增子　東京

古宮燕　古宮のやれまくゝりてつはくらめ去年の古巢よ土はこふ也　岡田　煉子　同

柳上燕　春風になひく柳のいとかろく軒端にかよふつはくらめかあ　新泉　傳子　同

曉呼子鳥　ほの〳〵と花より去らむ曉よねやなる人をよふ子とりかな　渡邊武良子　甲斐

山櫻さきぬと人をよふこ鳥なきくらせともかひなかりけり　藤井　靜子　東京

山呼子鳥　鳴けやなけ耳なし山の呼子鳥山のやまひこたへするまて　西　升子　同

春霞たちかくしたるみ山路にさひしと人をよふことりかな　金子　錠子　同

柴人のかへる山路のよふことり心ありけに今日もあくなり　辻　豐子　同

春ふけしみ山のおくの木かくれにうら悲しくも呼子鳥かな　土屋　郁子　同

雲雀　さくらさく花の雲間の春風ようかれてもなくゆふ雲雀かあ　島田　繁子　同

ひいりなく聲をちこちよ聞ゆ也いつくも春い長閑かるらし　富田　愛子　同

遊ふ糸やつおさとめけんおちかねて空よたゆたふ夕雲雀哉　石渡　忍子　同

山の端もくれそめしより今いとて芝生におつるゆふ雲雀哉　大橋　時子　東京

春の野の蕨をりよととめくれい霞む岡へよひはりなくなり　辻　靜子　三河

はゝこさくあたり離れすちゝとおく雲雀の雛の聲わはれ也　菅原　光子　福岡

霞中雲雀　雲雀たつすかたいそれとわかねとも聲い霞よ障らさりけり　大塚楠緒子　東京

花すみれさく野へゆけい春霞よはへるそらに雲雀なくなり　相原　梅子　神戸

朝雲雀　朝またき霞める野邊をこえくれい袖の下よりたつ雲雀かな　八島　幸子　常陸

夕雲雀　菫つむ子らいかへりし野司の霞むゆふ日よひはりなくなり　新井　安子　横濱

夕くれいゑいふの子をやおもふらんみ空の雲雀聲の落來る　辻　豊子　東京

野雲雀　とふ火野を朝たち來れい萌出るわかくさ山よひはりおく也　竹山　靜子　同

はる霞匂へる野へよきて見れい心もそらよたつひはりかな　澤野　厚子　同

室の津をあさたち來れは明石瀉須磨の上野よ雲雀なくなり　土持　綱子　薩摩

雉子　春野やく烟のうちよたちかねて子を思ふきしの聲わいれ也　岡田　煉子　東京

はるの野の菫つみにとゆく子らを驚かしてもたつきゝす哉　八太　光子　同

霞中雉　はろ〳〵と櫻こゑるゝはるやまの霞のおくにきゝすおく也　佐々木光子　同

雨中雉　子を思ふなみたの露かきゝすおく麥生の床に小雨ふるなり　渡邊武良子　甲斐

椿ちるかた山かけよはろ〳〵と雨ふりいてゝ雉子なくなり　南條　貞子　東京

朝雉　足曳の片山はたを朝來れいむきふかくれよきゝすおくあり　藤井　靜子　同

夕雉　おゑ空い霞とともよくれはてゝ夕日のをかよきゝす鳴なり　三浦　作子　上野

くれかゝる山路の末の小松原うす月見えてきゝすなくなり　矢定　頼子　備前

雨かすむ片山里の夕くれよさひしさそへてきゝすなくなり　高木滿壽子　同

遲日　青柳の糸くりかへしなかめてもくるゝ色なきはるの空かな　西　升子　東京

花見つゝ野こえ山こえ越えゆけと猶春の日い暮んともせす　岡田　煉子　同

たれかかく手綱ゆるへて春の日い隙ゆく駒をひき留めけん　八太　光子　同

入相の鐘よりのちもあを柳のいと長き日いくれかてよして　曾我部佳枝　伊豫

野遊　さきつゝく野邊の菫の花むしろをく物なしと遊ふ今日かな　佐々木光子　東京

春の日いすみれ蕨ととりく〳〵よ心ものへにあくかれよけり　伊藤　琴子　同

今日も又あかぬまとゐゑあくかれて家路忘るゝ野への諸人　新井　安子　横濱

長閑なる春の光ゑさそゐれてこゝろをのへに出ぬ日そなき　井上八十子　東京

打むれてつ花すみれゑ遊ふ野ゐうき世はなれし所なりけり　堀内　浪枝　伊勢

鶯のこゑきゝしよりはるの野ゑ心ひかれぬ日そなかりける　中井　樂子　攝津

白妙の袖をつらねてみな人のすみれさく野ゑあそふ頃かな　嶋田久春子　土佐

連日野遊　あかあくに今日も暮けり明日も又朝とく起て野へゑ遊はん　高橋增江子　東京

遊　糸　我のみと思ひてをれゐ春の野ゑ乱れてあそふ糸もありけり　須長　幸子　武藏

うちけふる柳の陰ゑほのめきて夕まくれまてあそふ糸かな　長沼　駒子　常陸

椿　玉椿えたゑたまらておちしかとなほ柴かきゑ花そかゝれる　竹屋　雅子　東京

うなゐ子か糸にぬきづゝ五つ六つつみ重ねたるたま椿かな　佐藤　衛子　同

折椿贈人　八千代までさかえん君かかさしゑと白玉椿たてまつるなり　小田さう子　信濃

梨　花　ちりはてし櫻の花ゑさきつきてかきの山梨はなさきゑけり　大塚楠緒子　東京

ささかぬ梅と櫻のなか垣ゑたくひもなしの花そゑゆへる　長沼　駒子　常陸

雨後梨花　春雨のはれし園生に露おひてたくひもなしの花さきにけり　大生　静子　東京

桃　花　手折きていさ紙雛にたむけまし垣根ゑゝほふひめ桃のはな　辻　豐子　同

なつかしみいて一枝と思ふかなゐみこほれたる姫桃のはな　横山　悅子　羽後

野　桃　くれなゐゑみ空も匂ふ心地してかすむ野末の桃さきゑけり　大塚楠緒子　東京

岡　桃　紅ゑ匂ふかすみを玄るへにて岡へのもゝを見いてつるかな　田中美喜子　伊勢

水邊桃　行水もうすくれなゐに匂ふかなみきいの桃の花さきしより　眞島　俊子　越後

荒庭桃　さく桃の花ものいゝとひてましあれたる宿の昔かたりを　金子　錠子　東京

三月三日　いつしかと雛あそひいちかつきぬまた姫桃の花さかぬまに　小倉多摩子　同

汐　干　うら〳〵と霞む干潟ゑおりたちて貝拾ふ子の數ぞ玄られぬ　辻　敎子　三河

曲水宴　石間ゆく桃のさかつきとり〳〵ゑうけてそあそふ雲の上人　富田　愛子　東京

川水ゑうかふ盃せきとめてとり〳〵あそふもゝの玄たかけ　豊田　照子　同

年ことのためしと今日はとり〳〵にくむかなかるゝ桃の盃　眞島　俊子　越後

春日鷹狩　はしたかの羽風ゑ花も雪とちる木の下さむしはるの御狩ゐ　早川千代子　三河

花

見る人よまたせ〳〵てさかぬ間の花の心の長くもあるかな　稅所　敦子　東京
あつさ弓はるの山へのさくら狩雲よわけいる心地こそすれ　大橋　時子　同
佐保姫の霞の袖やかをるらんはつ花さくらほころひにけり　岡田　煉子　同
きのふまてつぼみと思ひし櫻花けふい盛のすきてけるかな　野口　直子　同
人の世もかくありたけれ中々よ花は老木そさかりなりける　美濃部貞子　尾張
花ゆゑよ野にも山よもあくかれて春は心のひまなかりけり　戸塚　種子　駿河
ふく風をのとけき物と思ひしは花みぬ程のこゝろなりけり　北澤　雪子　信濃

待花

櫻花さくをまつとてけふも又いくたひ庭におりたちにけん　立花　榮子　東京
長閑なる春なりなからさくら花さくをまつまそ玄つ心なき　柴田八重子　伊豫
望山待花　打むかふ外山のさくらさきぬやと身を離れてもゆく心かな　間宮八十子　東京
對山待花　山の端の花まつ程はいつしかと心もそらになかめられつゝ　箱崎　綾子　伊豫
山家待花　うち霞む山さくら戸をあけ暮にまては雲さへ花と見えつゝ　片岡　君子　東京
羇中待花　吉野山ふもとの里に旅寐して花まつほとに日かすへにけり　喜村　信子　尾張

尋花

見んと思ふ心はかりを先立て花ならぬ雲を今日もわけつゝ　島田　繁子　東京
さきやらぬ花を見るとて春霞ふかき山路よまとひぬるかな　合原　琴子　同
花未開　梅いちり柳い眉をつくりしみいかてさくらの遲きなるらん　伊藤　琴子　同
さけいちるうさも添けり咲ぬまの花こそ花い樂しかりけれ　高畠　式部　西京
初花　花暦ひと日おくれてさきよけり昨日い色のみえしのみよて　原田時雨子　伊勢
指をりて盛をまちし庭さくら三つ四つ二つさきいてにけり　佐藤　潔子　東京
山花始開　いつしかとまちて日を經し足曳の遠山さくら花さきよけり　岡田　煉子　同
盛花　遠山の松のおかいを玄らくものおやふやはなの盛なるらん　西　升子　同
きのふ見し松の緑もうつもれて山路いなへて花の玄らくも　江木久美子　同
野よ山よさきみちよけり櫻花匂はぬかたいあらしとそ思ふ　平井久万子　同
來て見れい花より外の色もおしいつれより先咲そめぬらん　前野土佐子　伊勢
野に山にうかれ〳〵てさくら花めつる心もさかりなりけり　美濃部貞子　尾張
ふく風よちるい櫻のにほひよて蝶たよ見えぬ花さかりかな　根岸　直子　武藏

閑庭花盛　昨日けふさきのさかりの庭櫻ひとり見る事のあかすも有哉　黑田　光子　肥後

風靜花盛　長閑よもみそないすらん吹風もえたをならさぬはなの盛を　室町　清子　西京

見　花　櫻花みつゝしをれい春の日もさらよ長しとおほえさりけり　中村　慶子　東京

君か代の春よあたりて今日もまた思ふ事なく花を見るかな　高野武羅子　武藏

尋　見　花　かさし來る人を去るへよ我もまた匂ふ山路の花を見るかな　辻　靜子　三河

終日見花　さき匂ふ花を去るへに分いりて去らぬ山路よ暮しつるかな　喜村　信子　尾張

翫　花　長しとい誰かいひけんさくら花あかす見る日い短かりけり　平井早稻子　常陸

對　花　いたつらよちらすい惜き花也と思へとえこそ折れさりけれ　高崎　胤子　東京

憐　花　見る人のちらぬ心にさく花の習いゝいかようれしからまし　水澤　豐子　大坂

愛　花　暮ぬとも猶木の下になかめましわすしり難き花とし思へい　柳町きぬ子　常陸

每年愛花　はることにめつる心の深けれい花もとし〳〵咲まさるらん　大岡　操子　東京

老の波よるにつけても春毎にあれこし花のかげそたちうき　伴　多滿子　三河

折　花　いさ折て瓶よさゝましさくら花夜のまの風の誘ひもやせん　赤松　虎子　東京

折花贈人　言の葉の花の匂ひをそへてよとをーき枝をも折てけるかな　中村　慶子　同

櫻花あたよちらすも惜けれい君かためよとたをりつるかあ　富田　愛子　同

思　花　垂こめてふしゐあからも野よ山よ花をいかよと思遣るかな　橘　幸子　同

夜思花　春の夜の夢のうちよも見えにけりひねもすなれー花の面影　山田　稻子　同

はるの夜は花の事のみ思ひゐて暫しも安くねられさりけり　片倉　森子　下野

雨中思花　色やわせん花やちらんと思ふよもやよひの雨そ去つ心なき　美濃部貞子　尾張

花似雲　昨日けふ所さためし白雲いたかねのさくらさけるありけり　滋岡八千子　攝津

花似雪　松かえに枝さしかはしさく花を消殘る雪とおもひけるかな　宇津木繁子　東京

曉　花　ほの〳〵と去らむい花の色ならんわくる峯よりかをる春風　山田　稻子　同

曙　花　山の端の霞はれゆくわけほれゝ月によほへる花のいろかな　山口　直子　西京

朝　花　朝露のおきいてゝ見れは色も香もこほれんとする庭櫻かな　山田　稻子　東京

春雨のはれ一園生のいとさくら亂れぬほとの朝かせそふく　岡本　愛子　因幡

水くきの岡のやかたの櫻はなねての朝けに見いてつるかな　川合　瀧子　東京

夕花　夕月もおぼろなからにほの見えてよやひこやるゝ山櫻かな　牧野みの子　東京

鶯もねくらにいりてゆふ庭にのこるゝ花のひかりありけり　増山喜美子　同

あすも又來て見はやさんさく花の木陰よひゝく入相のかね　瀧井　清子　阿波

百鳥のねくらよかへる夕まくれなほくれのこる花の色かな　竹岡八重子　東京

夕月の影ゝかすめと色も香もおやろけならぬ花さくらかな　柳澤　清子　信濃

ゆふ風のふき殘したる玄ら雲ゝ外山の峯のさくらなりけり　菅原千代子　羽後

月前花　春の夜のならひと月ゝかすめともさやかよにやふ山櫻かな　澤野　厚子　東京

ともし火も春はそむけて朧夜の月と花とにむかはるゝかな　田邊　朝子　同

月影ゝやゝかたふきておはしまよ花の影こそ上り來よけれ　坂井和歌子　同

山の端の月をへたてぬ玄ら雲ゝ心よかゝるさくらなりけり　島　すけ子　出雲

春のよの月ゝ朧にかすめとも花のあたりゝさやけかりけり　兒島　靜子　伊豫

おやろ夜の月の光しなかりせゝ花もかくまて匂はさらまし　金戸八重子　下野

吹風に空ゝ晴れてもささつゝくさくらよくもる春のよの月　伊達　歌子　岩代

月前翫花　春の夜のおやろ月夜の影にこそはなの光ゝ見るへかりけれ　小倉　文子　東京

花下步月　おやろ夜の月も出よけり咲みてる花の下道ゆきかへるまに　土方　時子　加賀

花間朧月　立いてゝ見れゝさやけし櫻花木の間の月ゝおやろなれとも　曾我部佳枝　伊豫

ささそろふ花に光やゆつりけん匂へる月のかけくもるなり　吉岡　龍子　美濃

佐保姫の花のたもとに匂ふかあらぬかつかしき春のよの月　服部　欣子　尾張

風前花　さらぬたよあたある物を盛あるはなのこすゑよ春風そふく　富田　愛子　東京

吹ちらす嵐の庭のさくら花見つゝしをれゝ玄つこゝろなし　渡邊武良子　甲斐

霞中花　さくら花さかりなるらし遠山ゝうすくれあゐの霞たなひく　大塚楠緒子　東京

行先ゝ花よかすめりあと見れゝもと來し道も花くもりして　前野土佐子　伊勢

雨中花　花雨のふり來ぬれともさくら狩歸るゝをしき花のこのもと　高崎　胤子　東京

とふ蝶の羽袖もぬれて匂ふめり雨よかすめるはなの下かけ　舘　保子　羽後

雨後花　霄の雨を何いとひけん今朝見れゝのきはの櫻色まさりけり　西　升子　東京

よのまよや雨ゝふりけんけさ見れゝぬれつゝかをる庭櫻哉　新井　安子　横濱

名所花　ちる頃と色めくころとさく頃とみたひい見ぎしみ吉野の山　原田時雨子　伊勢
立こむる霞のおくゑ影みえてはなの香ふかしみよしの丶山　竹口　要子　東京
足拵のやへ山櫻さきぬらしせきのこなたゑにほふはるかせ　大橋　時子　同
去らひけの社は花ゑあけにけり牛島あたりくろくかすめと　美濃部貞子　尾張
咲にほふ志賀の山里みわたせい木ことにか丶る花の去ら雲　八太　光子　東京
山　花　月夜よし夜よしとめて丶吉野山おほ立さらぬ花のもとかな　田中　昌子　信濃
あらし山高嶺のさくら咲しより松の木のまゑ雲そか丶れる　中川　馨子　東京
山路花　柴人の袖た丶ならすゑほふめりかよふ山路の花さきしより　福岡　常子　越前
遠山花　うら〳〵とかすみわたれる遠山に雲と見ゆるや櫻なるらん　森　香子　肥前
嶺　花　都人くもとや見らんわか山のたかねのさくら花さきゑけり　川合　瀧子　東京
谷　花　谷ふかくつもれる雪も花ならん雲かと見しはさくら也けり　美濃部貞子　尾張
岡　花　陰去めて岡のやかたに見るやたれねての朝けのはなの盛を　有馬　俊子　東京
關　花　關守いたえし世なからさく花の人をと丶むるあふさかの山　南條　廣子　同
關路花　咲にほふ花のさかりゑあふ坂い戸さ丶ぬ關も越かてにして　小林鳥見子　武藏
ひらけゆく御代の光ゑ旅人もせき路やすけく花を見るかな　三輪　常子　東京
行路花　いそくへき事も忘れて道のへの花の木陰ゑくらしつるかな　中村　慶子　同
海邊花　ささゑけり磯山もとのさくら花貝ひろふ子の袖かをるまて　近藤　政子　同
咲ゑけりむこ山さくら白たへゑ和田の岬のなみと見るまて　伊藤　琴子　同
湖上花　庭ふかく櫻かをりて春風にさ丶なみよする鳥羽のみつうみ　增山深雪子　同
水邊花　さくらはな咲そめしより我門の小川も人のたちとまりけり　松岡　任子　同
隅田川つ丶みのさくらさきしより底ゑも見ゆる花さかり哉　渡邊武良子　甲斐
橋邊花　あつみたる雪のゆふへの面影を花に見せたるさの丶舟はし　西　升子　京東
東京花　さく花の影はかりかい角田川人のこ丶ろもうきたちゑけり　龜井八重子　同
社頭花　千早振神路の山のさくらはなやなきましりゑ花さきゑけり　辻　豐子　同
古寺花　もき木そと去年は見過し古寺のつひちのさくら花咲にけり　大野　定子　同
あかたなに殘れる花のひと枝ゑ人ありとしる峯のふるてら　增山喜美子　同

山家花　都人來ても見よかしさきつゝくれきはの山の花のさかりを　近藤　政子　東京
しる人もなき山かけの柴垣によゆへる花のあはれなるかな　高崎　胤子　同
柴の戸をふく朝風そかをるなる峯のさくらや咲そめぬらん　木原　貞子　尾張
さく花を去るへよなして都人たえすとひくる山の去たいや　柴田　梢子　遠江
田家見花　打かへす小田の細道ほそしとも思はて來けり花の木のもと　服部　賢子　加賀
閑居花　のかれすむわかかくれかの櫻花よそに後れすさき初にけり　大澤　厚子　東京
松間花　ほの〳〵と霞たなひく山松の木の間よにゆふ花さくらかな　澤野　民子　同
山松に去つれのこりし白雪と見ゆるいさけるさくら也けり　相原　梅子　神戸
かけふかき松もうもれて嵐山花こそはるのあるーなりけれ　豊原　絹子　西京
旅中花　宿かさぬ人のつらさをなさけにておほろ月夜の花の下ふし　大田垣蓮月　同
ちるまていこゝに宿らん旅衣たちさりかたき花のかけかな　矢島　頼子　備前
花下讀書　春風にかつちる花の一ひらをさなから文の去をりとをせん　峰須賀梅子　東京
花下忘歸　思ふとちあくこも去らす遊ふ哉去のふか岡の花の去たかけ　赤松　虎子　同
忘れゐし家路を月はてらせともあほさりかたき花のもと哉　渡邊武良子　甲斐
花下旅宿　さくらさく木陰を宿の旅まくら月にぬる夜も嬉しかりけり　丹治さき子　岩代
花下蝶飛　二つ三つ胡蝶とふなりなみたてる花の去たかけ我物よして　土方　時子　加賀
ちると見て木の下かけに立よれは花にまかへてとふ胡蝶哉　上田　初子　同
依花客來　櫻花ちりなん後はおもはえてとはるゝ今日そ嬉しかりける　大野　定子　東京
對花憶昔　もろともよなかめくらしゝ古の友なつかしき花のかけかな　田中　昌子　信濃
落花　をしと思ふ心はかりを殘しおきて梢あらいにちるさくら哉　近藤　政子　東京
きゝすなく片山里をすきくれいはろ〳〵とこそ花も散けれ　岡田　煉子　同
風もなくのとけき今日い櫻花何をかことよちらんとすらん　野口　直子　同
をしめともとまらぬ物と知なから櫻ちる夜い寐れさりけり　豊田　照子　同
春風のさそふまに〳〵はろ〳〵とそこはかとなくちる櫻哉　森田たゝ子　武藏
山風いはた寒からぬほとおかから花の去ら雪ふらぬ日そなき　和田　吉枝　伊勢
雲と見てとひ來し物をさくら花雪と見るまて散はてよけり　兒島　靜子　伊豫

夕落花　竹屋　雅子　東京
ほろ〳〵と花ちる春の夕暮ゝそこはかとなく物あはれよて
いつくより誘はれよけん小簾下す袖よかゝれる花の一ひら

月前落花　竹山　静子　同
春の夜の月いくもらてほろ〳〵と袖にちりくる花のゑら雪

雨中落花　竹口　要子　同
ほろ〳〵と櫻こゆるゝ春雨よゑつくもゑろし春のやまかせ

雨後落花　佐々木光子　同
雨はれしゐーたの原を來て見れゝゑつくよりけにちる櫻哉

落花似雪　島田　繁子　同
春雨のなこりの風よさそはれて袖よちりくる庭さくらかな

落花多　石渡　忍子　同
ふる雨よわはれ盛の色あせてさひしくちるかはなさくら花

山落花　野口　直子　同
時あらぬ雪を庭よも見つるかなさくらの梢ちりそめしより

行路落花　太田須賀子　同
をしめともはかあく風の誘ひけんはなゝ梢よ殘らさりけり

雨晴し木の下道をとめくれゝゑつくと共よちるさくらかな　芝山　益子　同

旅人の袖なつかしくかをるなりさくらちりゑくあふ坂の山　松本　龜子　肥後

きゝすなくかた山櫻ほろ〳〵と松をのこして花ちりよけり　南條　貞子　東京

いかよせんちりしく花を踏ゝをし踏すゝゆかん道もなき哉　木原　貞子　尾張

水邊落花　根岸保幾子　東京
春風にちりて流るゝさま見れゝ花もうき瀬ゝ遁れさりけり

墨田川長きつゝみよさきあから心みしかくちるさくらかな　原田時雨子　伊勢

河上落花　萩原　英子　薩摩
打よする浪と見るまて大井川きしのさくらにはる風そふく

閑庭落花　竹尾小笹子　三河
とくちるもことわりなれや櫻花人もとひこぬ庭のひと木ゝ

山家落花　馬場　信子　尾張
今よりゝ春の日いかに長からん我山さくらちりはてよけり

志賀山越　小池　道子　東京
ちる花の雪ふみわけてとめくれゝ夕風寒し志賀のやまこえ

茶摘　大橋　時子　同
賑しくうたひつれつゝ少女子か木のめつむらし宇治の山畑

蝶　海老原增子　同
手折こし花をゑたひてとふ蝶ゝ夢結ふまもあらしとそ思ふ

盛なる花より花よあつさひて羽袖かろけよまふてふかな　近藤　政子　同

関路落花　江木久美子　同
賤の男か苗代かきやかをるらんさくらちるなり小山田の關

ふく風をあこその關とうたひてし昔おゆえてちるさくら哉

山風はたかゆるしてか越つらん花のゆきちるあふさかの關

逢坂の關路をこゆる春風にちりくるゆきゝさくらありけり

とふ蝶のたはふれあそふかたとへい堇山ふき花さきにけり　平井久万子　東京
いかはかり樂しき夢や結ふらん花のこすゑに蝶のねふれる　中村　慶子　同
山吹のさける垣ねよふたつ三つおなし色なる蝶そあそへる　豐田　照子　同

若鮎

櫻川さくら流れてゆくをつに若鮎つる子のそてかをるなり　大橋　時子　同
よし野川うつろふ花のかけとめて櫻のえたよ遊ふあゆかな　豐田　照子　同
ふたつ三つ花ちりうきて玉椿なかるゝをつにかはつ鳴なり　大塚楠緒子　同

蛙

われのみと思へと水のほとりよも何をかこちて蛙なくらん　平井久万子　同
苗代よすたく蛙のこゑすなり今宵もあめのふらんとすらん　岡田　煉子　同
山吹のちりてなかるゝかは水に聲もよはひてかはつ鳴なり　近藤富志子　同

朝蛙

在明の月かけゑらむさはをつにおほこゑゑけくあく蛙かな　高崎　胤子　同
朝つく日かゝりて匂ふ小山田よはなちりうきて蛙なくなり　戸川小鹿子　岡山

夕蛙

ほろ〳〵と花もちりくる夕川に雨よふかはつ聲のさひしき　竹屋　雅子　東京
夕月の霞むかと田よみかくれてこゑものとかに蛙なくなり　南條　貞子　同

月前蛙

咲匂ふ花の香なから月かけのかすむ野川よかはつなくなり　西　升子　同

雨中蛙

ふる雨に苗代水やまさりけんこゑもあふれてかはつ鳴なり　万里小路富　同
ささみてる花よや雨のそゝくらん聲もよはひて蛙なくあり　跡見　桃子　同
ふる雨に聲をきそひてをやま田の苗代みつにかはつなく也　曾我部佳枝　伊豫

川蛙

霞む夜の月たにあるをさくらさく田川のすゑよ蛙なくなり　辻　敎子　三河
こあゆとふ吉野の川の早さ瀨よゆふへさひしくかはつ鳴也　八太　光子　東京

禁中蛙

細殿のしたゆくみつよあく蛙おほろ月夜のこゑかすむなり　竹屋　雅子　同

田蛙

おもふとちすみれつみよしあら小田は深田とありて蛙鳴也　西　升子　同
賤の男かなはしろいそく小山田よはや住なれてかはつ鳴也　辻　静子　三河

苗代

山吹のちりうく小田の苗代いこかねの種をまくこゝちして　大橋　時子　東京
ちりかゝる櫻山吹せきいれてないしろみつも香に匂ふなり　青野　常子　伊豫
ゆ種まく時きにけらし賤の男か苗代いそくをやま田のさと　吉田　房子　常陸
水ひきて賤ゝかへりし夕くれのなはゑろ小田よ小雨ふる也　田中喜千世　甲斐

菜花　うゐゐ子か魚つる棹やふれつらんすゝな流るゝさと川の水　南條　貞子　東京

春風よすゝ菜かつちる細道いわけゆく袖も香よにほひつゝ　金子　錠子　同

胡蝶おふうゐゐか袖もかをるめりすゝ菜花さく畑のなか道　朝山　元子　同

石のかみふるの山田よ來て見れい鈴菜すゝ〜ろ花咲よけり　辻　豊子　同

荒庭菜花　ふるさとの荒し垣根よきてみれい蒔かぬ鈴菜の花咲よけり　八太　光子　同

菫　春の日のくるゝも去らす野へに出て菫の花を摘てけるかな　有栖川菫子　同

あれはてし軒端なからも時くれい獨すみれの花さきよけり　近藤　政子　同

緑なる苔のころもよましりつゝおのれまかはぬつほ菫かな　平井久万子　同

荒果しみかきか原のつほすみれたかゆかりよか花い咲らん　岡田　煉子　同

原菫　きゝすなくやけ野の原の夕月夜つきもすみれの花咲よけり　中村　慶子　同

雲雀なく淺茅か原をきて見れいひとり菫のはなそよやへる　石渡　忍子　同

故郷菫　故郷のむかしの跡をたつぬれいわれもゆかりと菫さきたり　竹屋　雅子　同

子日せ去小松かもとよ團居してわかぬゆかりよ菫をそつむ　南條　貞子　同

哀このわれたる宿のまかきよも色はふりせぬつゆすみれ哉　馬場　信子　尾張

牡丹　くれゐゐの色深み草さきしより去らぬ人にもとはれける哉　野田　宮子　東京

杜若　去つのをのなはしろ垣の杜若へたてぬいろよ花さきよけり　北澤　重子　同

躑躅　夕つく日いりての後もにつゝしの花よ去はしは暮殘りけり　南條　貞子　同

くれなゐの夕日よいとゝ色はえて山下てらす岩つゝしかな　辻　豊子　同

樵路躑躅　柴人のかよふみ山の木かくれを照してさけるいはつゝし哉　橘　久子　同

去は人のかへる山路の岩躑躅夕くれゐゐの色に出よけり　近藤富志子　同

山吹　我宿の垣根よたちて少女子か折るそてにやふやまふきの花　石渡　忍子　同

立よりていさたをらまし春風よにほひこほるゝ山吹のはな　大橋　時子　同

山吹の花さきみちて此ころいなかはうもれぬ門のたなはし　相澤　扇子　同

やまふきの八重さき匂ふ小柴垣去はしとゝむる春の色かな　戸塚　種子　靜岡

露なから手折てみれは山吹のさきたる花はすくなかりけり　土持　竹子　薩摩

問へとたゝ答へぬ色の山吹をたかゆるしては手折たりけん　板倉　秀子　東京

雨中山吹　おのつから移ろふよりも哀なり雨に云をるゝやまふきの花　矢定　頼子　備前

川山吹　山吹の花さきしより駒とめてみる人おほし井手のたまかは　富田　愛子　東京

をしみてしさくら流るゝ山川のきしの山吹はなさきよけり　渡邊武良子　甲斐

ゆく春をせきとめかねておのれまつちるか川瀬の山吹の花　中島　歌子　東京

水邊山吹　とふ蝶のゆくへを見れはとなりなる池の山吹花さきにけり　大塚楠緒子　同

吉野川きよきなかれよ枝ひちて浪にゆらるゝ山ふきのはな　南條　貞子　同

池水にさかり見せつゝ咲花のちらぬもうかふ岸のやまふき　竹山　静子　同

底ふかく匂へる水は山吹のはなよりおつるつゆやそめけん　中原　瀧子　同

里山吹　思ふ事いはての里に咲よけりくちなしいろのやまふきの花　朝山　元子　同

閑居山吹　人とはてけふもくれけり我宿のかきの山吹さかりなれとも　松浦　琴子　尾張

樹陰山吹　おもふことありとも見えぬ山咲のなと木隠よ花はさくらん　板倉　秀子　東京

藤　いつしかと心のまつよかゝりつる藤の初花さきいてにけり　藤井・静子　同

松かえに匂ふ藤波いく年のはるをかけてかさきそめにけん　辻　静子　三河

月前藤　春の夜の月はひゝりのをかーきよ梢の藤のはなの香そする　大原　竹子　薩摩

川藤　大井川岸のふち波たちかへり見れともあゝぬ花のいろかな　常磐井鈴子　土佐

池藤　池水のそとりの色もわゝぬまてさきかゝりたる藤なみの花　大橋　時子　東京

昨日けふ咲そめーよりいけ水も色に出よけりふち浪のはな　眞島　俊子　越後

社頭藤　村雨の朝きよゆせーひろ前よぬれてちりたる藤なみのはな　小池　道子　東京

松上藤　老松の枝をよすかよ咲にけりわかむらさきのふちなみの花　和田　繁子　高知

松間藤　色かへぬ松を云たひて藤の花千年までもとかゝりそめけん　太田すか子　東京

惜春　花もまた殘るこすゑいさる物をさそひゝにも春の行らん　鈴木　丸子　岩城

暮春　花よわか放ちやりつる心のみ身よかへり來ていぬる春かな　野村望東子　筑前

さき殘る花の梢をまもるまにいつーか春いくれにけるかな　岡田　煉子　東京

年ことにくる春なれと行春ををーまぬ人いあらしとそ思ふ　辻　豊子　同

野も山も花のさかりい過ぬれと猶をしまるゝ春のくれかな　辻　静子　三河

さくら花をーむ心もつきはてゝいりあひの鐘よ春そ暮ゆく　青野　常子　伊豫

暮春風　花いちり霞いきえぬかくしつゝ春をも風のさそふなりけり　小島　德子　上野
暮春雨　佐保姫のかすみの袖やぬをるらんけふを限のはるさめの空　横山　悅子　羽後
暮春川　吉野川とまらぬ春いちりうかふ花のいかたやのせて行らん　西　升子　東京
暮春海　わたの原波路はるかゝゆく舟も春のとまりいぬらぬなる覽　高倉　壽子　同
　　霞さへたちもとまらてうな原のあとなき浪ゝ春そくれゆく　戸塚　種子　靜岡
暮春花　をしめともとまらぬ春の行方をは咲遲れたる花ゝとはゝや　片山　孝子　伊豫
暮春藤　ゆく春の形見ゝとてや殘りけん青葉ましりのふちなみの花　關　玉子　東京
暮春鶯　ちりのこる花はこすゑゝきこゆなり春ををしめる鶯のこゑ　眞島　俊子　越後
　　ちる花をなきてとゝむる鶯のこゑもかひなくくるゝ春かな　池淵　政子　美作
　　くれてゆく春を惜むゝ若葉さすはなの梢ゝうくひすのなく　和田山枝子　尾張
春天　佐保姫のかすみの衣うら〳〵といともものとけき春の空かな　江木久美子　東京
春朝　夜は今かあけはなるらん山鳥のをのへの櫻ぬらみそめけり　芝山　益子　同
春夕　窓ちかく植しさくらの梢のみかすゑて殘るはるのゆふくれ　足利世根子　函館

春夜　梅薫るおぼろ月夜の影ふめいそゝろゝ物のゆかしかりけり　竹屋　雅子　東京
　　思ふとちそゝろありきの袖のうへゝ宿るか霞む朧夜のつき　根岸ぬみ子　武藏
　　おもしろきはるの夜半かなさくら花月の光に匂ひわひつゝ　松野千歳子　岩城
　　梅の花それとも見えすかすむ夜い月の影のみ薫るなりけり　眞部　房子　伊豫
春風　ほの〳〵と嶺ゝたなひくうす霞みるめのとかゝ春風そふく　牧野八重子　東京
　　はるさめの名殘つゆけき袖垣に梅か香もれて風かをるなり　北澤　雪子　信濃
　　こと木にいふくとも見えぬ春風も花ゝい荒き心地こそすれ　加藤　俊子　同
　　春風はまたさえぬれと梅か香をはこふ便はうれしかりけり　相澤　扇子　東京
　　花のうへゝ眠れる蝶の羽袖にもさはらぬほとの春風そふく　伊藤津世子　土佐
春水　雪とくる春の野澤のひとすちは水上知らぬなかれなりけり　横澤　寮子　仙臺
春鳥　常にきく雀のこゑも何となく春のあしたはのとけかりけり　杉　里子　東京
春花　青柳のいと長き日を繰かへし見れともあかすをたまきの花　朝山　元子　同
　　少女子がかさみの袖に匂ふ也ひさしのもとの小てまりの花　大野　定子　同

春　山　松かけに夜をは殘して嵐山はなのこすゑそまつゑらみける　吉松みせ子　西京
春　岡　きゝす鳴岡のやかたよきて見れは日かけも霞む松のむら立　金子　錠子　東京
春水郷　春風にこほりなかれてあゆはしる波間もかすむ玉河のさと　増山喜美子　同
　春雨よけふる柳のみどりよりはるかよかすむ川そひのさと　木本千代子　函館
春海邊　いそ山の松にさくらをこきませて錦か浦はよしきなりけり　辻　多豆子　三河
　ゆく船もかすみの底にかくろひて波しつかなる春の海つら　矢野　高子　伊豫
　海士の子のちりみたれつゝ櫻貝ひろふ干潟にはる風そふく　川村　春子　常陸
春　船　わたの原波路はるかよ霞む也海士のつり舟いつこくらん　竹山　靜子　東京
春池浪靜　春風はゆるくわたりて青柳のかけもみたれぬ池のおもかな　大橋　時子　同
春山家　山さとは梅さへさきぬさ蕨を折よく今日はたつねきみけり　島田　繁子　同
　梅かをる霞のおくをたつねきてみ山のさとの春を知るかな　朝山　豊子　同
　山住も春はいとこそ嬉しけれわしたゆふへに花をなかめて　青野　正子　伊豫
春E郊行　梅かをる山そひ道をとめくれはよしありけなる家も有けり　竹屋　雅子　東京
春人事　山賤の心も春ゝみやびつゝさくらかさゝぬ日ゝなかりけり　三浦　作子　前橋
春　夢　咲よほふ花よあそふと見しゆめのさめぬる庭よとふこ蝶哉　富田　愛子　東京
春眺望　さきつゝくす〻榮の末ゝ霞よて里こそ見えねをちの山もと　稅所　敦子　同
春　興　おもふとちあかぬゝ春の心かな野ゆき山ゆき花よあそへと　箱崎　綾子　伊豫
春　別　青柳の烟のおくよなりよけり今わかれよしひとのすかたの　杉　里子　東京
　心なくたちかくしたる霞かなわかれし人のあとをへたてゝ　海老原増子　同
春　旅　うしとのみ思ひし旅も花見つゝこゆる山路ゝ樂しかりけり　江木久美子　同
　袖たもと梅のよほひよなりぬらん月の瀨山をたとるたひ人　平井久萬子　同
　ふるさとよいそきて歸る鴈かねゝ旅路の友の心地こそすれ　嶋田　繁子　同
　朝またき霞とともよたちいてゝ雲雀の床よやとをかるかな　富田　愛子　同
　あらし山高ねゝ雪とふりしきぬ吉野の雲をいさやわけてん　佐々木光子　同
　暑からすはた寒からぬ春へこそ旅路ゝ殊にをかしかりけれ　朝山　元子　同
　ゆさくれし木の下陰ゝくさまくら結ふ夢さへ香よ匂ひつゝ　兒嶋　靜子　伊豫

嵐山より　ひむかしの都を昨日たちいでゝ今日いわらしの山の花かけ　竹屋　雅子　東京
舞子より　松はかり霞のうちゆたてりけりまひこの濱の春のゆふくれ　竹屋　繁子　同
宇治より　神路山たかねのかすみ立そめてみもすそ川い春めきゆけり　原田　節枝　伊勢
二見より　いつゝあれといつくゝあれと玉くしけふたみの浦の春の曙　原田　豊枝　同
杉田より　いくはくの人の袂ゆかをるらんすき田のさとのうめの追風　西　升子　東京
金澤より　いゆしへの文庫の跡も見えわかすかすみこめたり金澤の里　西　民子　同
鎌倉より　そのかみの有様もなくあれにけり霞む麥生に雲雀こゑして　大橋　松子　同
箱根より　いて湯さへあみおこたりて箱根山高根に匂ふ花を見るかな　大橋　時子　同
玉川より　玉河の清きなかれにうかへとも猶月かけいおはろなりけり　中村　慶子　同
嚴嶋より　よる浪のおとはかりして嚴嶋宮居もわかぬはるかすみかな　富田　愛子　同
氷川より　菫つむ子らもこの頃かけたえて氷川のやしろ春ふけゆけり　根岸惠美子　武藏
江嶋より　浦つたひ貝ひろひつゝあそふ間ゆ霞ゆくるゝこしこえの里　朝山　元子　東京
大磯より　こよろきの磯菜つむ子の影もなしかすむ浪間ゆ鷗こゑして　佐々木光子　同

婦女詞藻第一回寄稿受賞者

天　無　常（文章）　鹿兒島　土持綱子
地　二　月（今樣）　尾張　美濃部貞子
人　水邊落花（短歌）　伊勢　原田時雨子
秀逸　歸雁（文章）　東京　安野雪子
同　野遊（文章）　伊勢　磯部房子
同　年の始人の許ゆ（消息）　仙臺　伊藤婦美子
同　鎌倉にて（今樣）　相摸　伊藤銓子
同　春海邊（短歌）　三河　辻多豆子
同　春曙（短歌）　西京　橋本芳野
同　名所早春（短歌）　靜岡　野中芳子

婦女詞藻第二回懸賞課題

和歌　夏季の内隨意

今様　夏季及雜題隨意

和文　をさなき時　夢　源氏物語をよみて　哀なりし事　清少納言

消息　暑中人のもとに　海水浴に誘ふ文

●詠草ハ半紙又ハ美濃紙とち本よよみやすく記してよ

●投稿期限ハ六月三十日迄とす

●投稿者ハ婦女ゟ限るものとす

●投稿者の内優等なるには文學全書歌學全書其他の賞品を贈るべし

●投稿所ハ本館編輯局又ハ神田小川町一番地佐々木氏とす

●投稿の封筒の表ゟハ婦女詞藻投稿と記してよ

明治廿四年五月

博文館

婦女詞藻附錄

心つくし　稅所敦子
松島記行　西升子
金絲鳥　竹屋雅子
うたゝね　岡田煉子
昔を今ゟ　朝山元子
寫真　渡邊村子
庚子道の記　武女
伊香保記行　弓屋倭文子

心つくし

稅所敦子

年月の移りゆくまゝに、有し事ども思ひ出れば、嬉しき悲しき、さま〳〵のふし多かれど、さしあたりたる其きはばかりにハ覺えぬこそ、いとゝふかひなきわざなりけれ。こたびはたゞみじう悲しき事ども、取集め見盡したれど、幼きものゝ、物の心ゑるやうゑなりあん頃ハ、物忘れがちゑ、あとはかなき心にてハ、づいでのまゝゑ、語りきかすべき事ども覺束なう、かつハかげろふの夕べをまたぬ世のあらひゑて、もし其程を待つけざらましかば、いかゑりし事とだゑゑらざらんが、罪ふかゝりぬべければ、言の葉のつゞきもゑらずゑがら、思ひ出るまゝゑ、ゑるしおくなりけり。年頃頼みし人の、去年の二月はじめつかたより、いさゝか心地惱ましうて、世の常のゑはぶきのやうゑハあらざりけれど、かぎりの旅とやハ思ひかけたりし。其程の事書つゞけんハ、いと胸いたう忍びかたけれど、

くはしうもえ去るさでなん。まいて今はと見はてつるほどのこゝち、何にかいたぐふべき。同じ道にと思ひなげゝど、心よかなふわざよーもあらねば、やう〳〵をさめなんとするに、髪ばかりをそぎて、そへきこゆるもいとあかずあさましうて、

黒髪ようきみをかふる物ならば後の世までも後れざらまし

神佛よも、今ひとたびおこたらせ給へと、祈りたてまつりしも、其かひなくなりぬれと、さりとも後の世ゝ捨させ給はじと、猶頼みたてまつりて、

限ある命を今ゝいかにせんみちびきたまへのちの世のやみ

心のやみよくれまどひて、夜晝のさかひも去らねと、一七日ばかりよもなりぬるよ、かういとさびーきところよ、女ばかりゝいかで堪へてあらん。ながめなどふるをりゝ、鴨川の水溢れ出ていとあやふかなるよとて、錦小路の御舘に移るべきよしのたまはせたり。いと忝なき物から、年頃ともよ起臥なれて、名殘おほかるこゝちするを、せめて後のわざをだにこゝよてせまほしう思ひつとも、なく〳〵物などゝり去たゝむるも、手よりおつるやうなれど、またゆづり聞ゆべき人もなきよ、ほむぐやうの物の、おちゝらんもうしろめたければ、よそめよいさかしだち心強げよ。も見えぬらんかし。常によりゐー眞木の柱の、いづこよりも打まもられて、紫の物語なるといやうかはりたれど、

いつかまた袖打ふれんおもかげの立もはなれぬ眞木の柱に

今はとて立出るにもいとゝいみじう、あはた山ゝ、昔の宿近かりし所とて、朝夕ながめられつるを、今ゝよそよだに又見ざらんが、あはれに心細かりぬべきなど思ふよ、いとゞかへりみのみせられて、

うき雲のあはたの山をよそよ見て漂ひゆかん果をこそ思へ

こゝもいとせまうゝあらず。人近く頼もしげなるよつけても、あはれありしよながら移り來て住みたらましかばと、いとゞかきくらされていみじきよ、夜中ばかりよやあらん。郭公のほのかに鳴たるを、

市中よいでゝなくなる郭公おなじたぐひもある世なりけり

おのれも春の末つかたより、をり〳〵こゝちの惱ましう覺えけるを、心のいとまなき程なれば、物とも思はで過しつるを、月日重るまゝよ、腹のやゝふくらかになりぬ。人いみなかゝるをりよしもあやよくになど、いとはしげにいひわつかへど、心ひとつよい、せめて嬉しき事よもあるかな。忘れがたみに、ひとりばかりを見あつかはんが、いとさう〳〵しかるべきに、こたびい男兒などよてもあらば、こよなう悲しさも慰みぬべくなど、心細き中よも、此事をのみ頼みよあかしくらすほど、いつしか夏も過ぎぬ。世の中すこし涼しうなりぬれば、なき人のため、又みづからの祈もせまほしうて、都ちかくおはします觀世音をかみ奉らんと思ひたちて、北野のわたり、東山など、三日五日がほどよ、やう〳〵なかばゞかりぞ。めぐりたりし。その歸るさ、かのよしごりのふる里よ、あからさまよ立よりたりしかば、去ばしが程よ、いみじうあれて、其所とも覺えず。打見るよりまづ涙とゞまらでなん。いとかうしも荒果つべき事かはと思ふよかたへい過し頃の、大水のわざなりけり。眞砂の上も池の面も、ひとつ草の原となりはてたるよ、虫の音かごとがましう、さすがよもとあらの小萩い、今をさかりとさき亂れ、一村薄の心よまかせたるを見るよも、手なれの駒のあらましかばと、いとゞ昔の秋思ひいでらる。常よ居たりし方を見入れたれば、疊なども皆とり拂ひたるよ、半落ちたる壁の面に、何くれとはりおきたる反古どもばかりい、ありしながらの筆のあと、只今かきたらんよもかいるまじきを見る心地、まことかきくらすやうにてあさましし。

水莖の跡い流れずあすか川かいりはてたるすみかなれども

こゝのまへはた、まして秋の野らとなりいてゝ、露のみ所えがほなるよ、そのかみかりそめよ、ゆひおきたりし籬の朝顔い、今しもいみじうひろごりて、一時のさかえ思ひやらるゝよ、人をも花はと獨ごたれてなん。

もろともゝ起いでゝ見し朝顔の籬にいまもかゝらざりけり

暮なんとするゝ驚かされて、心あわたゞしう、たちかへり來る道すがら

さらでしもかわかぬ袖ゝ古里の淺茅が露をかけてけるかな

去ぞくなる人の、春のころ、薩摩より上り來て、錦のみたちゝありけるが

いみじかりしをりも、同じ心ゝみあつかひなどせられしかば、いと親し

う打語ふ中とゝいわらねど、何くれのふしゝに、必賴みきこえつるを、長

月ばかり、國ゝくだりなんとせらるゝが、いと心細けれど、いかゞにせん。

その便ゝ、なき人の調度ども、彼處ゝ送りつかはすとて、鎧、太刀など運び

わたすゝ、かの手馴したりし弓をとりたれば、いみじう塵つもりて、經ゝ

ける月日思ひしらるゝ、

君おくて、ひかぬゆづるの末遂ゝゆるぶ心をならはずもがな

この下りゆく人ゝ、

今い世ゝたのむ蔭なくなりゝけり紅葉にちりぬ君に歸りぬ

といひやりて、いよ〳〵物さびしうながめくらす程ゝ、冬にもなりぬ。神無月廿七日といふ明がたより、心地の惱ましう覺えければ、月頃にもなりけるを、もしさゝもやと思ひて、さるべき人々よびとりなど、心まうけどもする物から、いみじう心細う、此月頃の物おもひ、世の常ゝしもあらぬを、今までいたへてながらへ來つれど、こたびや世をわかるべきとてなるらんかと思ふも、何のをしかるべき身ゝしもあらねど、夫の古里にをさなきをゐて下らんまで、今去ばしながらへまほしきぞ、猶罪深き心なるや。人々も、今日いすぎじなどいひあつかひしかど、事なくてくれぬ。あくる日の晝つ方より、いよ〳〵苦しさまさりければ、皆騷ぎたちて、藥をば更にもいはず、何くれの尊き物ども呑ませなどすれど、いさゝか驗も見えず。暮方にもなりぬれば、又もつかれはてゝ、今は限にこそあらめと思ふうちにも、すこし物おぼゆるひまありて、をさなきはと問へば、隣になんおはするといふに、たちかへりわがありさまを見ては、いかに泣

きまとはん、かうながら空しうもならば、母はとたづねんがあはれに悲しかるべきなど、これひとつのみ、苦しきこゝちにも忘るゝひまなし。梅宮い、かゝる時にも祈り奉るに、必ゑるしありとかや、ほのきゝたる事も思ひいでゝ、俄に人まうでさするも、はかゞしうあつかひ物する人もなければ、みづからの心ひとつよてなん。夜中ばかりよや。からうじて生れたれば、すこしいき出たるやうなれど、更よ現とも覺えず。十日ばかりい、枕もあがらで疲れふしぬ。男兒よてさへありつれど、いとゝみよなくなりよけり。いつしかとまちわたれりし事の、かひなくなりぬと思ふも、いとゝいみじけれど、この程いみづからも、ながらふべきこゝろよもあらねば、なか〳〵夢の現よてぞ過してし。心地のなのめよありゆくまゝよい、をしうも悲しうも、思ひいでぬときのまなけれど、何のかひあるべきよもあらでなん。

今いとてはすべきふしよ藤衣かさねて袖をしぼりつるかな

こを思ふ道なかりせば死手の山ゆくも歸るも惑はざらまし

霜月なかば頃よもなりぬれば、すこしづゝい、おきゐなどもするやうになりにたれど、猶たのもしげなきに、折もこそあれ、幼き者の、疱瘡（もがさ）をやみつきぬ。いみじうほとぼり惱みて、顔、手、足あどよ、よつ五つばかりいできたるを見るより、胸ふたがりつゝ、もしこれをさへ空しうなさば、何ごとも限よこそあれ。深き谷をも求め出てん、いゝはの中よや尋ねいらましなど思ひさわぐも、われながらあさましき心の闇なりかし。日をふるまゝよ、いみじうかさなり出て、其人とも見えず。夜もいさゝか睡る事だになくて、泣きいさちたるも、親の心よてい、理よ悲しければ、苦しきを念じて、かき抱きつゝおきゐるよつけても、あゝれわがをさかりし時も、常よ病がちなりしとかきゝつるを、いかよ心を惱ましめ給ひにけんと、今更よ思ひしらる。師走ついたちばかりにい、辛うじて怠りざまよなりもてゆき、疱瘡の神おくりなどせし折こそ、すこし胸のひまあきておはえ

しか。

撫子の花のひとつものこらずばつゆの命をなにゝかけまし

ある人のもとより、此程の事ども、懇よ消息しとぶらひて、むかしの人々物し給いゞ、苦しき中にも、心づよくおぼしとる方も、ありぬべきをなど、いとこまやかよて、

言の葉よ摘出づべくもあかりけりちゝの思ひの思ひ遣れて

世のうさを思ひのぶめて竹の子の節立のぼる末を待たなん

とありけるかへりごとよ、

垂乳根の親のいまさで嬉しきいこの苦しさを見せぬ也けり

子を思ふ一節ゆゑになよ竹のよゝの雪をもしのぎつるかあ

其なごり、打はへ腦ましう、たれこめてのみあかしくらす程、こゝろ細く悲しき事いゝん方あし。過る月日もしらぬまよ、やう〳〵年もくれ方になりにけり。み舘のうちよも、春のまうけどもすとて、心あわたゞしげなれど、我世の外にのみきゝなされて、臥ながら、つく〴〵と、昔の事ども思ひつゞく。

我背子が春のよそひをたちぬひし昔こひしき年のくれかな

われながらよわり果ぬる心かあ身につむ年の惜からぬまで

からうのみやみふしたれば、いさゝか、春をむかふるいとなみをだに思ひまうけぬに、外より來る人の、門松いたて給はずやなどいひあつかへど、いかでかゝ、墓などへも久しう詣でずて、木の葉の積りたらんさまなど思ひやらるゝに、わが門にしも春めかしく、去かいとなむべきと思ひて、

我門よ松やいたてん奥つきの去きみをだにもかへぬ身にして

枕近う、なやらふ聲どもきこゆれば、去かすがよ今霄よとぢまりぬるも心細く覺ゆれば、

數々のうきを見はてし年なれどさすがよ今日い惜くも有哉

春の光を見るよつけても、思ひ出る事さま〴〵なれど、あたらしき年の

はじめとて、さすがにこと忌するも、我ながら猶あやしき心なりや。古里の母君のもとに、春のことぶきぞもきこえまゐらすとて。

唐衣きみにあふべき春なればたちそむるより樂しかりけり

あぢかきすさぶ物から、猶むかしのこと、つゆ忘られず。こよなうかはりよける世のありさまをも、たれよかい語りきこえんなど、つく〳〵と打ながめて、

去きたへの枕よつもる塵をだよはちいで春を迎へつるかな

にしごりの里にても、梅も軒近うほゝゑみそめ、雪のうちより、のぞけき聲もまちいでしを、む月二十日あまりよもありぬれど、たえて初音だにきこえざりければ。

さもこそわが世の外の春ならめ鶯さへもおとづれぬかな

軒の垂氷のとけゆくまゝよ、すこしはしつかたまで、ゐざりいでたれば、垣ごしに見ゆる柳の、やゝ綠よありたるよ、鴨川のほとり思ひ出られて、

わがせこが昔むすびしかも川のきしの柳はいまかもゆらん

世の中すこしあたゝかになりゆき、こゝちもやう〳〵おこたりざまになりぬれば、髮のいみじう結ぼゝれたるが、いといぶせきに、ふしぞながら梳りゐたるをりしも、れいならぬ人の音なひするに、驚きて打見やりたれば、年頃よそにても、むつましう語ひきこゆる尼君の、とぶらひ物し給へるなりけり。まづ涙さきだちて、ふと物もいひいでぬ程に、いとどうきこえ給へりし。

見るまゝに拂ひもあへず黑髮のすゑのそぎめにあまる涙を

とかう思ひめぐらすべき程もあらでなん。

一すぢに拂ひ捨たるくろかみのつひにみだれぬ心ともがな

月頃心ひとつに、思ひあまりぬることゞもゝ、また誰にかはとて、何やかやとかたりつゞくるに、かひありてあへしらひつゝ、さすがに長閑にもあらで、歸り給へるなこり、いとさう〳〵しう、打ながめられて、

きのふこそ振分髪はあげてしかはらふ斗よいつゐりよけん
と獨ごちぬ。やう〳〵下る程近うなりゆくまゝよ、思ひつゞくることさ
まゞ〳〵よて、春の夜ながら寐覺がちなるに、曉がたほのかに雁がねのき
こえたる、いみしうあわれ也。

故郷にかへる雁すらなく物を去らぬ旅路よいかにまどいん
かう定まりたる旅ながら、去ぞくやうの人い、去ひても思ひ止るべきや、
うを、とさまかうさまいさめらるゝに、いらへきこえんかたもなうて、

山櫃のみ一つならばとよかくに落とまりてもあらまし物を
はかなくて二月もすぎぬ。都の春よあひ見ん事も、今はいとかたかるべ
きを、花見よい必と、語らひたりし人の、其頃しも旅に物してあらざりけ
れば、すべなうて、思ひ絶て有つるに、朔日ばかりにや、嵐山よいざといふ
人のありければ、やがて打つれて物しつ。おか〳〵あるほだしよて、何し
よまうで來つらんとまでぞ覺えし。いとといはけなかりしより、いみじう心
に去みて覺えつる地の様なるを、まして今年はかりこそと思ふ心地、何
のあわれにかい似む。花さへ今をさかりよて、いいんかたなきけしきな
るよ、うちいづべき言の葉も覺えねばたゝ、

嵐山とし〳〵花はさくらめどいつの春をかわれいちぎらん

と心のうちよのみ、思ひつゞけてやみぬ。かの旅なる人を思ひ出て、

契りおきし人こそ見えねあらし山花の心はかいらざりけり

この程までい、まだ何事も不定なりつるが、卯月十日ばかりに、都をいで
たつべきよさだめられぬれば、よろづに心あわたゝしうておん。

（以下次卷）

松島記行

西升子

みちのくいむかしより名所おはしと聞けバ、いかでゆかまはしと思ひわたりしよ、せの君もおなし心におもひたゝれ、官よいとまをこひ奉りて、明治の二十二年四月廿二日、てけ曇りたれど、六時四十分の汽車にてものせんと、つねよりもはやう起出ていでたつ。上野の停車場にいたれバ、はやいでぬとて人々らうがいし。おのれらも心のおちゐねバ、いこひもやらで、十あまりつらなれる車のそが中の一つようちのれバ、ほどもなくふる鈴の音とともには去りにはしり出ぬ。はや飛鳥山なりとあふき見れバ、昨日の花はいつしかもねよかへりけん、あとをもとゞめず。されどこゝかしこよは、八重櫻のさける、いとあいれと打みやるよ、やがて戸田川の橋よきたりぬ。

此たびいあやうげもなくわたる哉車のまゝにとだのかは橋

こゝ若かりしころ、越後の糸魚川にものせし折い舟よてわたりければかくよめるなり。大宮、蓮田、久喜、栗橋、古河、小山、石橋をすぐれバ宇津宮なり。こゝよて志ばしいこふ。人々のおるゝよおのれらもおりたれバ、おなじ車よものせし人々い、わりごとうでゝものすれバ、ともにとうでゝせの君よまゐらせぬ。かくて長久保、矢板をすぎ、すこしのトンネルあり。こゝをうちすぐれバ、いとひろやかゝる原なり。かねて聞てし奈須野とゝるしたり。四人ばと思ふほどゝおく、車のひゞきとまりぬるに、奈須野と志るしたり。四人ばかりおるゝ人あり、のるもありて又いでぬ。黒磯、豊原、此あたりい松の木立のいろ〳〵よ生たるが山々よ見えて、ふもとのあたりよ、梅の花咲のこり、櫻もほころびそめ、こぶしの花も盛なるがなつかしくて、

けぶりたつ車の中の悔しきい野山をよそに見なすゐりけり

十二時三十分といふよ、白川よつきぬ。

山をこえ坂をこえつゝ志ら川のうまや路近く今いきよけり

矢吹、須加河、郡山、本宮、二本松、松川などをすぎ、福島の停車場につきぬ。三時四十分なり。こゝよりおりて、車にものして、松葉館といふよやどりぬ。此樓のもとよ、あふくま川清くながれ、むかひの山の松のむら〳〵たてるたゝずまひ、又軒端の梅の今をさかりとさけるけしき、繪にかくも筆もおよばじとぞ見やらるゝ。

さくら花ちりにし木蔭けさすぎて梅さく里にやどりけるかな

夕けたうべしころより雨ふり出たり。廿三日空くもれり。六時三十分の滊車にものしていでぬ。むかひの山々より白雲のたつとみるほどに、雨ふりいづ。いとわびし。

かへりみる都のそらのゆかしきよ雲たちおほひ春さめのふる

桑折をすぐるころより、車のゆるぎ昨日にい似ず多くて、こゝち常ならず。九時十分よ白石よつきぬ。今朝仙臺をいでたる車のものするをまつ程に、けぶりたてゝきぬるよ出あふ。わがのりしいたゞちに出ぬ。大河原

増田をすぐれば、仙臺の停車場あり。十時三十分よつきたり。永見の夫妻子どもゝ皆來たり。いざこれよといふまよ〳〵車にものして、東五番町ある東國亭といふにつきぬ。永見の人々にも、七年あまりよてあふよ嬉しくて、詞も出ずなりぬ。ゑばしいこひてひるけたうべ、老たる人の上いかよおはすらむと、永見にゆきてたいめしたり。今年い八十五になりぬときけど、いとつやゝくすこやかあり。さまゝの物語にときのうつりて、五時すぐる頃宿よ歸り、湯あみして夕けたうべぬ。

たび衣つゆのひるまのほどもなくけふ宮城野のくさ枕かなかう口ずさみつゝふしぬ。廿四日天氣よし。鹽竈にものせんとて、永見をうながしいそぎ瀛車よのる。岩切をすぎて、七時十五分よ鹽がまの浦よつきぬ。齋藤といふ家にいこひて、舟よそひせさせ、やがて出ぬ。見わたすかぎり島々いと多し。その一つ二つをいはんに、辨天島、雛が島、烏帽子島鹽干島などかずおほければ、ゑるすよいとまなくて、かへりみすれば出よしかたいはるかよすぎにたり。

はる霞たなびきよけり浦の名のちかの汐かま遠ざかるまで

八時廿五分松島よつきて、都川といふ樓よのぼる。こゝのあるじもと東京の人の、よしありて仙臺よさすらへて、近頃ものせしなれば、ひろやかといふにいあらねど、すべて清らかなれば、こゝよしばしいこひて、うちつれだちていづ。まづ汀に近き所よ小島二つあり。又すかし橋といふ二つあり。一つい長さ二間ばかり、一つは三間ばかりなり。幅い四尺ばかりあれど、みな梯子の如く、間をすかしたる故に、人の手よすがり、からうじてわたりたり。こゝに五大堂といふあり。こい大同二年、坂上田村麿東夷征伐よ下られし折、たてられたりとぞ。いと物ふりたり。こゝより瑞岩寺よまうづ。眞中よ古銅の觀音本尊のたち給ふ。後のかたの戸びらをかきもてあぐれば、正宗卿よろひかぶとをよそひて、あぐらよこしうちかけ給ふが、いけるが如くみえたり。それより奥の間、上段の間、鷹の間、欄の間

なとみな名たくるたゝみのものせしにて、慶長のころたちしまゝなる彫ものとぞ。玄關の左右よ梅の大木あり。こゝ正宗朝臣、朝鮮にものせられしをり、持かへり、植させ給へるなりとぞ。花ゝ八重にして、一つゝ紅一つは白なり。よほひも殊よすぐれたり。

今もなほ昔のはるを去のべとやよをふる寺よ梅のさくらむ

月見崎といふところよ、觀瀾亭といふ樓あり。豊臣太閤より、伏見御殿をたまひたるを、正宗朝臣こゝよたて給ふとぞ。去ばしいこひて、もとのやどりよかへり、ひるけたうべて舟よのりぬ。

いつかまたきてみむ事をまつ島やよろひの島ゝ立離るとも

二時三十分、去はがまの浦よつきぬ。三時よいづる汽車にものしてゝ、こゝの浦々を見ることといできがたければ、車よのりて、まづ塩釜の社よまうでぬ。いとちひさきほこら一つたてり。前よ鐵の釜四つあり。是なんこゝの浦に名たゝるものなりときけど、あれはてゝ見るものなければ立いでゝ六七町もきよけるよ、すこゝ高き小山をのぼれば、塩竈の御社なり。先にみし釜社よゝ似ず、いと貴とけよみえたり。此廣前よまがねつくりの燈籠右左にあり。右の方ゝ泉三郎の奉りたるものなり。左のかたゝ後の人のものせしなりとぞ。車ひくをの子どもまだ此さきよは、野田の玉川ありといふよ、たのしく思ひゐしよ、やがてこゝこそといふよ、車よりおりてみれゝ、水も通はず。いかよと問へゝ、これとのみいひて、外よいふ事もなし。みめぐらすに、石ぶみたちたり。よりてみれば、夕されば去は風こして道の奥のとふるき歌一首と、玉川よ田歌ながるゝ五月かなとあり。いよゝへゝいかよととふ人もなくて過ぬ。十町ばかりきし道のかたはらよ、つぼの石ぶみと去るゝあり。又立よりてみれば、多賀城の碑なりけり。五時すぐる頃岩切の停車場につきぬ。今より二時間ばかりならでゝ出ずといふに、さらば此車よのりてゆかむといへば、是よりゝ道いとあしければ、鐵道のかたこそよからめと、車引くをのこどものいふよ

せんかたなくて、七時廿分までこゝに待ていでぬ。八時十五分仙臺よつきたり。廿五日空くもれり。今日い仙臺のうちを見んとて、永見のきにければ、ひるけたうべて出ぬ。まづ東照宮よ詣でそれより林子平の墓にまうづ。こゝい市の西北の隅なり。又ゑはせ川、國分町をみ、芭蕉が辻をすぐるころ、雨ふりいでければ、かへりぬ。廿九日なほ空はれず。九時ごろより永見の案内よて、市の南なる川をわたりて、すこしのぼれば、こゝい舊伊達家の廟なりけり。瑞鳳寺といふ。こゝよも正宗卿の像あり。み堂をめぐるよ、たくみのわざいとこまやかようるいし。廟の南側にい、殉死の士の墓二十一あり。そゞろよ昔のことゞもおもひ出られつゝなかむるをりから、あめふり出ければ、いそぎかへりぬ。また今日い松平ぬしよりつゝじが岡よものせんと、かねてちぎりおきぬれば、ひるけたうべて二時より出ゆきて、三時頃よ松平のうち君もろとも、つゝじが岡よいでぬ。梅林といふ樓よのぼる。人あまたつどひ居ていとよぎいゝし。雨ふりをれば年ふりたる古たり櫻のいとおほきなるあまたあれど、下蔭に立出がたきこそいと〳〵口をしけれ。

みな人の心も今日いうちとけていとおもしろき糸櫻かな

日のくれんとすれば、あかぬものからかへりぬ。廿七日空はれたれどもほ雲たちまよへり。明日い東京よかへらんと電信よて云らせたり。永見とともに、十時ごろよりいでゝ、翡翠館といふよものして、もろともよひるけたうべぬ。こゝの庭に梅の木あまたあり。花もまたのこれり。櫻も盛よこゝかしこよみえたり。

ちりはてし木蔭をすきてけふい又花の盛をみやぎのゝ里

とくちずさみつゝかへる。松平ぬしへ立よりて、あすいたちなん事をつぐ。永見をもとひて、老たる人よわかれをつげてかへりぬ。廿八日くもりたり。つねよりもとくおきいでゝ、朝けたうべしころ、永見夫婦子どもきたれり。なごりのいといたうをしまれて、

いつかまたわひおむ事をまつ島の松よちきりて立別れなむ

いかよせんなごりをしまの浦波の立かへりゆくけさの心を

かうかきつけ、鎮子よわたして、七時三十分の瀛車よものせんとてたちいづ。おれる人これかれ、停車場までおくりきて立わかれぬ。程もなくゆるめきいづれば、今見しかげもおく、うしろざまよおりゆくこそあかぬ心地せらるれ。十時二十分に福島よつく。みちすがら、桃もさくらもはおといふ花いみな盛おり。いとひろやかなる川所々よみゆるを、いかなる川おらんと問はまほしけれど、せの君とふたりおれば、きくよしもなくてうちすぎぬ。又此わたりの山々のけしき、えもいはずをかしけれど、名をとふよよしければ、歌もいできがたし。一時頃矢吹よきしよ、雨さとふりきて、遠山いみえずなりぬ。いとわひし。

別路の袂もいまだかわかぬよ雨さへいまいふりいてよけり

宇津宮より、元老院議官の何がし君ものり給ひて、せのきみとなにくれと物かたりし給ふ。異國人ものりて、いとにぎいいしくおりぬ。八時十五分に上野の停車場につきたるよ、我家の紋つきたる提灯の、三つ四つみゆるいむかひにとて待なりけり。いとうれしくていそき車にのりてかへりぬ。わづかよ七日の間の旅路のおもかげを、後のおもひ出にとて、かうかきつけぬれど、世のつねの旅よいやうかはりて、はしりゆく車のうちのすさびなれば、をかしき山河のけしきをも、かきうつし得ぬいかひおきこいちになむ。

はるけしといひしい昔道の奥も一日にかよふ君が御代かな

金絲鳥

竹屋雅子

上

日頃ふりたる雨名殘なう晴て、朝風いとなつかしうふけば、前栽よおりたて、草葉の露折拂ひなどしゐたる折しも、幼きものゝいとあわたゞしう呼ぶよ、何事ならんと驚ろきみれば、美しき小鳥をもちて、これ見たまへ、今からすのとらんとせしを、乳母のとらへつるなり、とく籠に入れてよ。よげなん。とく〳〵といふに、ありあひたる籠に入れて、つく〴〵見るに、此鳥いかゐりやといふ鳥よて、いとよくなれゐたり。こゝ近きあたりの飼鳥のよげ出たるならん。失ひたる處にていさぞなありかもとめつらんと思へど、尋ねありかんよすがもゐければ、せん方なくて、今一つをもとめて、同じ籠よ入れ置たり。又の日稚きものゝ例よりゝ朝とく起出つれば、今朝いかよかくとくゝおきつるぞと問へば、小鳥よおくれぬやうとく起たるなりとて、それより日毎よとく起出て、學校へも樂しげよゆき、歸りてゝ、近きあたりに生たるはこべといふ草摘きて、あたへなどし、よき友得たる心地にはごくみひたせるもいとをかし。かくて日をふるまゝに、今ゝ鳥もいとよくなれて、稚き人の手より與ふる餌をたうべなどす。風涼しき夕ぐれゝ、鳥も心地よきにや、ちよ〳〵とさへづる傍よ、稚き人のなまおぼえの唱歌を口ずさみうゝ、遊びをるをみて、よそめにゝはかゐき事なれど、親の心よゝ、

下

年もいつしかくれて、花鳥の色音の春も立ぬれば、風のどかなるゐした、花の香吹おくる夕べなど、聲おもしろくさへづるよ、童ならで大人さへよき慰とぞおぼゆる。かゝるほどに、いつしか雌鳥のすよこもりぬれば、いと嬉しきよ、子三つうみたり。卵わらんほどをいつしかと待侘ゐたるに、かへりてやう〳〵大きくなりそめて、今ゝ餌をふくみて、傍にもてゆきぬれば、いと嬉しげよ、まだねびとゝのはぬ口つきよて、ちよ〳〵と鳴を

例の稚なき人の見て、かおりやの子い、母に餌をくゝませてもらふに、わらはゝひとりゐて何ゐてもたうぶおど、いと〳〵ほこりかゐいへば、小鳥とても、をさなきほどゝ母鳥の、かく心をつくしてはぐゝむものなるを、人にありてゝ、猶一入母の子をおほしたつるくるしみいますものだ。そこととても、今年五つゐなるまでの母の心づくしい、いひつくしがたし。されどやう〳〵人となりぬれば、親の恵を打忘れ、おのが心のまゝゐ打ふるまひて、遂ゐゝ人ゐ思ひあなどられ、親の名をおとす子もあり。いとけなき程より、親の恵をゆめ忘れず、何事も親のいふがまに〳〵そむかずして、庭のをしへいちじるく、世の人ゐまさりておひ立んこそ、親の恵に報ゆる道の第一なれなど、いましめきかするに、きゝ知りたるおもゝちゐ、打うなづきぬるも、又いとあはれゐてなん。

うたゝね

岡田煉子

朝まだきよりかきくらしふる春雨に、心も結ぼゝれていとつれ〳〵あるまゝゐ、さいつ日師の君のもとよりかりつるうつぼものがたりをゐみはしめぬ。こゝ我國の物がたりどもの内ゐても空穗竹取とならびたゝへられ、ことにふるきものゐて、俊景といへる人、波斯國にさすらへ行たりし事などをいとをかしうかける物なりと、師の君ののたまひつる如く、よみゆくまゝゐ、彼人のさま〳〵あるいみじきわざをあさましと思ふゐつけても、まづ兄君の事思ひ出られぬ。さてもきのふといひ今日とくらして、あすか川おかれてはやき月日といひけんごとく、かへりみれば横濱ゐて、かたみに名殘を惜みつゝ、袂を別ちしゝ、おもかけゐうかびてまだ昨日のこゝちするゐ、はや三年ゐなりゐけり。されど八重の海山をへだつれど、へだてぬものゝはちからのなさけゐて、月ゐ一たびゝ

かならずかきておこせ給ふ玉章の來ぬるうれしさ、母君もろともくりかへ〳〵うちひらく度ごとに、心つよく立出給ひしものゝ、たゞ一人ことと國よ物まおび給ふ心の中、さぞなわびしくおはすらん。されど俊景の如く、さま〳〵のくるしみよあへど、たへがたのびて名をあげたるためしあまたあれば、今のくるしみの後よ顯るゝ榮よこそと思ひなし、志をとげて一日も早く故郷よ歸り給いまはしと、あけくれよ西の空のみうちなかめられ、寒きにもあつきよも、いかよおはすらん時のさはりよかゝらせ給ふ事のなきやと、夜となく日となく、心よかゝりて、ゆびをりかぞへつゝ一夜を千夜のおもひよまちあかすを、兄君も同じ心よ、東の空あつかぎう、母ぎみのうへ、わか事をも思ひ出ねたまふらんおど思ひをるをりしも、電報來れりといふ聲のきこゆ。いづこよりのぞといそぎひらき見るよ、あなうれし、五とせの後よあらねば、かへりきたまはぬ兄君の、いま横濱よつき給ひたるよしをかきたり。あな嬉しといそぎ母君よきこえたまねらせ、いでやもろともに御むかへよものせんと門にいづる程に、母君の、おゝやらん小さきものを、わが傍よおきて、たちさり給ひぬ。あないぶかし。あなもどかし。とくゆくべきを、母君のいづこにぞ。いづこにぞといふ、我聲よ驚けば、わが身の猶机よむかひて、ひらきたる俊景の卷の上に、一ひらの文をうちのせあり。あまりの事よ、ぎばしいものをも得いはで、ゐたれど、さてゝ兄君の事を思ふあまりよ、うたゝねのゆめよ見つるよて、電報ときゝしい、米國よりの兄君の玉つさを、母君のもち來りたまひしありけりと、心の雲もはるゝ折から、園生のおくよらうたげなる鶯の聲のきこゆれば、まどおしあけてうち見出すよ、春雨名殘なう晴わたりて、三日月のかげ清うほのめきいでぬ。

信綱云、煉子ぬしの兄平太主ゝ、我親しき友なり。一昨年の秋、物學よ米國よ物して、今猶ボストンの大學よ入れり。今此の文を見て、思ひやる心もあはれつくゞとふるあめりかの旅ゐいかよと

懷舊

朝山元子

昨日までふり續きし雨の、今朝い名殘なう晴わたりて、日影うら〳〵と打かすめるに、門をゆきかふ人の、例よりもよきいゝしきやうなるい、花見にと出ゆくなるべし。今しも親しうする人の來て、上野隅田の櫻、今を盛と咲そろひたれば、ともよ物し給いずやなどそゝのかすに、母も、去年い雨がちにてえ見ざりしかば、今年はとて弟と妹とをうちつれて、共よ出ゆき給ひぬ。跡にいおのれ一人殘りて、いと物さびしきよ、かたへよありし源氏物語をとりいたして、はじめの方をひらきてよみもてゆくに、「父の大納言いなくなりて、母北の方なんいにしへのよしある人よて、親打具し、さしあたりて、世のおぼえ花やかなる御かたゞにもおとらず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、取たてゝはかゞしき御うしろみしなければ、事とある時よい、猶よりどころなく心ぼそげなり」。とあるを見るに、我身よ引くらべられて、そゞろよ更衣のうへも思ひやられおぼえず机の上よ打ふしぬる折しも、幼稚園よ通へる妹の友どちの、幼なき子とひ來て、妹をよぶ聲のするよ、其まゝ立出んとしたれど、心づきていそぎ袖もて涙を打ぬぐひて、妹のものせぬよしをいふに、物たらぬおもゝちよて、去ばしたゝずみゐて、さい歸り給はんまで、待ち侍らんといふさまの、いとらうたければ、くだ物などあたへて、何くれと物語るよ、いといたう打とけて、とやかくいふさまの、思ふ事なけに見ゆれば、さきの悲しさも打わすれゐたるよ、何よまれ、繪などやうの物、みせて給べやといふよ、かたへなる手箱をひらきて、さま〴〵の物とり出しついでよ、一二枚の寫眞を見出ぬ。誰のよかと取あげ見るよ、先よ悲しく慕はしく思ひゐたりし父君のなれば、又一しほの哀うかび出て、物をもいはず打まもりゐしよ、かたへの女の童も手よ取見て、こい誰が寫眞にかと問ふよ、悲しさいや增りて、そい我父のなりと答ふると共に、つゝみかねては

ろ〳〵と涙のこぼるゝに、をさな心地よもいとはしとや思ひけん、かくまちても歸り給いねば、又こそとて、とゞむるもきかで、歸りゆきぬ。今までいこの幼なき人と物語もし、笑ひなどもたりしを、いとゞさうゞしうなりて、たゞかの寫眞をつくゞと打見るに、顏なども更よおとろへさせたまいず、ゑましげよ寫させ給へるさまの、今めのまへよ逢奉る心地せられて、なつかしさせん方なく、世にい、父母、さてい祖父祖母の君も打そろひたる人のあるに、いかで我のみい幸なきにか、あいれ世にいまさば、月をも花をも諸共にめではやさましを、あいれ昔を今よなして、今一度此世にかへり給ふ事もあらいと、賤のをたまきくりかへしつゝ、いとせめて戀しきまゝよ、かひなき歎よふしゑづみぬ。されど思ひかへせば、世よさちなきものい我のみならず。幼なき時よわかれて、父母の顏を知らぬ人も、かぞいろはらからも、よるべとする親族もなくて、朝夕の烟をたてかぬる人だよあるよ、我身い父こそいまさね、母もいまし、兄弟もありて、何一つ心にかないぬ事なければ、たゞ父君の世を早くしたまひしのみい、佛の道よいふちん前の世のすぐせと、思ひなさん外いあるべからず。又昔い寫眞といふものなかりしかば、うせにし人の姿を、いかよ見まほしう思ふとも見る事かなはざりしよ、月よ日よ開けゆく御世と成よしかば、かゝるものも出きて、言葉をこそ出したまいね。みるめのまへよなき父にもあひ見るい、かく便よき御世に生れし身の幸と、いと嬉しくて、ゑばしい悲しさも打忘れつゝ、庭の面を打見やれば、日はくれいてよけり。はや母君も歸りたまふべしと待ゐしほどに、門よ車の音とゞまりぬ。いそぎ出迎ふるよ、母君い心地よげに、花の盛なりし事、大路のらうがいしかりしさまなど語り給ふよ、かたへより弟妹も、ともに樂しげなるおもゝちよて、上野よ行しよ運動會のありてあどいふよ、悲しかりし心地もやう〳〵思ひのどまるほど、いつしか朧なる月かげ、窓のうちよさしいりたり。

寫眞

渡邊武良子

春雨そぼふりていとつれ〴〵ある夕ぐれ、かのもろこしの何がしの、旅館無人暮雨魂とかいひけん言の葉など思ひ出づるをりから、ふるさとなる母君のもとよりふみきたりぬ。いそぎひらき見るよ、いさゝかつゝみあう居給ふよしあるよ、まづいとうれしく思ひつゝよみもてゆくよ、我眼の病の様などこまゞ〴〵とひ給ひ、あしき風などに冒されぬ様よ心せよ。又都にとゞまる事の、思ひかけず長くなりしよ、近き頃うつ〳〵つる寫眞あらば、送りおこせよとありぬ。例ながら嬉しきかずゞ〴〵の言の葉に、ひとしほ去たいしう覺えて、手箱に入れて持來り〳〵母君の寫眞をとりいたしみるよ、去年うつしたまへるを、十年ばかり前に寫したまへるよくらぶれば、おなじ人とも覺えぬまで、年老い目などもくぼみ給ひて、いといたく心つかひし給へるさまの去るきよ、これもわれらの爲にやと、

いと堪がたく覺えぬ。ついでよ我幼き時うつしたるが、二三枚あるを見るよ、乳母よ抱かれつゝ、思ふ事あげよ打ゑめるゐ、三歳の時なりしとかきゝぬ。教へられしまゝに、目を見はりたるさまの、たとへかたなくをかしきよ、おのれも一度はかく幼き時のありしよと、今更よ父母の御恵の深きを思ひ出ぬ。又羽織をゆがめるまゝにきて、かみのおくれ毛かきあげもせず、打みだれたるまゝにて、さびしけなるおもゝちせるゐ、十二歳の時、甲府なる學校よ入りて一月ばかりたちし時。うつしゝなり。なにくれとなく、心づけ給ふ母君のもとを、初めてはなれて、よそ人の中に入しさまの、一めに去らるゝよとて、姉君などの笑はれしが、今見るにげにさなりと思はるゝもをかし。又髪ゐ上卷とやらんよ結び、くつなどはきて立るさますべて男のよそほひせしい、男とやいはまし、女とやいはまし。こゐ、今より三とせばかり前にうつしゝなり。此時は、女にても、物まあびする者は、男の様ならではとの心のまよひより、ことさらに異様あるさ

ますることの世よ行はれて、心ある人々のうちなげきーよ、おのれもその一人となりーこそうたてけれと打悔ゆれば、いといたく恥かーきよ、みるたび毎よやりすてんとい思へど、後のいまーめよとて、殘しおきつるなりけり。されど此寫眞のみい、母君よい今まで見せまゐらせず、かくしおきたりき。かくおのれひとりよりても、顏のかたちの變りゆくにつれて、心もともよ變りもてゆくを思へば、人の心のおのがしゝことなれるもことわりおりかー。去かいわれどもたゞ子を思ふ親の心ばかりい、人いさらなり、鳥けものまでもひとーきい、いとあやしくたへなる物よこそ。さて母君のもとよい、昨年の冬、師の君のもとよ、同じく歌文の敎をうくる友垣とゝもようつーゝをこそとはやくより思ひしかど、さきよはへる都の花の中よ、み山木のたゝ一木たちまじりーなれば、きはだちていや去らみゆるが、われながらやさしう、今まで送らでありしに、又思ひめぐらせば、母君いたゞ愛といふ一すぢの目よて見給へば、わが姿のひおびたる事よい心づき給いお。たゞかくみめかたちみやびやかよして、學の道よすぐれたまふ人々とともよ、日ごとよ師のきみの御敎をうくる事をば、いかようれしと喜び給ふらんと思ひて、かたへなる母君の寫眞をみれば、さおりとほゝ去み給ふさまのみゆるよ、明日いとくおくりまゐらせんとおもひさだめつ。とかくして打みやれば、雨いいつの間に晴にけん。まだとぢやうぬまどよ、さしいる月のかげ、いとなつかしければ、おいれ、とみそらはるかに打ながむるをりしも、ふるさとをさしてかへる雁の、かすみがくれにいそぎゆくがほのかにみえぬ。

信綱云、此文中に、師のきみのもとよ云々とあるい、昨年の冬、わが竹柏園よ物學よきたらるゝ人わまたと共に、うつしゝ寫眞をいへるなり。

庚子道の記

武女

女い境を越えずとこそ、古きふみにもいへ。されどそいうるはしき人の上なめり。あまの子のよるべなき身い、さそふ水まにまかせて、西へ流れ東へさすらひて、つひのをはり定めかねぬるぞ、哀まあさましきわざなる。去かりとていかゞいせん。此春い、故郷の東の花にもよほされぬ。七年あまりなれし人々のなごりも大方ならねど、猶親のいまさん方に心いそがるゝを、かのうちとけて去のぶ顔なる心まなんあると、人の思ひくたさんもさすがまやさしう、はたわづらはしきすぢなりけり。かくいふまでい猶尾張の國名古屋なりき。二月廿日あまり七日の、あかつき深く旅だちしま、細うかすかなる月の、かすみの底に見えたるれいよりもことにあはれなり。

あすも又見つゝをゆかん月ながら此あかつきい涙おちけり

熱田の鳥居濱よいづるほど、夜あけよけり。井戸田といふ所い、いよしへやごとなき人の、ゑばしすみ給ひしわとなり。琵琶の音に神のめで給ひけんなどいとかしこし。鳴海をすぐとて、

うきよさへ馴てなるみのあまたゝび浦の濱路を行通ひぬる

といいへど、今い浦づたふ道いおきて、上野の道の、なほうへをゆきかふ事になんなりぬる。尾張と三河とのさかひ、志香須賀といふわたりせしよし、古き道の記どもにかけれど、今いさるわたりありとも見えず。境川とて細き流のあるよ、土橋ひとつかけたり。これまでおくりにとて來し人のかへるよ、尾張にその人のもとにとて、ふみかきてつく。

うかりしも今ぞ戀しき去かすがよ住こし里を出ぬと思へば

年頃尾張をすみうくのみ思ひしに、三河にかゝるほどい、さすがに名殘もをしかりけり。ふみの言葉よも、心ざす故郷にとくつきてゐどかきしを、れいのわびしき心よと、あとよさへいふなるべし。八橋い中將のいこひ給ひ一所なり。今も杜若のさくよかあらん。道のついでならねバよそよなーてすぎゆく物から、

杜若へだつもあやー心よいかけつるものをぬまのやつはー

二むら山いあとなりけん。宮路山い此あたりなるべけれども、矢矧の里すぐるほどより、名さへなつかーからぬひぢかさ雨とかふり出て、簑つけし馬いづらなどずさぐも立さわくほど、いぶせきこのうちよありけれバ、物もおぼえず。藤川といふほどより、日もくれしなるべー。御油のすくに雫すがりてつきぬ。こゝよいい女どものあまたありて、たはれをの心とるけーきあり。難波わたりなどうたふにもあらで、たゞだみたる聲して、さかしらよくちとあるものいひきこゆ。

おのづからみもひたゝけぬ旅やかた耻ーと思ふ人しなければ

あなかま、女のほこりかあるい、人のよくむをといふ。廿八日つとめて御油をいつ。よー田といふ所の橋をわたれバ、左にをかーき山の見ゆるを、

人よとへば、石卷山とぞいふ。このあたり去り給ふ君の上に、もゝ不思議の事あらんとていゝ、此山のあることありとぞ。草のかき葉も言やめし世にあることよかはと、あらがうてすぐる人もあり。高師山は、文字よかきけるが、いみじう目だゝし。いづれの山よ何をかをしへて、さる名をばおひけん。又都さへまだゝと思ふよ、山の櫻さきたるもあやゝ。

道いそぐ遠方人もとまりけりたかゝの山のはあの去たかげ

潮見といへる坂の上よりい、遠江のうなばら、はる〳〵と見わたさる。たかし山ふもとの濱とよめるい、此わたりなるべし。馬おふをのこの語りけるい、十年ばかり昔のことなりけり。難波よりあづまへかよふ舟のありしに、此國菅の湊ちかくにて、あらき風よあひ、舟い岩よあたりてくだけつるよ、帆柱楫などのをれたるにとりつきて、十一人のりたるもの、一人も去づまで漂へるが、日數十九日經しとぞ。廿日にあたるあした、荒江の沖にて、釣するものどもの見つけて、あはれがりておのが舟にたすけのせ、關所にまゐりてかう〳〵と申しつれば、よくもつかまつりぬとて、おほやけまできこえあげ、祿などかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも、老たるがひとりおくなりて、殘りい皆事なくながらへつゝ、今猶難波にかへりすみて、とし毎にかの釣人のもとよ、せうそこしむくいすとなん。げよかばかりの不思議の命もある物よやあらん。濱名の橋はあとだよさだかならず。過來し里の名に、橋本などいふ所のあるや、昔の名殘ならん、板田の橋ならば、せめて桁よりもゆかんを、

名のみ猶きゝこそわたれ東路の濱名の橋はあとだにもなし

小宰相の君の歌よ、濱名川入しほとほき山おろしに高師の沖もあれまさるおりとよみ給へるも、此所なるべし。高師の濱、高砂の沖などい、和泉にあるをぞ歌にはよめる。また濱名の橋は、入江にかけられし橋なれば、濱名川とよみ給へるも、いかにぞやなどいふものゝありし。さばれ下れる世の人の、いかで古の事をばさだむべき。荒江、舟にてわたる。今日は風

もなく、わづらはしからず。唐に賈島といへる人の、幷州といふ國に久しう住おれて後、都にかへり上りける時、桑乾といふわたりすとて、思ひつゞけたりしから歌の、今身の上よわひたるをふと思ひ出て、いといたうあはれにて、いくたびかずじけるよ。文字いつゝむつかへたれば、わろう聞ゆるもひとつは興あり。

客舍尾州巳七霜、歸心日夜憶東陽、無端更渡新江水、却望尾州是故鄉、

かくずゝるをこなりとて、舟こぎりてわらふ。何かさのみゝおとしめ給ふらん。才も不才も、皆故鄉ひとつはもたるをといふを、又わらふもをかし。まひ坂よつきぬ。猶ゆき〳〵て引馬の宿にやどる。

姫小松ひくまの野べのかり枕げよねのひする人ぞおほかる

道につかれて人々のいぎたなくふしたるを見て、忍びやかよかくつぶやけば、例の口さがなさよとて、今霄もせいす。引馬野ゝはやくより濱松ともいふなり。げに濱べよ松どものおほくおひたりしが、風にふかれてさゝとなる音の、いみじうめでたくきこゆ。人のかしづく聟君おどの來り給ふよ、酒のみたちて濱松のおとといと、をのこどものうたふは、此所よりの事おらんかし。

濱松よあらしふく夜ゝことさらよ大君きませいざ二人ねん

女ともだちのわかくじちえうおるゝ、顏うちあかめて、猶わびし、かゝるそゝろごとゝ、源内侍おどこそいひつれとにくむよ、あらず、世の常の人こそ物はぢゝすべかめれ。あそびのものゝ上らうらしきゝ今樣ならずとて、みさかなよ何よけん、あゝびさだをかかせよけんとうたへば、何よつけても皆をかしやとて、ほゝとさへわらふ。廿九日、濱松を夜深よ出ぬ。雨ふり出て、よこざまにしぶくめり。あけぬほどわびしさいゝん方なし。天龍川わたるとて、

舟さして雲のみをゆく心地しぬ名もおそろしき天のなか川

圓位上人のはづかしめられ給ひけん昔人いいかよ、棹のさづくおらで

も袂いぬれぬべし。見つけのすく、
さらでだに毛をふき疵を求む世に見付といへる里の名ぞうき
懸川葛布おほし。
かけ川にさらす葛布かずならぬ身のうゐぎにといざ求めてん
承久の昔を思ひいづるに、菊川いとあはれありや。袖にきかぬるとよめるうたのあるに、けふい雨さへふりて、げにわたくしの旅あらばやどらまほしきなり。
今々なほかやが軒端に雨もりてむかしおぼゆるきく川のやど

（以下次巻）

伊香保記行

弓屋倭文子

うら〳〵と明るあしたよりしもよ。物のけはひ改まりて、大路もはるかに霞むものから、さよう見わたさるゝに、ふりはへつゝ行かふめる袂どもの、とり〴〵になまめかしうおぼえて、先こそ野邊の遊いゆかしけれやう〳〵咲と見し間に移ろひもてゆくを詠めつゝ、さる花のこゝろのいそぎを去る〳〵も、菅の根の長き日かげにならひて、物おだしうよろづの事を忘るゝ樣にて、いたづらにのみ過いなんい、あやなのわざなめりと思ひとれど、遠き野山を分んことい、去らぬ霞の心もおぼつかなくてあるに、猶おもひたつ事のあるついでに、上野の伊香保なる温泉あみてんとて、母とじのそゝのかしともおひ給ふれば、やよひの十日まりひと日になんいてたつ。又親どかいふべく覺ゆるわたりより、伊香保風ひき給ふおよ。なほ雪もきえぬあたりといふをおぞありて、

野べいまだ夜半の春風さむからしはゝこの草の枕からすな

とあり。げに三日の餅も時すぎつれば、今い假寐の枕よやと思ふもをかし。人々心ばへあるも多かりけれど、村鳥の立のいそぎよは、かなき跡をも止めず成ぬるいわろかりき。ちゝのみのさりげなうもてなし給ふがさらなれば、糸よる物あらなくに、そがひに心ひかれつゝかへりみすれば、木ずゑほのかにかりよたるを、たゞことに、

父よ別れ母よしそへる心をばゆゞとやいはん歸るとかせん

といふ程に、いつしかも田舍だつ家居の、おろそげなるたか垣も珍しう武藏野ゝ菫の色こき所也けり。見はやしつゝ行よ、おのがしゝ一夜ねぬべしなどゝいへど、こゝゝ過て大ゐてふ驛よ宿りぬ。朝けの駒の鈴の音してゆくゝ、われもいさむこゝちせり。むかしおぼやけより給ひたる、を鳴しつらんがうつりて、さらぬ馬どものかしらよ、ちひさくてかくるよやと、去らぬことをいひさだむるもをかし。そら少しわかりたる程、春の野のわさ露に、淺みどりなる梢どもの、ほの〴〵と霞わたれるゝ、たとふべきものなんなき。人めなげなるかきほの櫻の、わびがほなるつろふがをかしうて、まもりゐたるを、あるじとおぼしくて、手あふれそといふべきけしきしてゐめるを、をこになりて、

惜むともたゝん嵐ゝいかよせんちる花毎に手をやさへまし

と覺ゆるも、いつの程よか道ゆき人の心よゝ成よけん。入間の川を渡りゆくに、山寺の鐘の音聞えて、哀なる雲のまよひに、いかで遲れけん。ほのかよ聞ゆる雁がねを、人々哀がる。

われよゝ田の面の雁もわびぬめり心よりよしみ吉野の里

となんいひて、坂本といふ所の山の尾上よ、山吹のいみしう咲渡りて、岩間ゆく水の音なひも、こよなう心ゆくけしき去たれば、人々よりて結びなとす。猶かくてやゝとてゆくに、もとより道去れる人しもおくて惑ひたりけり。遠近人の行かひもあらず、山人の妻木のみ此處かしこよこり

すてたるが、すゞろゝ覺束なく心細し。只鶯のそこはかとなく、この深き方に鳴を、かゝる折ゝ呼子鳥こそ、便ある心地せめと人のいふに、げゝ人〳〵と厭ふゝ、ことの外の心ゝも有かなゝど、よしなしごとゝすれど、たつきも去らぬとのみとおへられつゝ、それが中ゝ年有が

來し方もこの行末の奥山のおくゝも春のうぐひすぞなく

いたくなわびそなどいひつゝ、男どちゝ事ともせず。たどりまどひて里ゝ出つ。午霄ゝ去まぶの寺ゝ籠りぬ。日數と共ゝ、尊き御寺ともを行めくるが、峯高く谷深けれゞ、心搆すれど、路の狹き程は、あまたゝびほと〳〵去きにも、經の聲々山ひこも答へあひて、いとこそ物の悲しう覺ゆる折おれ。こたびゝ此寺々のみ佛の顯(あらは)ゝ拜まれ給ふとて、ありとある人、老たるも、若きも、杖を頼もし人ゝてすがりたる、よそめもいと苦しきや。暮行ほど、去ものかげもりゝ宿りなんとす。妙見山といふ峯より、望の夜の月さし昇りたるゝ、此世の物とも覺えず。母刀自、

春の夜の花にはへる月かげのたへなる光いまこそゝ見れ

年有、

嶺高き霞のひまに影もりのさとの名しるきはるの夜のつき

ゆき〳〵て笹野といふ寺ゝもなりぬ。此御佛ゝつかうまつりつる殿ゝ、迎へいれ奉られ給ひてしよなど、覺えつるまゝゝさゝやきたるを、そこなる法師のとく聞てさらゞとてかの姫君の御ためゝ、奉られ給ひし御はたや、何やととう出けるゝ、いみじうあゝれにて、有つる御樣つぶ〳〵と思ひ出るも胸ふたがりぬ。

露ふかきさゝ野の奥ゝわけ入てけふはた袖をぬらしつる哉

とおぼゆれど、かの耳ときがうるさくて、ことゝも出ず。おはかたに物して立ぬ。きく水寺といふらむあたりたひらかなるゝも、みな人なやましうて、あしゝ山邊なれど、千鳥のあとふむらん樣ゝてぞゆく。水詠てふ寺ゝおひづるてふものをさむるとて、ゝ田舍めいたる女の、ひとつ所ゝ

よりゐてさへづるが、かしがましうむつかしかれば、こゝもさるべき程
よていでつ。渡瀬川てふ川い武藏と上野のあいひよぞあなる。をち方の
雲よまがひてみゆるい、去なのある淺間のだけと、この心ざすなる伊香
保嶺也となんいふ。いづこともなく遠きさかひの名どころとのみきゝ
つるを、かくみやるぞあいれなる。來と來てみやうぎのをやまよまゐる。
きねがつゞみおとあやしう、をとめ子が打ふる袖もゆゑよしありげに
いみえねど、さすがよをかし。立出なんとするよ、今もふりぬべき雲のけ
いひすれば、雨づゝみしおど人々のゝしり聞えて行に、いづこともあく
風のさそへるい、いかにやなどいひて、ふとみやるよ、足曳の遠きちかき、
雪とおぼしきまでのさくら也けり。さとふく風にみだるゝい、空にしら
れぬなどいいれて過もやられぬを、人い暮ぬめりといふ。さかし。かづら
ぎの雲かい、いかでなどいひしらふ。

散花をころも手ごとよつゝみもてかゝる山路の思出よせん

とおぼゆるまゝよ、つか短き筆をとうでゝそこのいしよ書たるを、とじ
も其かたへよ、

よしさらばちりかひくもれ櫻花やつるゝ袖の色よはふまで

道もたど〳〵しかるを、思ふ花よよりていうらみやらで、やゝ里よなり
ぬるほど、雨すこしふりいでゝ、行さきうしろめたしとて、そこなる伏屋
に、いかにぞやあどいなめど、しひてとゞまりぬ。ましばの垣ほもなにも、
やれくつがへりてかげあらはなるよ、軒さへもりていとわびし。ふけ行
まゝよ玉水あはれよおとするを、ならはぬさゝ枕いいもねられず。いと
ゞ袖のいとまなきこゝちして、誠ようしとおもへば、去のゝめの空もま
ちあへずていづ。あきまの里てふあたりい、夢のやうよてすぐ。榛名の山
いいとかみさびにたり。ゆびをたてたらんごとき、いはほおほくて、峯の
よそめなど、繪にしもまだ見去らぬさまなり。かゝるところいとでおり
て、かちよりのぼるにえもたえねば、かたはらよりていこひゐたるを、

三人よたりによひつゝ登る女の、あな心うや。いづこばかりよりぞなど問ふが去たしまるゝゐ、足がらの關の山路ぞおほゆる。何がしがだけい霞みて烟も見わかず。いかほの沼と聞ゆるゐ、此わたりとかやいへど、去るべもなし。此おほがみのみたらしとて、いと〳〵大きなる沼のあるやそならんなど、人々おしはかりにいふめり。かくてゆあむべきところにいたりて、とかくするほどに更過たり。よべわびしくてやみのうつゝにて明せしかば、今いと打やすめたるものゐ、身じろきもせず。目たけておき出てみるよ、むぐらのあをうおひなりて、去どろあるかきねのなかばかくせるも、をりにふれてあはれなり。そともの梢どもの中に、さくらの一木まだちらでたてるを、みあ人花より外になどいひてまもる。年有が、

いかほ風いかなる人の敎へてか此花ばかりふきのこしけん

あはれなどいふ程よ、木のもとにわらはべあまたより來て、ながき去もとゞもをもて、うちちらすめるは、帳のかたびらおほはまくし給ひけんをさな子もおいせしぞかしなどいひて、人々にくむ。

吹風のさそはんよりもいわけなきこの下にちる花は恨みじ

とたはれごといいへど、心いゆくよしもわらねバ、二人三人立出て山邊をゆくよ、きのふみつる花はなかばまりちり過て、みどりふかくなりぬるゐ、春も暮はてぬめりとてみやるに、遠かたの峯のいと去ろきゐ、花にだにしもあらで、雪なりけり。

奥山は花よりのちの雪もあれば雪よりのちの花も見てまし

ふとおもふことを歌の樣にいひなせるを聞て、ある人みな月のもちまで待つけつとも、その夜またふらんにいかひなからましやなど、いひしろひつゝぞゆく。此かたへよある寺ゐ、ゆあみする人をまもりまず御佛の、おはすといへばまゐりたり。おまへよたんざくに書たるものゐとてとりて見れば、

秋深き山の紅葉をたとりつゝ手向んとすれば幣とこそちれ

となんある。おもはえずめづらしければかきつ。ゆくりなく雨のふり出つるに、あわたゞしくて立かへるほどやみたり。今ゝ衣かふべき時よもなりぬれど、猶ありしまゝなり。

けふぞとてかへなばさすがつゝらからん花の香ゑめし旅の衣を

ゑるしよなどおぼゆるもさすがよ旅のなさけ也けり。ある夜さり雨風はげしう物さわがしき心地するよ、神さへおどろ〳〵ゑうなり出たる、思ひかけねば打驚きて、堪ねばふとうつぶしたるまゝに、かしらの上とも何とも思ひあへず、ひし〳〵とゑつるゝ、たましひ今ぞうせぬると思へり。さてゑばらくひまあるにきけば、たゞ此すいがいのああたよおちたりけりといふに、恐ろしなどゝいふも更なり。世の常よだにもあらず。かうしも人少なかれば、よるゝすがらよ心きものきえうする事あまたゝび也。朝げにけしきやみたり。見よといへば、はしよ出てみるよ、かなたの嶺ゝ墨をすりかけたる様にて、雲の迷ふこそ物恐ろしけれ。さればよひるつかた又ごほ〳〵となりいづ。かくてゝとて家をさのすむ所へ、みなうつろふめるにも、すべて生たる心地やゝする。さるの時過る程にゝやみつれど、名殘猶けおそろしうて、おきゐゐん心地もせずなん。今しもさむき所あれば、大きなるひらゐろりよ、ほだとてかれたる木のふとらかなるが、長さ三尺はかりあるを、三つ四つ打くべたるが、あたゝかに火の起りて煙もなければ、人々そこよまとゐしてあめり。あるじの翁ひげをまさぐり物よして、うべがたりするゝうたてあれど、かゝる時よゝ頼もしき心地もせられて聞をるに、此湯の水上ゝ、こゝより見ゆる高根よりおつる水の、火石といひて岩二つあるにふれて、かく湯とあるぞ、いとあやしきなどいふのみぞみゝとめられたる。夕つかたそらも晴れたればもとの所よ歸るよ、かの櫻ゝいとあはれにみだれたり。

いかほ風ふく日ふかぬ日しのぎ來てあらぬ響よちれる櫻か

とぞひとりごたるゝ。今ゝくしはてゝわびしかれば、湯あむわざさへ物

うくて、されたるおばしまのつまの岩の上よおりて、つくゞと眺めゐたるよ、かへでの木の若葉色深くて立るは、

夏ごろもかへて程なき旅ながらうきめよあきの色をこそみれ

とのみぞおぼゆる。からうじて八日よ立出づ。そこらの家どもの軒に、みゑ藤の花をさしたり。此里にはいつもかく習はしたりといふ。げよやうかへて時鳥も聲もらしぬべき物ありけり。けさの空けしきよからず。

浮雲のかなたこなたに立迷ひおぼつかなくもいづちゆくらん

といいれたるを、誰もさ思ひわぶる程よて、人々あはれがりけり。

（以下次卷）

明治廿四年五月廿七日印刷
明治廿四年五月廿八日出版

定價

一冊	金十二錢	郵税一冊四錢
六冊	前金六十七錢	御注文前金郵券代用一割增
十二冊	前金一圓廿五錢	毎年四回發兌
廿四冊	前金八十錢	

版權所有

編輯者　佐々木信綱
發行兼印刷者　大橋新太郎　日本橋區本石町三丁目十六番地
發行所　博文館　東京日本橋區本石町三丁目十六番地

博文館毎月定期刊行定價表

名目	發兌回數	一冊正價	六冊前金	十二冊前金	廿四冊前金	壹冊郵税
日本商業雜誌	毎月二回三日十八日	金八錢	金四拾五錢	八拾五錢	壹圓六拾錢	一錢
日本之少年	毎月二回一日十五日	金八錢	金四拾五錢	八拾五錢	壹圓六拾錢	一錢
日本之法律	毎月一回十日	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢
法學協會雜誌	毎月一回一日	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢
日本大家論集	毎月一回十日	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢五厘
少年學術共進會	毎月一回十日	金拾錢	金五拾七錢	壹圓〇八錢	貳圓	一錢五厘

日本全國小學生徒	筆戰場	毎月一回二十日	金五錢	金二拾七錢	五拾錢	○	一錢
尋常小學	幼年雜誌	毎月二回三日十七日	金四錢	金二拾二錢	四拾二錢	八拾錢	五厘
	婦女雜誌	毎月二回十日廿五日	金四錢	金二拾二錢	四拾二錢	八拾錢	五厘
	少年文學	毎月一回	金拾二錢	金六拾七錢	壹圓廿五錢	貳圓四拾錢	四錢
家庭教育	歷史讀本	毎月一回	金拾二錢	金六拾七錢	壹圓廿五錢	貳圓四拾錢	四錢
	通俗教育全書	毎月一回	金拾二錢	金六拾七錢	壹圓廿五錢	貳圓四拾錢	一錢五厘
實用教育	商業全書	毎月一回	金拾五錢	金八拾五錢	壹圓六拾錢	○	四錢
	世界百傑傳	全部完成	金二拾錢	金壹圓拾錢	貳圓	○	二錢五厘
	東洋文藝全書	毎月一回	金二拾錢	金壹圓拾錢	貳圓	○	二錢五厘
	日本文學全書	毎月一回	金廿五錢	金壹圓三拾五錢	貳圓五拾錢	四圓七拾五錢	三錢
	日本歌學全書	毎月一回	金廿五錢	金壹圓三拾五錢	貳圓五拾錢	○	六錢
近古文藝	温知叢書	毎月一回	金廿五錢	金壹圓三拾五錢	貳圓五拾錢	○	六錢
	日本法典全書	毎月一回	金三拾錢	金壹圓六拾錢	三圓	○	八錢
政治經濟法律	講習全書	毎月二回	金廿五錢	金壹圓四拾錢	貳圓六拾錢	五圓	三錢
	博文館叢書	毎月二回又ハ三回	金廿五錢	金壹圓四拾錢	貳圓六拾錢	五圓	三錢

發兌

●御注文ハ一切前金ヲ要ス●郵便切手ハ一割增トス●郵便爲換ハ「今川橋郵便局」宛ニテ振込ミ請取人ハ「東京日本橋區本石町三丁目博文館」ト記入アルヘシ●一時ニ金五圓以上御送附御注文ノ方ヘハ館友證ヲ呈スヘシ●館友證ヲ所有スル諸君ノ御注文ハ總テ定價ノ一割引トシ其他ノ發行書籍ハ通常賣價ノ一割引トス●住處御移轉ノ際ハ書目及新舊住所共御報知ノコト●書伏ハ可成明瞭ニ御認メノコト●毎月一回博文館發兌月報ヲ發行シ館友及御望ノ諸君ヘ呈ス

貴族院副議長從二位東久世通禧公題辭　佐々木弘綱岡野伊平両大人著

●假名遣枕詞字典　全壹冊洋裝　正價金五拾錢　金字入美本　郵便税八錢

東久世伯爵。近衛公爵兩公題辭　高崎御歌所長題咏　佐々木弘綱大人撰

●千代田歌集　全二冊　洋裝美本　再版正價金四拾錢　郵便税五錢

東久世伯爵。近衛公爵兩公題辭　本田男爵序文　佐々木信綱大人纂輯

●日本文範　全二冊　洋裝美本　三版正價金四拾錢　郵便税五錢

權掌侍税所敦子君序文　佐々木信綱君著

●日本婦女用文　全壹冊　洋裝美本　再版賣價金廿五錢　郵税二錢五厘

佐々木弘綱大人著

●歌文要語解　全壹冊　和裝美本　定價金五拾錢　郵便税四錢

佐々木弘綱大人著

●古今和歌集序　全壹冊　和裝美本　定價金廿五錢　郵便税二錢

第一高等中學校教授落合直文。小中村義象兩先生著　全壹冊洋裝　金字入美本　三版賣價金六拾錢　郵便税拾錢

●中等教育日本文典　渡邊前帝國大學總長題辭　福羽美靜君校閲　田中渙乎君編述　全壹冊　和裝美本　五版正價金拾錢　郵便税二錢

●假名交文典

日本文學全書第拾三編第十四編發兌廣告

小中村義象、落合直文、萩野由之三先生校訂

榮花物語

榮花物語ハ上中下三卷ニ分チ發兌全部完了ス
全部紙數壹千二百頁
正價七拾五錢郵稅九錢

中卷　五月十五日發兌　目次

日蔭のかつら●蕾花●玉村菊●木綿四手●朝綠●
うたかひ●本のしづく●音樂●玉の臺●御着裳●
御賀●後悔大將●鳥の舞●競馬●若枝●嶺の月●楚
玉の夢

（以上拾七部讀切）

●上卷目次（月宴●花山●さま〳〵のよろこび●見いてぬ夢●浦々のわかれ●かゝや次〳〵く藤壺●鳥邊野●はつ花●石蔭　（以上九部讀切）

この物語い、村上天皇の御代より始めて、堀河院の寛治四年の頃までの事どもを記せり。この書、物語とはいひ、竹取、伊勢、源氏おもの類よいあらで、全くその事實を記せるものなれば、啻に文章として見るべきのみならず、史學研究の上より觀察するも、裏面より歷史の眞相を窺ふ最好の材料と爲すに足る、あはれ世の日本文學ゑ意を注ぎ給ふ人いいふも更なり、さてい史學ゑ志あるもの、必ず坐右に供ふべき良書といふべし

佐々木弘綱。佐々木信綱兩君校訂標註

日本歌學全書

全部拾二卷紙數五千頁　毎月一冊一ヶ年間完成●毎編貴顯大家石版題辭挿入

正價一冊廿五錢●三冊前金七十二錢●六冊前金壹圓卅五錢●十二冊前金二圓五十錢●郵稅一冊六錢宛

第七編　五月三十日發兌　目次

新古今和歌集　自讃歌　鴨長明集

（以上三書讀切）

●第一編（再版）正一位公爵三條實美公題辭目次●今古集●躬恒家集●友則家集●貫之家集●忠岑家集（五書讀切）

●第二編（從一位金鷄間祇候福羽美靜公序文●忠熙公題辭目次●後撰集●元輔家集●能宣家集●順家集●天德歌合（五書讀切）

●第三編（從一位文學博士小中村清矩君序文●拾遺集●紫式部家集（四書）

●第四編（權從一位侯爵嵯峨實愛公題辭目次●公任家集●清少納言家集（讀切）

●第五編（正二位勳二等侍稅所敦子君序文●後拾遺集●相摸家集●經信卿母集

●第六編（文學博士黑川眞賴君題咏目次●高陽院歌合（四書讀切）

（三書讀切）

●第三位從三位千家尊福君題辭目次●金葉集●詞華集

●第五位正五位千家尊福君題辭目次●千載集●永久百首（讀切）

●第六編（樞密顧問官伯爵柳原前光公題辭目次●堀川百首

●第七編（衆議院議員美濃部貞亮君序文●忠度集●後京極自歌合（切）

第一高等中學校教授小中村義象
第二高等中學校教授落合直文兩先生著

挿繪揮毫
松本楓湖先生

家庭教育 **歴史讀本**

毎月壹回發兌毎卷
記事讀切和裝美本
仕立彩色密畫挿入
正價金十二錢六冊前金六十七錢十二冊前金一圓廿五錢郵税一冊四錢

第一編既刊 **如意輪堂**（楠正行公の事蹟）**泉岳寺**（赤穗義士復仇事蹟）讀切二書
第二編近刊 **小松の雪**（平重盛の事蹟）**鬼界ヶ島寺**（俊寛僧都の事蹟）讀切二書
第壹編再版 **能袞野の露**（日本武尊の御事蹟）**裾野の嵐**（曾我兄弟復讐事蹟）讀切二書

新聞評（歴史讀本第二編）載する所泉岳寺、如意輪堂の二なり落合小中村の兩氏例の健腕を以て書かれたるもの事實は素より一點の卑猥なく筆墨淋漓亦光風霽月の觀あり古來義士と云へば先づ指を赤城四十七士に屈す而して他に義士なきに非ざるなり忠臣と云へば先づ楠公父子を擧ぐ而して他に忠臣なきに非ざるなり多年經營慘憺の結果として雪夜を仇首に屠りたるの歡び如何障礙途に横いり南風遂に競いざるを見て四條畷に命を授けたるの憾み如何共に世の志士仁人の涙を揮て遙に當時を追懷するの志を發揮するに於て大禅補なくんばあらず吾人い所のものとす是等の書兒童の忠孝仁義の志を發揮するに於て大禅補なくんばあらず吾人い此書の益す英を摘み粹を拔き常ら兒童無言の師父たらん事を願ふて止まざるものなり